佐賀県文化財調査報告書第160集

吉野ヶ里遺跡

平成11年度～12年度の発掘調査の概要

2004年3月

佐賀県教育委員会

吉野ヶ里遺跡

佐賀県文化財調査報告書第１６０集

二〇〇四　佐賀県教育委員会

再生紙を使用しています。

吉野ヶ里遺跡

平成11年度～12年度の発掘調査の概要

2004年3月

佐賀県教育委員会

吉野ヶ里地区Ｖ区第306・307調査区 全景（南東から）

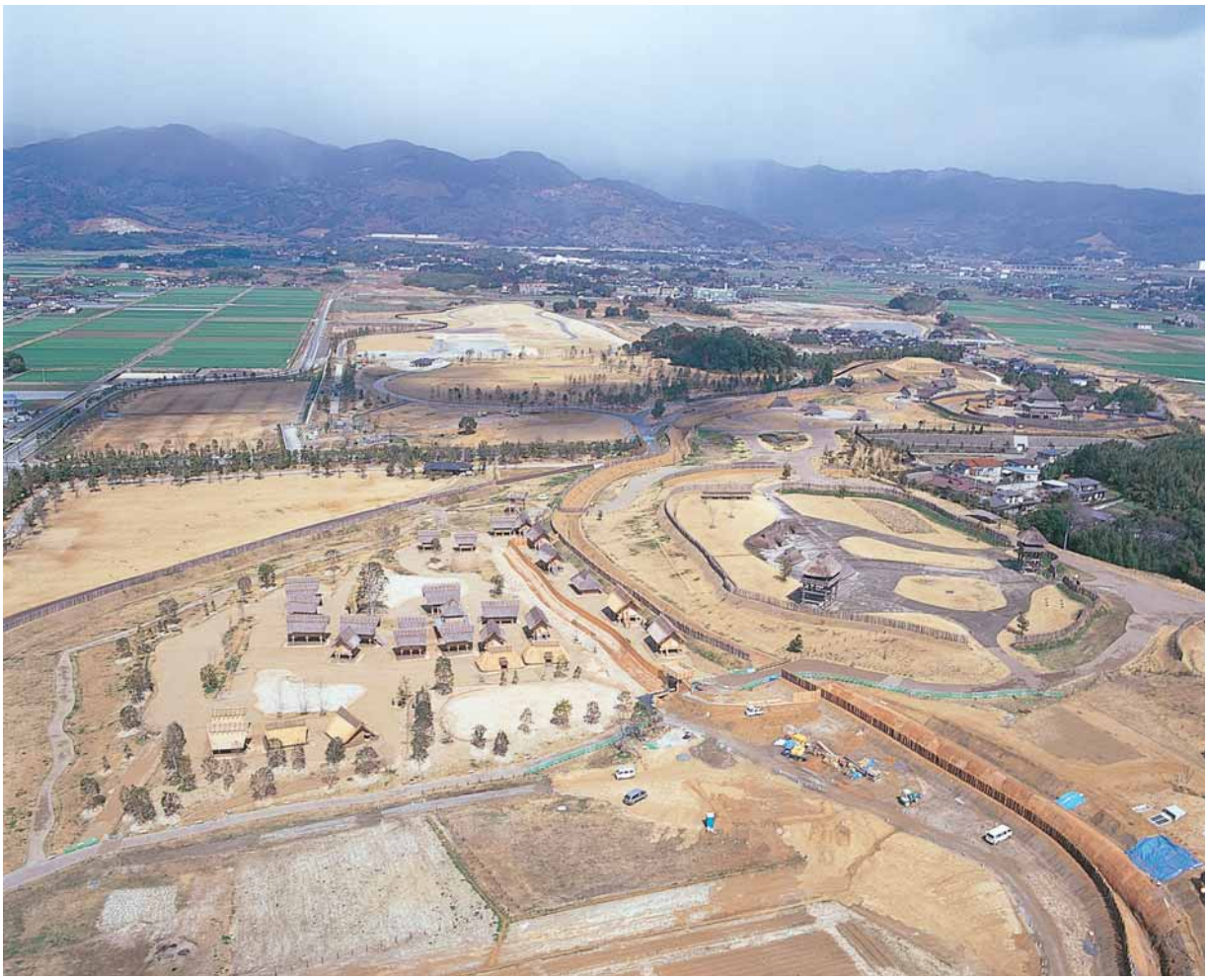
吉野ヶ里地区Ｖ区第306調査区 全景（南西から）

吉野ヶ里地区Ｖ区第306調査区 全景（西から）

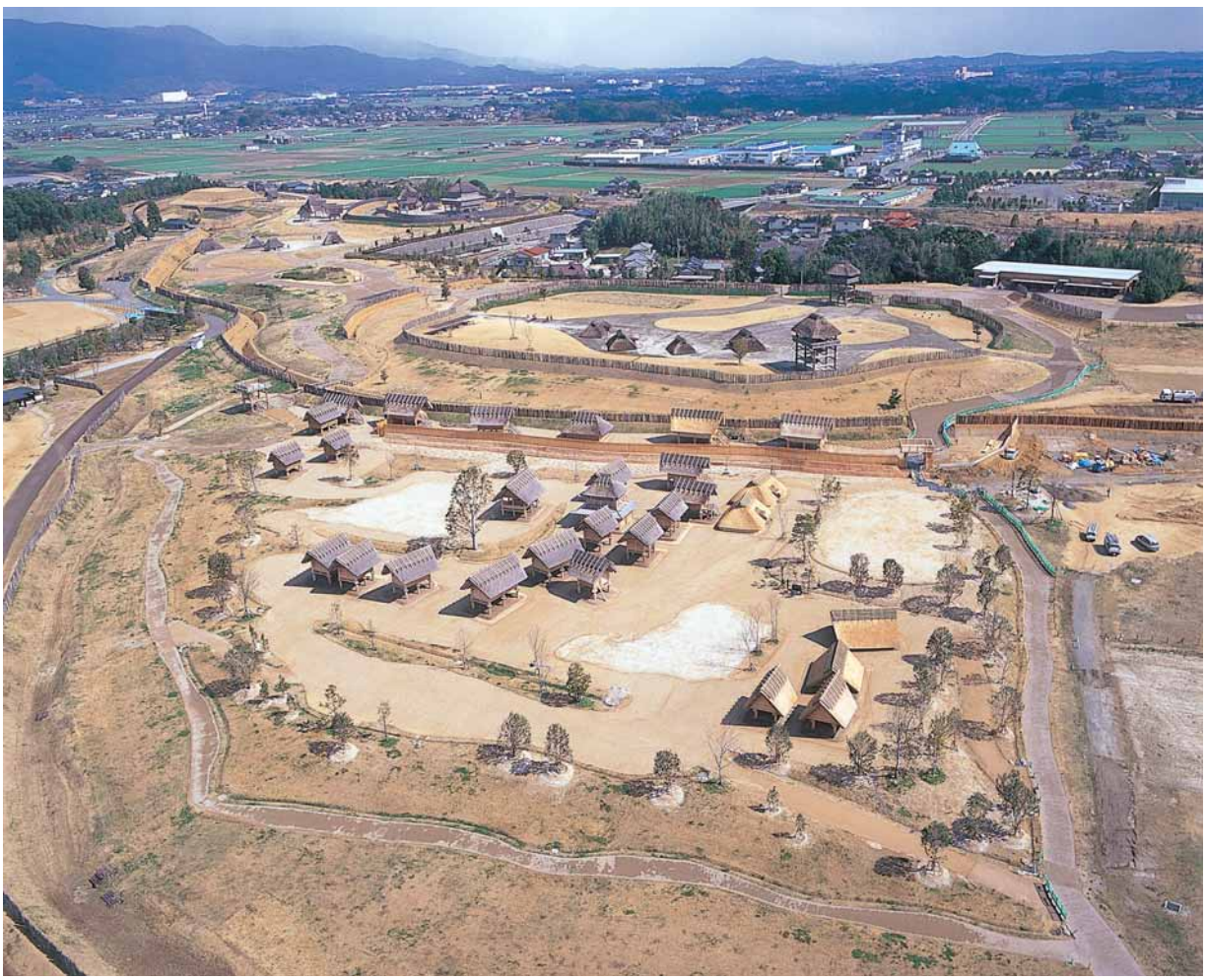
吉野ヶ里地区Ｖ区第306・307調査区（上が北）

吉野ヶ里地区Ｖ区第306調査区（上が西）

吉野ヶ里地区Ｖ区第306調査区（上が東）



吉野ヶ里地区Ｖ区第306・307調査区 建物等復元整備状況（南から）



吉野ヶ里地区Ｖ区第306・307調査区 建物等復元整備状況（西から）

吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第310調査区 全景（北から）

吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第310調査区 全景（上が南）

吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第310調査区 全景・前方後方墳全景（上が東）

吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第310調査区 前方後方墳全景（南西から）

吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316・317調査区 全景（北から）

吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316・317調査区 全景（南から）

吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316・317調査区 全景（上が西）

吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316調査区 南部（上が南）

田手二本黒木地区Ⅲ区第318調査区 全景（南東から）

田手二本黒木地区Ⅲ区第318調査区 全景（南から）

田手二本黒木地区Ⅲ区第318調査区 北部（南から）

田手二本黒木地区Ⅲ区第318調査区 南部（西から）

田手二本黒木地区Ⅲ区第318調査区 SD0336環壕跡（東から）

田手二本黒木地区Ⅲ区第318調査区 ST0568前方後方墳全景（上が北西）

田手二本黒木地区Ⅲ区第345・346・347調査区 全景（上が南）

田手二本黒木地区Ⅲ区第346調査区 全景（南から）

序

吉野ヶ里遺跡の発掘調査は、工業団地計画に伴い昭和61年５月から開始しましたが、国内最大規模の弥生時代環壕集落跡や墳丘墓の発掘などにより、平成元年2月以来大いに注目されてきました。その後、吉野ヶ里遺跡を取り巻く状況は、元年3月の工業団地計画中止と遺跡保存の決定、翌２年・３年の史跡・特別史跡としての指定、4年の国営公園化の閣議決定、７年11月からの整備工事着手、13年４月23日の第１期開園と急速な展開を遂げ、現在は多くの来園者で賑わっています。整備工事は現在も着々と進められ、集落全体のたたずまいが復元されつつあります。

このような状況の中で、当委員会としては平成元年度から文化庁の補助を受け、遺跡の範囲確認や内容解明のための確認調査を継続して実施しています。この間、南墳丘墓（祭壇？）青銅器鋳造遺構、北内郭跡、高床倉庫群跡の発見や、北墳丘墓の再調査によって新たな甕棺墓と銅剣の発見など多くの成果をあげることができ、また、別事業の調査により、九州初の銅鐸が発掘されるなど、ますます、遺跡のもつ重要性が認識されています。これらの調査成果は国営歴史公園整備の重要な基礎資料として最大限に活用しています。

この事業の平成元年度～10年度の成果については過去に３冊を公にしていますが、本書は平成11年度・12年度の調査についてその概要を記したものです。本書を学術資料としてお役立ていただき、吉野ヶ里遺跡の今後の調査研究あるいは保存活用に関して、適切なご指導、ご助言をいただきますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、調査にあたり適切なご指導をいただいた文化庁はじめ諸先生方、ならびに調査員を派遣して調査に協力いただいた三田川町はじめ地元町村教育委員会のほか、国土交通省九州地方整備局国営吉野ヶ里歴史公園事務所の方々、調査について指導いただいた先生の方々、発掘や資料整理に従事いただいた作業員の方々には衷心から感謝申し上げます。

平成16年3月

佐賀県教育委員会
教育長　吉　野　健　二

例　　言

１．本書は、佐賀県教育委員会が国庫補助事業として平成元年度から実施している吉野ヶ里遺跡発掘調査事業のうち、平成11年度・12年度に実施した発掘調査の概要報告書である。

２．発掘調査は、佐賀県教育委員会が主体となり、三田川町教育委員会の協力を得て実施した。調査にあたっては、文化庁、大学、佐賀県文化財保護審議委員、その他各種機関の専門家の指導を得た。

３．出土遺構の実測図作成は業者に委託したほか、調査員、調査補助員、作業員がおこなった。また、出土遺物の実測図作成は調査員、調査補助員・作業員がおこなった。調査記録の作成及び整理作業の分担は下記のとおりである。

遺構実測：石松澄子・中島茂子・平野三枝子・青山奈緒、金良美（大韓民国国立晋州博物館）

遺物実測：秋吉京子・伊東直子・緒方恭子・野口孝子・原口晴美・御厨瑞枝・横枕栄子・吉江博子・戸塚洋輔

遺物復元：井節子・江口啓子・大柿珠美・坂口サチ子・佐藤春子・羽田すま子・山崎ひとえ

遺構実測図整理・写真資料整理：石松澄子・中島茂子・平野三枝子

報告書用挿図トレース：御厨瑞枝・緒方恭子

４．出土した遺構・遺物の写真撮影は調査員がおこなったが、空中写真と遺物写真の一部については業者に委託した。

５．出土遺物の整理や調査記録類の整理は、吉野ヶ里遺跡発掘調査事務所でおこなった。

６．Ⅱ．位置と環境で用いたFig.1吉野ヶ里遺跡周辺遺跡分布図は、国土地理院発行の50,000分の1の地形図（『佐賀』『広滝』）を使用した。

７．本書の執筆は七田・細川がおこない、編集は、細川の協力を得て七田がおこなった。

８．出土遺物と調査記録類は、主に佐賀県教育委員会文化課吉野ヶ里遺跡発掘調査事務所（〒842-0035 神埼郡三田川町大字田手2721番地　℡ 0952-52-9735）に保管している。但し、重要文化財に指定された青銅製品や青銅器鋳型、その他銅鐸など重要な遺物は佐賀県立博物館で保管している。

凡　　例

１．平成８年度から10年度にかけて調査を実施した地区とその略号は以下のとおりである。

平成11年度：吉野ヶ里地区Ｖ区（YNG－Ｖ）　第306・307調査区

平成12年度：吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区(YGK－Ⅶ)　第310・316・317・318調査区

２．遺構については、調査地区ごとに一連の番号を付し、その前に遺構の種別を示すアルファベット２文字の略号を記した。以降の種別は以下のとおりである。

ＳＢ…掘立柱建物跡　ＳＤ…環壕跡・溝跡　ＳＥ…井戸跡　ＳＨ…竪穴住居（建物）跡

ＳＪ…甕棺墓　ＳＫ…土壙　ＳＰ…土壙墓　ＳＴ…古墳・その他の墓

ＳＸ…不明遺構

３．遺構の法量はｍ単位、遺物の法量はcm単位を原則として用いた。

４．遺構分布図や遺構実測図の北方位や座標値は、国土座標（第Ⅱ系）を用いた。

本　文　目　次

Ⅰ．はじめに ……1
　１．調査の経過と概要 ……3
　　(1) 平成11年度の調査 ……3
　　(2) 平成12年度の調査 ……3
　２．調査体制 ……7
　　(1) 平成11・12年度の調査体制 ……7
　　(2) 平成15年度の報告書作成体制 ……7
　３．調査の方法 ……8

Ⅱ．遺跡の位置と環境 ……11
　１．位置と地理的環境 ……11
　２．歴史的環境 ……11

Ⅲ．調査の概要と成果 ……17
　１．吉野ヶ里地区Ⅴ区の遺構と遺物 ……17
　　(1) 第306調査区・第307調査区南部……17
　　① 遺構
　　② 遺物
　　(2) 第307調査区北部……26
　　① 遺構
　　② 遺物
　２．吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区の遺構と遺物 ……37
　　(1) 第310・317調査区……38
　　① 遺構
　　② 遺物
　　(2) 第316調査区……51
　　① 遺構
　　② 遺物

Ⅳ．まとめ ……64
　１．丘陵南部の弥生時代前期・中期の集落跡について ……64
　２．南内郭西方の掘立柱建物跡群について ……66
　３．前方後方墳群について ……71

巻頭グラビア目次

1. 吉野ヶ里地区Ⅴ区第306・307調査区 全景（南東から）
吉野ヶ里地区Ⅴ区第306調査区 全景（南西から）
2. 吉野ヶ里地区Ⅴ区第306調査区 全景（西から）
吉野ヶ里地区Ⅴ区第306・307調査区（上が北）
3. 吉野ヶ里地区Ⅴ区第306調査区（上が西）
吉野ヶ里地区Ⅴ区第306調査区（上が東）
4. 吉野ヶ里地区Ⅴ区第306・307調査区 建物等復元整備状況（南から）
吉野ヶ里地区Ⅴ区第306・307調査区 建物等復元整備状況（西から）
5. 吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第310調査区 全景（北から）
吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第310調査区 全景（上が南）
6. 吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第310調査区 全景・前方後方墳全景（上が東）
吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第310調査区 前方後方墳全景（南西から）
7. 吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316・317調査区 全景（北から）
吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316・317調査区 全景（南から）
8. 吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316・317調査区 全景（上が西）
吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316調査区 南部（上が南）
9. 田手二本黒木地区Ⅲ区第318調査区 全景（南東から）
田手二本黒木地区Ⅲ区第318調査区 全景（南から）
10.田手二本黒木地区Ⅲ区第318調査区 北部（南から）
田手二本黒木地区Ⅲ区第318調査区 南部（西から）
11.田手二本黒木地区Ⅲ区第318調査区 SD0336環壕跡（東から）
田手二本黒木地区Ⅲ区第318調査区 ST0568前方後方墳全景（上が北西）
12.田手二本黒木地区Ⅲ区第345・346・347調査区 全景（上が南）
田手二本黒木地区Ⅲ区第346調査区 全景（南から）

本文中図版目次

吉野ヶ里地区Ⅴ区第306調査区北部 調査風景(西から)……4
吉野ヶ里地区Ⅴ区第306調査区西部 調査風景 ……4
吉野ヶ里地区Ⅴ区第306調査区 発掘現場見学風景 ……4
吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第310調査区 調査風景 ……4
吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第310調査区 調査風景 ……4
吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316調査区 調査風景 ……4
吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316調査区 見学風景 ……4
田手二本黒木地区Ⅲ区第318調査区 遺構検出風景 ……4
竪穴建物跡発掘状況（半分発掘）……9
竪穴建物跡発掘状況（ほぼ完全発掘）……9
掘立柱建物跡発掘状況（柱穴一段掘下げ）……9
掘立柱建物跡発掘状況（柱穴半分発掘）……9
貯蔵穴跡発掘状況（半分発掘）……9
環壕跡発掘状況（一部区間完全発掘）……9
甕棺墓群の養生（竹網）……9
甕棺墓群の養生（ビニルシート）……9

挿図目次

Fig. 1　吉野ヶ里遺跡発掘調査調査地区割り図 ……2
Fig. 2　平成11・12年度 吉野ヶ里遺跡発掘調査位置図 ……5

Fig. 3　吉野ヶ里遺跡周辺地形図・遺跡分布図 ……12
Fig. 4　吉野ヶ里地区Ⅴ区第306・307調査区 遺構分布略図……18
Fig. 5　吉野ヶ里地区Ⅴ区第306・307調査区 竪穴建物跡実測図……20
Fig. 6　吉野ヶ里地区Ⅴ区第306・307調査区 掘立柱建物跡実測図(1) ……21
Fig. 7　吉野ヶ里地区Ⅴ区第306・307調査区 掘立柱建物跡実測図(2) ……22
Fig. 8　吉野ヶ里地区Ⅴ区第306・307調査区 掘立柱建物跡実測図(3) ……23
Fig. 9　吉野ヶ里地区Ⅴ区第306・307調査区 竪穴建物跡出土土器実測図(1) ……28
Fig.10　吉野ヶ里地区Ⅴ区第306・307調査区 竪穴建物跡出土土器実測図(2) ……29
Fig.11　吉野ヶ里地区Ⅴ区第306・307調査区 竪穴建物跡出土土器実測図(3) ……30
Fig.12　吉野ヶ里地区Ⅴ区第306・307調査区 竪穴建物跡出土土器実測図(4) ……31
Fig.13　吉野ヶ里地区Ⅴ区第306・307調査区 竪穴建物跡出土土器実測図(5) ……32
Fig.14　吉野ヶ里地区Ⅴ区第306・307調査区 竪穴建物跡出土土器実測図(6) ……33
Fig.15　吉野ヶ里地区Ⅴ区第306・307調査区 掘立柱建物跡出土土器実測図(1) ……34
Fig.16　吉野ヶ里地区Ⅴ区第306・307調査区 掘立柱建物跡出土土器実測図(2) ……35
Fig.17　吉野ヶ里地区Ⅴ区第306調査区 SD1109溝跡出土土器実測図……36
Fig.18　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第310調査区 遺構分布図……39
Fig.19　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第310調査区 弥生時代溝・環壕跡断面土層図……41
Fig.20　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第310調査区 ST2200前方後方墳周溝跡断面土層図……42
Fig.21　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第310調査区 SD1801環壕跡出土土器実測図……44
Fig.22　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第310調査区 SD2101環壕跡出土土器実測図(1) ……45
Fig.23　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第310調査区 SD2101環壕跡出土土器実測図(2) ……46
Fig.24　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第310調査区 SD2102環壕跡・SK2531土壙出土土器実測図 ……47
Fig.25　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第310調査区 SD2208・SD2230環壕跡出土土器実測図……48
Fig.26　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第310調査区 ST2200前方後方墳周溝跡出土土器実測図……49
Fig.27　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第310調査区ほか出土金属製品実測図 ……50
Fig.28　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316・317調査区 遺構分布図……53
Fig.29　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316調査区 竪穴建物跡実測図……54
Fig.30　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316調査区 掘立柱建物跡・貯蔵穴実測図……55
Fig.31　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316調査区 SH2400竪穴建物跡出土環状青銅製品実測図……56
Fig.32　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316調査区 竪穴建物跡出土土器実測図(1) ……57
Fig.33　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316調査区 竪穴建物跡出土土器実測図(2) ……58
Fig.34　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316調査区 貯蔵穴出土土器実測図(1) ……59
Fig.35　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316調査区 貯蔵穴出土土器実測図(2) ……60
Fig.36　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316調査区 貯蔵穴出土土器実測図(3) ……61
Fig.37　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316調査区 貯蔵穴出土土器実測図(4) ……62
Fig.38　吉野ヶ里遺跡丘陵南部主要遺構分布図 ……65
Fig.39　吉野ヶ里遺跡丘陵南部 弥生時代中期環壕集落跡内の竪穴建物跡・貯蔵穴跡分布概略図 ……66
Fig.40　吉野ヶ里遺跡 高床倉庫群跡の遺構分布図（弥生時代後期終末期）……68
Fig.41　吉野ヶ里遺跡環壕集落跡概要図 ……70
Fig.42　吉野ヶ里遺跡丘陵南部 前方後方墳配置図 ……73

表目次

Tab.　平成11～12年度調査区一覧表 ……6

巻末折込

吉野ヶ里地区Ⅴ区（第306・307調査区周辺）高床倉庫跡群 遺構分布図

巻末図版目次

PL. 1　吉野ヶ里地区Ｖ区 高床倉庫跡全景（平成元年度調査・平成11年度調査の合成写真、上が北）
PL. 2　吉野ヶ里地区Ｖ区 第306調査区 SH1157・1158・1160竪穴建物跡、SH1159竪穴建物跡、SH1169竪穴建物跡、SH1185竪穴建物跡、SH1184竪穴建物跡、SH1187・1188竪穴建物跡
PL. 3　吉野ヶ里地区Ｖ区 第306調査区 SH1194竪穴建物跡、SH1195竪穴建物跡、SH1248竪穴建物跡、SH1281竪穴建物跡、SH1287竪穴建物跡、同土器取上げ後
PL. 4　吉野ヶ里地区Ｖ区 第307調査区 SH1230竪穴建物跡、SH1242竪穴建物跡、SH1258竪穴建物跡、第307調査区北部、SH1265竪穴建物跡、SH1267竪穴建物跡
PL. 5　吉野ヶ里地区Ｖ区 第306調査区 SB1200掘立柱建物跡、SB1201掘立柱建物跡、SB1205掘立柱建物跡、SB1207掘立柱建物跡、SB1208掘立柱建物跡、SB1209掘立柱建物跡
PL. 6　吉野ヶ里地区Ｖ区 第306調査区 SB1211掘立柱建物跡、SB1212掘立柱建物跡、SB1213掘立柱建物跡、SB1215掘立柱建物跡、SB1300掘立柱建物跡、SB1302掘立柱建物跡
PL. 7　吉野ヶ里地区Ｖ区 第306調査区 SB1330掘立柱建物跡、SB1340掘立柱建物跡、第307調査区 SB1220掘立柱建物跡、SB1221掘立柱建物跡、第306調査区 SB1340・1372掘立柱建物跡
PL. 8　吉野ヶ里地区Ｖ区 第306調査区 SD1109溝跡（南から）、同（北から）、第307調査区 SX1231円形周溝遺構（弥生時代）、同SX1259円形周溝遺構（弥生時代）、第306調査区　ST1295円形周溝遺構（平安時代）、同SP1348土壙墓（平安時代）
PL. 9　吉野ヶ里地区Ｖ区 第306調査区 SJ1189甕棺墓、第307調査区 SP1273土壙墓、SP1274土壙墓、SP1275土壙墓、SP1276土壙墓、SP1277土壙墓、SJ1278甕棺墓、SJ1279甕棺墓(左はSJ1278)
PL.10　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第310調査区 SH2227竪穴建物跡、SH2245竪穴建物跡、SB2199掘立柱建物跡、SJ2194甕棺墓、SJ2207甕棺墓、SJ2211甕棺墓
PL.11　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第310調査区 ST2200前方後方墳周溝跡 Ｃトレンチ断面、Ａトレンチ断面、Ｄトレンチ断面、２トレンチ断面、Ｇトレンチ断面、２トレンチ断面、西側くびれ部土器出土状況、同壺形土器出土状況
PL.12　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316調査区北部（南東から）、第316調査区南部（東から）
PL.13　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316調査区 SH2400竪穴建物跡、SH2400竪穴建物跡環状青銅製品出土状況、SH2404竪穴建物跡、SH2405竪穴建物跡、SH2407竪穴建物跡、SH2414竪穴建物跡
PL.14　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316調査区 SH2431竪穴建物跡、SH2437竪穴建物跡、SH2440竪穴建物跡、SH2442竪穴建物跡、SH2444竪穴建物跡、SB2446掘立柱建物跡
PL.15　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316調査区 SK2402貯蔵穴跡、SK2403貯蔵穴跡、SK2418貯蔵穴跡、SK2419貯蔵穴跡、SK2421貯蔵穴跡、SK2422貯蔵穴跡
PL.16　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316調査区 SK2423貯蔵穴跡、SK2434貯蔵穴跡、SK2449貯蔵穴跡、SK2451貯蔵穴跡、SK2452貯蔵穴跡、SK2453貯蔵穴跡
PL.17　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316調査区 SK2457貯蔵穴跡、SK2484貯蔵穴跡、SK2485貯蔵穴跡、SK2493貯蔵穴跡、SK2516貯蔵穴跡、SK2525貯蔵穴跡
PL.18　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316調査区 SJ2528甕棺墓、SP2468土壙墓、ST0325方形周溝墓 SD2396周溝跡４トレンチ断面、同１トレンチ断面、SD2397溝跡（中世）２トレンチ断面、SX2436遺構備前焼大甕出土状況
PL.19　吉野ヶ里地区Ｖ区第306調査区 SH1287竪穴建物跡出土土器群、同大型甕、第307調査区SJ1278甕棺
PL.20　前方後方墳出土土器群（吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第310調査区ST2200・田手二本黒木地区Ⅲ区第318調査区ST0568)、吉野ヶ里遺跡出土小型仿製鏡
PL.21　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第310調査区SK2249土壙出土大型甕、第316調査区SH2400竪穴建物跡出土環状青銅製品、同SX2436遺構出土備前焼大甕、吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316・田手二本黒木地区Ⅲ区第318調査区周辺出土の朝鮮系無文土器群
PL.22　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316調査区出土石器・石製品

Ⅰ．はじめに

吉野ヶ里遺跡は、佐賀県神埼郡の神埼町・三田川町・東脊振村の３町村にまたがる通称「志波屋・吉野ヶ里丘陵」の南部に位置する弥生時代初頭から中・近世にいたるまでの大規模な遺跡である。

明治時代末頃から一帯に散布する土器片や石器片などが注意され始め、大正時代から昭和時代初期にかけて吉野ヶ里遺跡に関する幾つかの報告がなされていた(1)。いずれも夥しい遺物の量と甕棺墓群の存在、周辺での青銅器や青銅器鋳型などの出土から、重要な遺跡としての見通しが語られている。

吉野ヶ里遺跡一帯に各種開発事業が及んだ昭和50年代以降で、水田部の農業基盤整備（圃場整備）事業や工場・宅地の造成工事に伴う小規模な発掘調査が実施されるようになった。工業団地計画がほぼ固まった昭和57年には予定地全域（丘陵部）の確認調査が実施され、遺跡の内容がおぼろげながら知られるようになった(2)。吉野ヶ里遺跡の本格的な発掘調査は、神埼工業団地計画に伴う事前調査として昭和61（1986）年度から開始されたが、その最終段階であった平成元年（1989）年の２月下旬に、全貌がほぼ明らかになった弥生時代後期の大規模な環壕集落跡が報道によって全国的に注目されることとなった。その後、弥生時代中期の大型墳丘墓が調査され、８基の甕棺墓が発掘され把頭飾付き有柄銅剣をはじめとする５本の細形銅剣と79個のガラス管玉などが発見されたのを機に、３月上旬、県は工業団地計画を縮小し、環壕集落跡と墳丘墓を含む南部地域の保存を決定した。平成５（1990）年５月の史跡指定（約22ha）、翌年５月の特別史跡昇格を経て、平成４年10月には国営吉野ヶ里歴史公園（約54ha）の設置が閣議決定され、周囲の県営公園（約63ha）とともに、整備工事が進み、平成13（2001）年４月21日に整備が終了した北内郭を中心に第１期開園となった。南内郭跡西方の高床倉庫と考えられる掘立柱建物跡群の整備もほぼ完了し、この４月に開園予定である。平成16年度には、平成元年度に仮整備がなされた南内郭の整備工事が開始されるなど整備工事が進展している。

文化庁の補助による吉野ヶ里遺跡の確認調査は、平成元年（1989）度から遺跡の範囲確認と工業団地計画に伴う発掘調査で対象外となった地域の内容確認を主目的として開始されたが、環壕集落跡の範囲の確認、青銅器鋳造遺構の確認、北墳丘墓の再発掘による新たな甕棺墓と銅剣などの副葬品の発見、北内郭跡の発見など、遺跡の持つ情報量の豊富さが明らかになった。これまでの各種調査のうち補助事業の概要については既に報告書(3)などによって公にしており、本書は補助事業によって平成11年度から12年度の２年間に実施した確認調査の概要について記したものである。なお、この事業によって明らかになった情報は、整理・分析の上、国土交通省（旧建設省）国営吉野ヶ里歴史公園事務所が策定する国営吉野ヶ里歴史公園の基本設計や実施設計の基本資料として活用している。

註

(1)藤谷庸夫・古賀孝・松尾禎作『古代東肥前の研究』1925
七田忠志「その後の佐賀県戦場ヶ谷遺跡と吉野ヶ里遺跡について」『史前学雑誌』６巻４号　1934
三友国五郎「佐賀県における合甕遺跡地」『考古学雑誌』24巻５号　昭和９年

(2)中牟田賢二『吉野ヶ里遺跡』吉野ヶ里遺跡調査会　昭和1983

(3)佐賀県教育委員会『吉野ヶ里遺跡―佐賀県神埼郡三田川町・神埼町に所在する吉野ヶ里遺跡の確認調査報告書―』1990
佐賀県教育委員会『吉野ヶ里遺跡―平成２年度～７年度の発掘調査の概要―』1997
佐賀県教育委員会『吉野ヶ里遺跡―平成８年度～10年度の発掘調査の概要―』2003

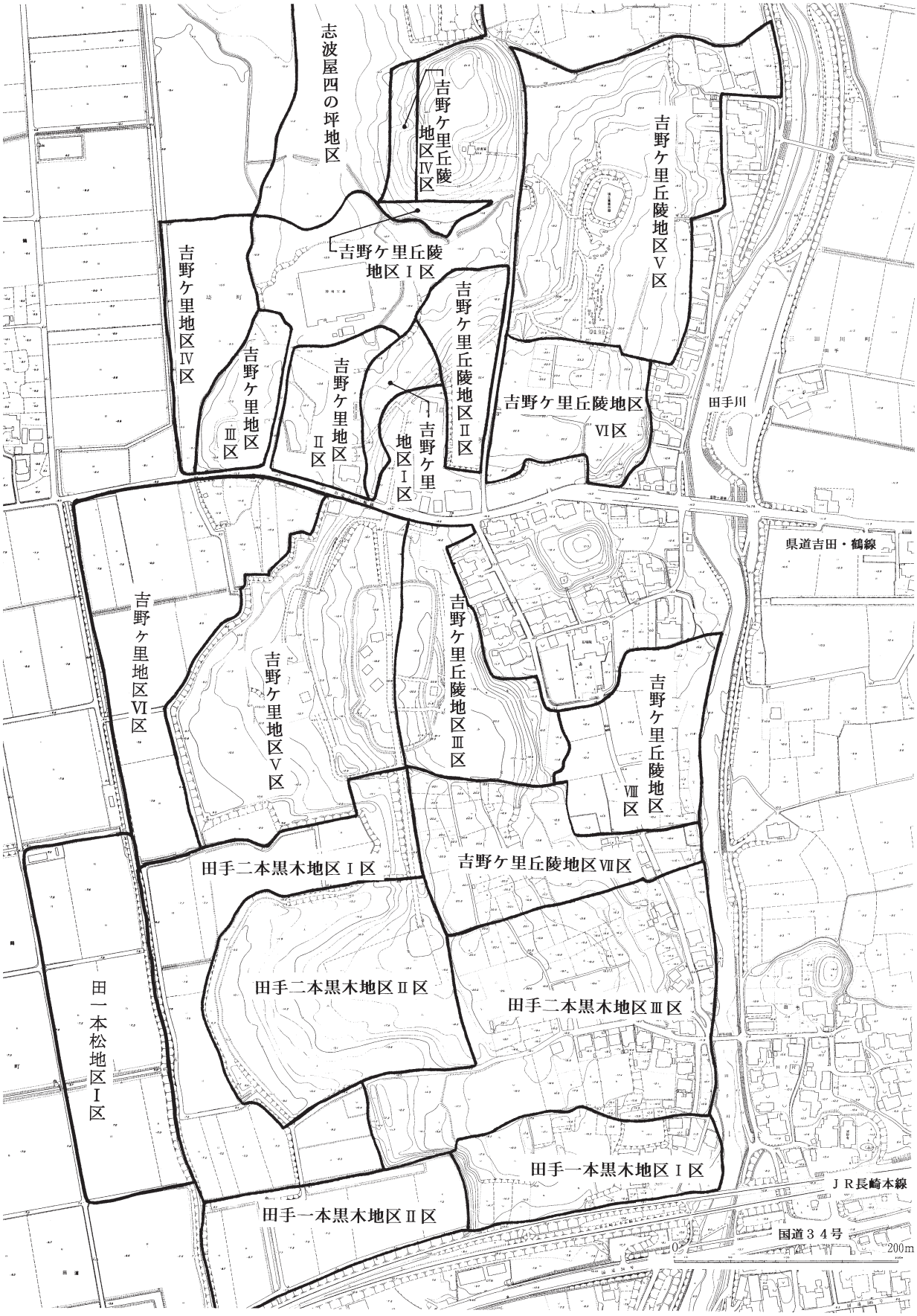


Fig. 1　吉野ヶ里遺跡発掘調査地区割り図

１．調査の経過と概要

(1) 平成11年度の調査

平成11年度の確認調査は、前年度から遺構検出を実施していた南内郭跡西方の緩斜面にあたる吉野ヶ里地区Ｖ区（第306・307調査区）と、南内郭跡南の丘陵上の吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区（第310調査区）で実施した。また、吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区では第310調査区南に第316調査区を設け、12月１日から12月14日にかけて重機により表土除去をおこない、年度内に一部の遺構検出作業を実施した。

吉野ヶ里地区Ｖ区第306調査区については平成10年度に表土除去と一部遺構検出作業を実施していたが、４月13日から本格的な調査を実施した。また、工業団地計画に伴う発掘調査終了地区の西側に位置する第307調査区は５月12日から５月31日にかけて重機により表土除去をおこない、第306調査区とともに遺構検出を進め各遺構の一部を発掘して規模や時期の確定をおこなった。

第306調査区の北側は工業団地計画に伴う発掘調査で、大規模なものを多く含む多数の掘立柱建物跡が発見されていたため、その広がりなどを把握することを主目的としていたが、同じく過去の調査において発掘されていた平安時代の掘立柱建物跡や井戸跡などの分布範囲を把握する目的もあった。調査の結果、弥生時代を中心とする竪穴住居跡や掘立柱建物跡群や甕棺墓、古墳時代の竪穴住居跡群、平安時代から中世にかけての掘立柱建物跡や井戸跡、中世の溝跡などが検出された。遺構の実測・測量や写真撮影を進め、現地の調査は２月18日にほぼ終了し、遺構の埋め戻しをおこなった。

吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第310調査区は、南内郭南方の状況把握のために平成８年度に調査を実施した第227・228調査区の南に設けた調査区で、９月14日から９月20日にかけて重機により表土除去をおこない、11月29日から翌年３月６日にかけて発掘作業を実施した。調査の結果、弥生時代の環壕跡や溝跡・竪穴住居跡、古墳時代の前方後方墳、中世の溝跡などが検出された。このうち前方後方墳は、主に平成８年度の第228調査区で前方部の周溝の一部を既に検出していたが、埋土から出土する土器が弥生時代後期終末期のものが大半だったため弥生時代の遺構と判断していたものである。なお、第310調査区は６月19日まで追加調査をおこない、その後埋め戻しをおこなった。

これらの調査で出土した遺物の水洗・注記・接合や写真などの調査記録類の整理作業は、前年度までの事業によって得られた遺物や調査記録類とあわせ、調査事務所においておこなった。

発掘中の現場は見学者に常時公開したが、11月６日（土）には吉野ヶ里地区Ｖ区第306調査区の発掘現場説明会を開催した。調査中の11月10日・11日には国立歴史民族博物館の佐原眞館長に調査指導をいただき、翌年３月15日には文化庁記念物課の小林克文化財調査官に調査や翌年度の計画などについて指導をいただいた。

(2) 平成12年度の調査

平成12年度の確認調査は、平成11年度に確認調査を実施した第310調査区の南に第316調査区を設け４月18日から遺構検出を開始し、５月８日から調査区拡張のために重機による表土除去を実施した。調査の過程で北部に新たに第317調査区を設け、平行して調査を実施した。この地区以南には、弥生時代前期から中期にかけての貯蔵穴跡や中期の竪穴建物跡が密集して存在することが判明した。この地区は、弥生時代前期の環壕や中期の環壕に囲まれた区域にあたり、環壕集落跡の内部の状況を知る情報を多く得ることができた。特筆される遺物としては、第316調査区の竪穴建物跡から出土した耳飾または指輪と考えられる青銅製の環状品２点や、朝鮮系無文土器などがある。この調査区の南

吉野ヶ里地区Ⅴ区第306調査区北部 調査風景(西から)

吉野ヶ里地区Ⅴ区第306調査区西部 調査風景

吉野ヶ里地区Ⅴ区第306調査区 発掘現場見学風景

吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第310調査区 調査風景

吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第310調査区 調査風景

吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316調査区 調査風景

吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316調査区 見学風景

田手二本黒木地区Ⅲ区第318調査区 遺構検出風景

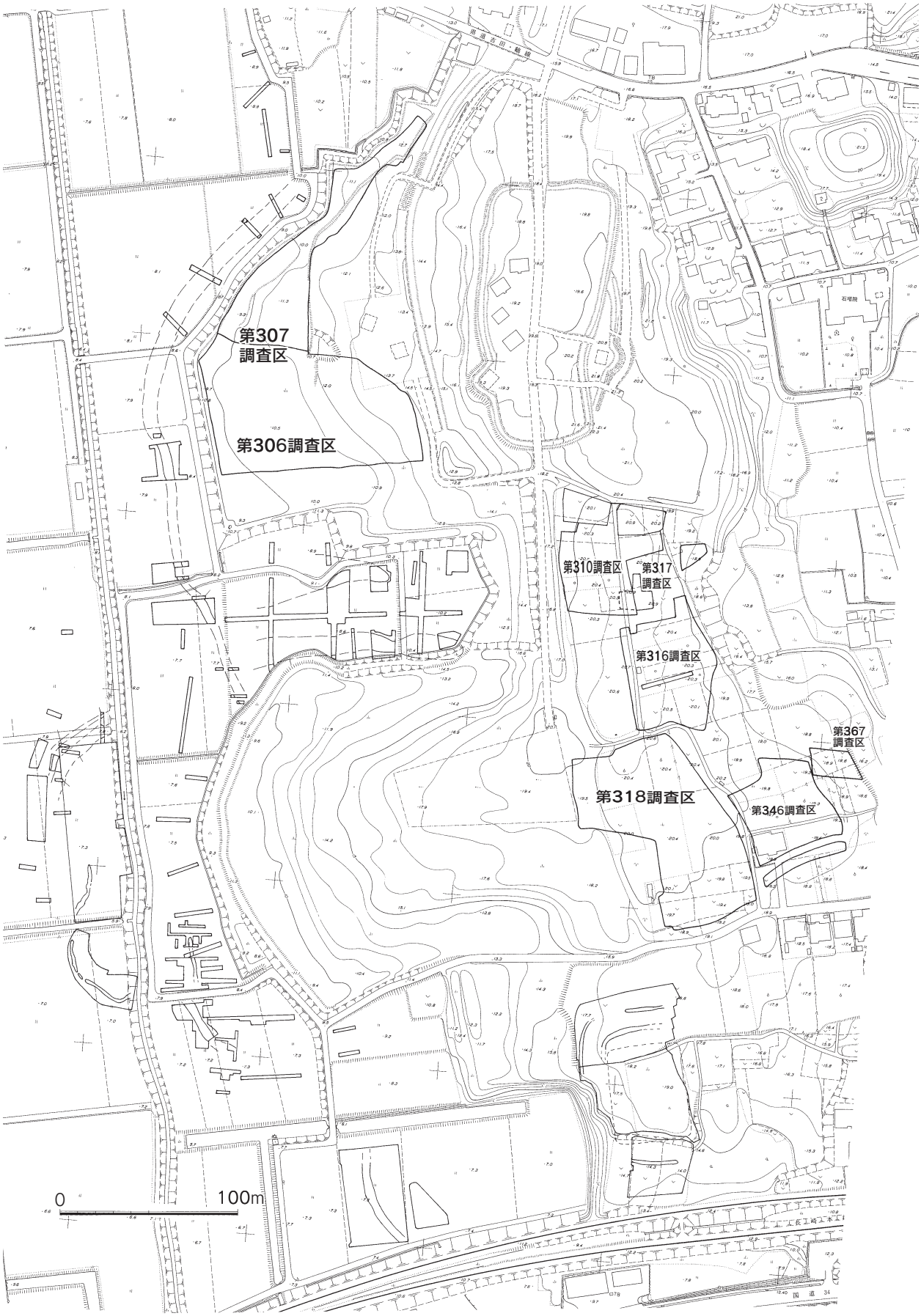


Fig. 2　平成11・12年度 吉野ヶ里遺跡発掘調査位置図

西端からは方形周溝状の大型の遺構が検出され、埋土から出土する土器片のほとんどが弥生時代中期に属するものであったため特別な遺構ではないかと考えた。第318調査区の平成13年度の調査で、この遺構が第318調査区へまたがって検出され古式土師器が出土したため方形周溝墓であることが判明した。第317調査区では弥生時代中期から後期終末期にかけての各種の溝跡が検出された。中期の環壕跡の一部と考えられる大規模な壕跡や後期後半と終末期の溝跡などである。

これらの調査で出土した遺物の水洗・注記・接合や写真などの調査記録類の整理作業は、前年度までの事業によって得られた遺物や調査記録類とあわせ、吉野ケ里遺跡発掘調査事務所でおこなった。

12月20・21日の両日、第316・317調査区の遺構、及びこれまでに調査を実施した弥生時代集落の構造などについて、奈良大学酒井龍一先生に調査指導をいただき、翌年３月９日には文化庁記念物課の加藤真二文化財調査官に調査や翌年度の計画等などについて指導をいただいた。なお、発掘中の現場は、説明板などを設置し見学者に常時公開するように努めた。

Tab.1　平成11～12年度調査区一覧表

調査区番号	地区名	面積㎡	調査年度	主な遺構	主な遺物	事業種別 備考
306	吉野ヶ里地区Ⅴ区	6,800	10~11	弥生…竪穴建物跡、掘立柱建物跡、溝跡、甕棺墓　古墳…竪穴建物跡、溝跡、掘立柱建物跡 中世…溝跡、掘立柱建物跡		**補助事業** 10年度は遺構検出のみ、11年度に調査
307	吉野ヶ里地区Ⅴ区	2,400	11	弥生…竪穴建物跡・掘立柱建物跡 古墳…竪穴建物跡・掘立柱建物跡 平安…掘立柱建物跡		**補助事業**
308	吉野ヶ里地区Ⅴ区	230	11	弥生…環壕跡	弥生…巴形銅器鋳型	建設省委託
309	吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区	2,100	11	弥生…谷跡　中世…掘立柱建物跡・井戸跡		建設省委託
310	吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区	3,000	11	弥生…竪穴建物跡・溝跡・甕棺墓 古墳…前方後方墳　中世…溝跡		**補助事業**
311	大曲一の坪地区	1,000	11~12	奈良…掘立柱建物跡・塔跡・溝跡 中世…掘立柱建物跡・溝跡		県土木部再配当
312	吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区	31	11	弥生…竪穴建物跡・甕棺墓		建設省委託
313	吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区	35	11	なし		建設省委託
314	吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区	36	11	弥生…土壙		建設省委託
315	吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区	90	11	弥生…竪穴建物跡		建設省委託
316	吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区	2,730	12	弥生…竪穴建物跡・貯蔵穴跡・掘立柱建物跡　古墳…方形周溝墓 中世…溝跡・掘立柱建物跡	弥生…青銅製耳飾(指輪？)2・朝鮮系無文土器 中世…備前大甕	**補助事業**
317	吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区	240	12	弥生…環壕跡・溝跡		**補助事業**
318	田手二本黒木地区Ⅲ区	4,800	12~13	弥生…竪穴建物跡・貯蔵穴跡・掘立柱建物跡　古墳…前方後方墳 中世…溝跡	弥生…朝鮮系無文土器・ガラス小玉	**補助事業** 表土除去・一部遺構検出のみ
320	吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区	300	12	弥生…竪穴建物跡・貯蔵穴跡 中世…掘立柱建物跡		建設省委託
321	吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区	60	12	弥生…溝跡		建設省委託
322	吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区	36	12	弥生…溝跡		建設省委託
323	田手二本黒木地区Ⅲ区	540	12	弥生…竪穴建物跡・溝跡　古墳…溝跡　中世…溝跡	弥生…細形銅剣 中世…ベトナム陶磁	建設省委託
324	田手一本黒木地区Ⅰ区	460	12	弥生…甕棺墓2　中世…溝跡・井戸跡		建設省委託
325	田手一本黒木地区Ⅰ区	200	12	弥生…溝跡		建設省委託
326	田手一本黒木地区Ⅰ区	150	12	弥生…甕棺墓27　中世…溝跡		建設省委託
327	田手二本黒木地区Ⅲ区	30	12	弥生…谷跡		建設省委託
328	田手二本黒木地区Ⅲ区	50	12	弥生…谷跡　中世…溝跡		建設省委託
329	吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区	100	12	弥生…小穴		建設省委託

２．調査体制

(1)平成11・12年度の調査体制

( )内の数字は担当年度

【文化課】事務局

課長	内野　文夫	(11)
	宮地　洋三	(12)
参事	堤　　博文	(11・12)
副課長	山口　康郎	(11・12)
庶務係専門員	津野　建夫	(11・12)
主査	相川ミエ子	(11・12)
主事	毎熊　　近	(11・12)
	陶山　　優	(11・12)

【文化財課】調査担当

課長	佛坂　勝男	(11・12)
参事	大橋　康二	(12)
副課長	園田　義孝	(11)
	大橋　康二	(11)
	東中川忠美	(11・12)
	東島　桂子	(12)
企画調整主査	納富　敏雄	(11・12)
	小池清一郎	(11・12)
	七田　忠昭	(11・12)
主査	大隈　政博	(11・12)
指導主事	長崎　　浩	(11・12)
文化財保護主事	細川　金也	(11・12)
	渋谷　　格	(11・12)
調査補助員	青山　奈緒	(11)
	高橋　修司	(12)
三田川町教育委員会		
主査	草野　誠司	(11)

(2)平成15年度の報告書作成体制

【文化課】事務局

課長	香月　博子
参事	中園　一次
副課長	天本　洋一
	東中川　忠美
	川久保弘二郎
総務班専門員	天本　茂春
主査	野口佐智子
	今村　早人
	島田　一幸
主事	坂口　豪史
	山口　徹也

【文化課吉野ケ里遺跡班】調査担当

副課長	天本　洋一	(班業務総括)
専門員	七田　忠昭	(発掘調査総括)
専門員	西村　和昭	(管理・企画)
指導主事	山口　良弥	(発掘調査)
	久富　貴史	(管理・企画)
主査	細川　金也	(発掘調査)
調査補助員	天賀　光広	(発掘調査)
	能登原孝道	(発掘調査)

３．調査の方法

吉野ヶ里遺跡は、100haを越すと考えられる大規模な遺跡であるが、遺跡中心部の約22haは平成２年５月19日に史跡、翌３年５月28日に特別史跡に指定され、また、その周囲約28haは県史跡に指定されている。これら指定地内の埋蔵文化財は恒久的に保護されるものであり、現段階で無指定の地域にも特別史跡・県史跡と勝るとも劣らない内容の埋蔵文化財が包蔵されている。そのため、発掘による遺構への損害を最小限に止め、かつ多くの情報を得るべき方法を模索しながら発掘調査を実施している。また、調査の成果は、国営吉野ヶ里歴史公園での遺構復元設計の際の基本資料となるため、細かな情報を取り出すことも必要であり、方法を試行錯誤しながら、最善の方法を模索しているというのが現状である。将来の遺構の再検証や、進歩した調査方法や分析技術を駆使した調査のための遺構保存という観点から、現時点の調査によって、遺構内埋土を完全に除去することは避けなければならないと考えている。従って、現在は遺構発掘について、基本的に次のような方法を取っている。

なお、調査区の設定や調査の方法、成果の分析などに関しては、文化庁記念物課はじめ佐賀県文化財保護審議委員会、各分野の研究者など埋蔵文化財に造詣の深い専門家の指導を得ている。

調査区の設定

前年度までの調査成果を検討し、遺跡の全体像の解明に必要な地区に調査区を設定する。また、過去に調査を全く実施していない区域についても確認調査の対象にする。過去の調査区に近接して新たな調査区を設定する場合は、調査区付近の土層堆積の状態が将来にわたって観察できるように、調査区と調査区の間に畦となる未発掘区域を数ｍ確保する。

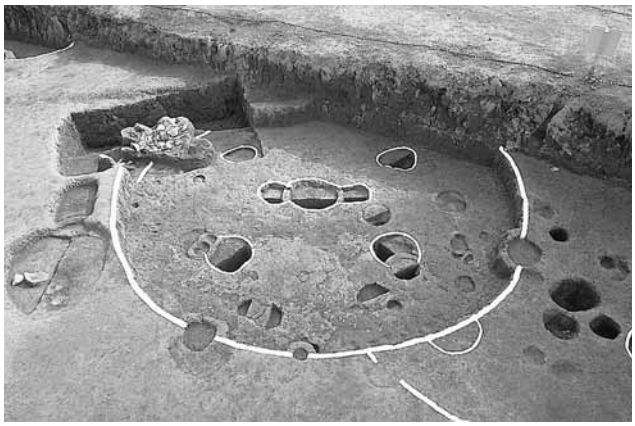
表土除去と調査の手順

遺構を覆っている耕作土や表土の除去は、過去の確認調査の成果などによって推定した地下遺構の種別や深さなどによって、基本的には重機（バックフォア）によるか人力によるかを判断する。遺構面が極端に浅い位置に存在する場合や甕棺墓などその保存に支障をきたす恐れのある場合については人力で行う。表土除去後、遺構検出を実施する過程で座標杭を設置し、遺構分布図を平板測量（基本的に縮尺100分の1）にて作成する。その後、下記のような発掘を行いながら、性格が判明したものについて遺構番号を付す。発掘を進めながら遺構の個別写真を撮影し、全域の発掘が完了すれば、空中写真や高所からの全景写真を撮影する。遺構の写真撮影は、主に35mm版とブローニー版（６cm×７cm版）のカメラを用い、モノクロームネガフィルムとカラーポジフィルムに記録している。さらに特別な場合については４inch×５inch版を使用することもある。空中写真はバルーン式のものでフィルムは６cm×６cm版のモノクロームとカラーポジフィルムを使用している。また、メモ的な記録についてはデジタルカメラも用いている。なお、遺構の実測は、全域を20分の1縮尺でおこない、細かな図面が必要な遺構や断面土層については10分の1やさらに小縮尺で実測をおこなう。状況に応じて地形測量もおこなっている。

竪穴建物跡・貯蔵穴跡・土壙などの調査

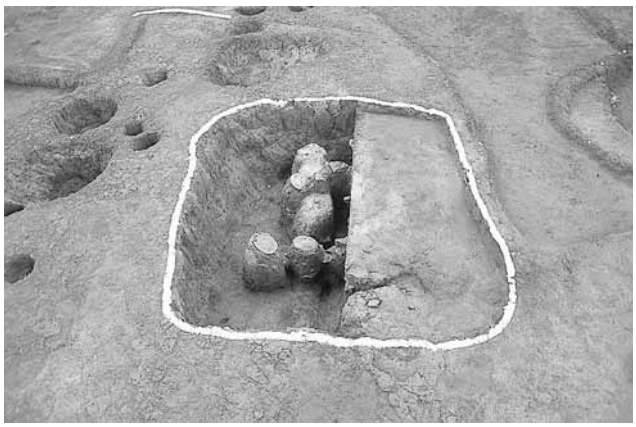
平面プランを確認後、基本的には中軸線より片側を完全に発掘し、深さや埋土の堆積状況、柱穴などの内部遺構を確認する。ただし、遺構の残存度合いが著しく悪く全体プランが把握できなかった場合には、周囲または中央畦を残し全体の埋土を除去する場合もある。

竪穴建物跡発掘状況（半分発掘）


竪穴建物跡発掘状況（ほぼ完全発掘）

掘立柱建物跡発掘状況（柱穴一段掘下げ）

掘立柱建物跡発掘状況（柱穴半分発掘）


貯蔵穴跡発掘状況（半分発掘）

環壕跡発掘状況（一部区間完全発掘）

甕棺墓群の養生（竹網）

甕棺墓群の養生（ビニルシート）

掘立柱建物跡の調査

掘立柱建物跡を構成する柱穴跡は、平面プランを確認後、中軸線より片側を完全に発掘し、深さや埋土の堆積状況、柱や礎板・枕木の有無や痕跡・法量などを確認する。この場合、幾つかの柱穴跡を選択して発掘し、幾つかの柱穴跡には手をつけない場合もある。

環濠跡・溝跡の調査

規模の大小を問わず、平面プランを確認後、他の遺構との切り合いがほとんどない部分にトレンチ状の調査区を設け完全に発掘し、断面形状や深さ、埋土の堆積状況などを確認する。近年では、たとえば100m区間にわたって環壕・溝跡の平面プランを検出した場合、５％～10％に満たない区間を発掘し、他は完全に保存する。

調査中の遺構の養生

遺構の発掘作業開始後は、日光による地割れや降雨・降雪・霜による遺構の崩壊を防ぐため、遺構の上をコンクリートパネルや竹で編んだ網などを置き、ビニールシートで全体を覆い養生している。発掘作業は、その日に作業をおこなう範囲のみシートなどを開き実施している。見学者への公開は、遺構の損傷に影響がないように配慮しながらおこなっている。

埋め戻し

調査終了後は、調査前に除去しておいた耕作土や表土、遺構から除去した土で埋め戻して保護している。埋め戻しは、予め検出・発掘された遺構を人力によって覆ったのち、重機を用いて埋め戻しをおこなっている。その後、国営吉野ヶ里歴史公園整備の準備として国土交通省国営吉野ヶ里歴史公園工事事務所の手によって真砂土による盛土が施される。以前の一時期、発掘した遺構の上に真砂土で覆い、その上に表土類で埋めていたが、再発掘した際、遺構とその上の真砂土との間に雨水流によると考えられる溝状のものが確認され、また、遺構面から真砂土を除去することに困難を伴うことが判明したため、現在は基本的に上記のような方法で埋め戻している。

見学者への公開

仮整備後の遺跡公開区域内及び公開区域に隣接した区域の発掘調査現場は、原則公開とし、発掘作業の状況や発掘されつつある遺構の見学ができるようにしている。その場合、見学者の便宜を図るため、調査区の周囲と調査区内部に幅１ｍ～２ｍの見学路を設け、順路表示や調査の概要、個々の遺構についての説明版を設置するなどして、遺跡の理解に供している。

また、重要な遺跡や遺物が出土した場合や調査がある程度終了したときなどには、発掘現場において成果を公開する現地説明会を、遺跡内の展示室において発掘状況パネルや遺物の特別展示会などを開催している。発掘された竪穴建物跡や高床建物跡、環壕跡と、仮整備された施設との対比ができるということで見学者から好評を得ている。なお、平成13年４月の国営吉野ヶ里歴史公園開園以降も、同様な方法で、発掘現場の公開を積極的におこなっている。

Ⅱ．遺跡の位置と環境

１．位置と地理的環境

吉野ヶ里遺跡は、佐賀県の有明海沿岸に広がる佐賀平野の東部、神埼郡の神埼町と三田川町・東脊振村にまたがる通称吉野ヶ里丘陵（『志波屋・吉野ケ里段丘』）の南部に位置する。吉野ヶ里丘陵南部の吉野ヶ里遺跡が立地する丘陵は、標高約26m～10mで、周囲の水田面からの比高は約10mである。遺跡は現行の行政区分では、神埼町大字志波屋（竹原地区）・同大字鶴（馬郡地区）、三田川町大字田手（吉野ヶ里・田手地区）、東脊振村大字大曲（辛上地区）に位置する。今回報告する吉野ヶ里遺跡の各地区は大半が三田川町大字田手（吉野ヶ里・田手地区）と一部神埼町大字鶴（馬郡地区）に位置する。

佐賀平野は、有明海の潮汐と大小河川の流入による堆積作用によって形成された肥沃な平野である。山麓部や河岸段丘、自然堤防、平野部の微高地は住居や集落の立地に適しており、広大な扇状地や谷底平野・三角州は、豊富な水と温暖な気候（近年の佐賀市の気象は、最高気温33.4℃～38℃、最低気温－4.7℃～－3.1℃、年間降水量1300mm～2600mm、平均湿度70％～74％、年間日照時間2000時間前後）と相俟って卓越した農業生産基地として利用された。

現在、有明海は玄界灘沿岸に比べ、波の高さが格段に小さく穏やかで、反時計回りの方向に毎時約10kmの潮流がある。黄海から玄海灘の荒波を乗り越え、有明海に入れば容易で安全な航海が約束されたのである。また、有明海は約６ｍという国内最大の干満の差があり、満潮時には平野の奥深く潮が上り、船舶の航行に適していたものと考えられる。防禦といった視点で佐賀平野の地形をみると、背後に標高1000m級の脊振山地、東西両側に低山塊と丘陵、南前面に海（港津）が存在する軍事的に要害の地でもあった。

佐賀平野の東部にあたる三養基郡中原町から佐賀市にかけての脊振山地南麓には、多くの洪積世段丘が発達して、大小の段丘が山麓部から南部の肥沃な沖積平野へ舌状に延びており、このような自然環境が佐賀平野東部地域の特徴となっている。この地域は、県内でも遺跡が密集するところとして知られており、旧石器時代から中・近世までの遺跡が多数存在している。以下、三養基郡西部の中原町・上峰町・三根町以西、佐賀郡大和町以東の地域について記す。

２．歴史的環境

旧石器時代の遺跡は、山麓部や段丘上にその存在が確認されているが、本格的な調査が実施された例は少なく、表面採集か後世の遺構などに混在したものが発見される例が多い。中原町姫方遺跡からは礫器やナイフ形石器が、同町町南遺跡(1)や東脊振村山古賀遺跡などからナイフ形石器が、吉野ケ里遺跡でもナイフ形石器を主体とする石器群が多く出土している。また、数少ない本格的な調査例である神埼町船塚遺跡(2)からは、２層にわたる文化層から礫群が確認され、ナイフ形石器や台形石器・剥片尖頭器などが出土している。特に、瀬戸内系石器群の出土は興味深く、当地域における旧石器文化の様相を窺うことができる。

縄文時代は、旧石器時代と同様に山麓部や段丘上に遺跡が確認されており、その数も増加している。押型文土器の出土で学史的に著名な東脊振村戦場ケ谷遺跡(3)をはじめ、中原町香田遺跡(4)（早期・晩期）、神埼町船塚遺跡（早・前期、晩期）・同志波屋六本松遺跡(5)（早期、後期）・同志波屋一の坪遺跡(6)（早期）、東脊振村タケ里遺跡(7)（後期）、佐賀市金立開拓遺跡(8)（早・前期、後期）・同久保泉

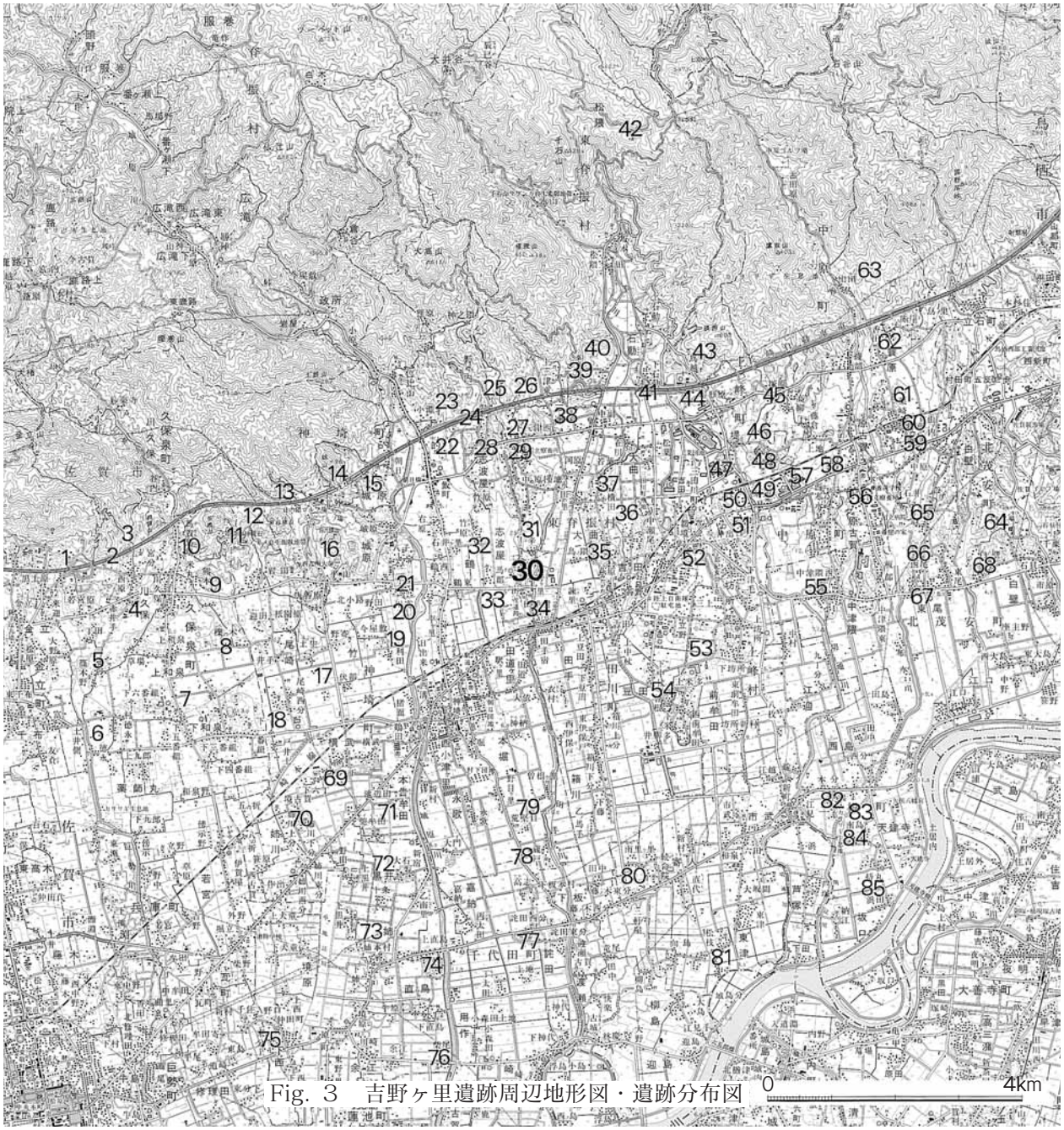


Fig. 3　吉野ヶ里遺跡周辺地形図・遺跡分布図

1	金立開拓遺跡	18	尾崎利田遺跡	35	鳥の隈遺跡	52	目達原古墳群	69	横武城跡
2	久保泉丸山遺跡	19	利田柳遺跡	36	横田遺跡	53	塔の塚廃寺	70	姉川城跡
3	鈴熊遺跡	20	川寄吉原遺跡	37	松原遺跡	54	下中杖遺跡	71	本告城跡
4	琵琶原遺跡	21	川寄若宮遺跡	38	タケ里遺跡	55	宝満宮前方後円墳	72	上黒井貝塚
5	篠木野遺跡	22	的五本黒木遺跡	39	西石動銅戈鎔笵出土地点	56	町南遺跡	73	姉遺跡
6	村徳永遺跡	23	花浦古墳群	40	西石動古墳群	57	原古賀三本谷遺跡	74	直鳥城跡
7	泉三本栗遺跡	24	志波屋六本松遺跡	41	下石動遺跡	58	ドンドン落遺跡	75	貴別当神社遺跡
8	櫟の木遺跡	25	船塚遺跡	42	霊仙寺跡	59	姫方原遺跡	76	柴尾貝塚
9	熊本山古墳	26	戦場ヶ谷遺跡	43	鎮西山南麓古墳群	60	姫方前方後円墳	77	詫田西分遺跡
10	関行丸古墳	27	三津永田遺跡	44	屋形原古墳群	61	姫方遺跡	78	森ノ木貝塚
11	帯隈山神籠石	28	伊勢塚前方後円墳	45	谷渡古墳群	62	八幡社遺跡	79	荒堅目遺跡
12	天神尾古墳群	29	下三津前方後円墳	46	堤土塁跡	63	山田古墳群	80	南里ヶ里貝塚
13	猿嶽古墳群	**30**	**吉野ヶ里遺跡群**	47	二塚山遺跡	64	検見谷遺跡	81	菰ノ江遺跡
14	勢福寺城跡	31	辛上廃寺	48	船石遺跡	65	東尾銅剣出土地	82	本分貝塚
15	朝日遺跡	32	馬郡・竹原遺跡群	49	船石南遺跡	66	東尾銅矛出土地	83	石井北方貝塚
16	日の隈山烽跡	33	馬郡遺跡	50	切通遺跡	67	西尾遺跡（銅矛）	84	天建寺南島遺跡
17	尾崎土生遺跡	34	杉籠遺跡	51	一本谷遺跡	68	北尾遺跡（銅戈）	85	持丸貝塚

丸山遺跡[9]（早期～晩期）・同鈴熊遺跡[10]（晩期）など多くの遺跡で確認されている。これらの内、晩期に存在する久保泉丸山遺跡や香田遺跡では支石墓群が検出され、吉野ヶ里遺跡周辺では晩期の集落跡と考えられる神埼町馬郡遺跡[11]、三田川町田手二本松遺跡、東脊振村浦田遺跡[12]など平野に面した遺跡で多数の土器片が発掘されており、この地域における弥生文化生成の実態が明らかになる日も近いと考えられる。

弥生時代になると遺跡の数は急増し、その分布も南部の沖積平野まで広がるようになる。近年の農業基盤整備事業などの開発に伴い平野部の調査が増加した結果、段丘上のみならず平野部の状況が明らかになった。前期の遺跡は中原町町南遺跡、東脊振村西石動遺跡[13]・同松原遺跡[14]、神埼町切畑遺跡[15]、吉野ヶ里遺跡など段丘上や山麓部に立地するものの他、前期に南部三角州地帯の千代田町黒井遺跡群[16]・同詫田西分遺跡[17]などの貝塚を含む集落群が形成されたことが明らかになっている。中でも吉野ヶ里道跡や松原遺跡、町南遺跡では環壕集落が形成されるなど、地域の拠点的な集落も同時に生成されたものと考えられる。

中期以降、集落の範囲はさらに拡大し数も著しく増加する。上峰町切通遺跡[18]や東脊振村三津永田遺跡[19]・同横田松原遺跡[20]など副葬品をもった弥生時代墓地が従来から知られていたが、近年の大型開発に伴う調査の増加により、山麓部や段丘上の中原町姫方原遺跡[21]・同町南遺跡・同原古賀三本谷遺跡[22]、上峰町船石南遺跡・同一本谷遺跡[23]、東脊振村下石動遺跡[24]・同タヶ里遺跡、吉野ケ里遺跡、神埼町的五本黒木遺跡[25]・同川寄遺跡群[26]、佐賀市琵琶原遺跡[27]・同村徳永遺跡[28]などの集落跡が、中原町姫方遺跡、船石遺跡・船石南遺跡[29]、上峰町と東脊振村にまたがる二塚山遺跡[30]、西石動遺跡、東背振村石動四本松遺跡[31]、吉野ヶ里遺跡、神埼町花浦遺跡・同志波屋六本松遺跡[32]・同朝日北遺跡[33]などから墓地跡が調査されている。また、平野部においても神埼町利田柳遺跡[34]・同荒堅目遺跡[35]、詫田西分遺跡・同姉遺跡[36]、三根町本分遺跡[37]、さらには弥生時代終末期を中心とした諸富町村中角遺跡[38]・同徳富権現堂遺跡などの調査により、弥生時代集落立地の南下を示した。

このような多数の遺跡の中には、先に挙げた切通跡遺跡や五本谷遺跡・二塚山遺跡・横田遺跡・三津永田遺跡、東脊振村石動四本松遺跡・三田川町の目達原桜馬場遺跡[39]・千代田町高志神社遺跡[40]、同吉野ケ里遺跡北墳丘墓などから漢式鏡、青銅製や鉄製の武器・武器形祭器、装身具などの重要な遺物が出土している。これに加えて西石動遺跡や姉遺跡、佐賀市櫟の木遺跡・同鍋島本村南遺跡[41]、大和町惣座遺跡[42]、吉野ヶ里遺跡からは初期のものを含む銅剣・銅矛・銅戈の鋳型などが出土している。これらは当地域が国内において青銅器製作が開始されたことを示し、弥生時代の青銅器生産に重要な資料を提供した。豊かな農業生産を背景に先進的な金属器文化が花開いていたことを示している。

これら弥生時代の数多くの集落や墓地跡の調査成果は、水稲稲作を基盤として各種の手工業的生産をおこない人口密集地として発展したこの地域の特徴を示したが、一つの地域をめぐる集落群や墓地群の構造や格差、あるいは相互の有機的な関係を窺い知る資料として重要である。

古墳時代では、集落遺跡としては三田川町下中杖遺跡[43]、東脊振村タヶ里遺跡・同浦田遺跡・同瀬ノ尾遺跡[44]、神埼町志波屋六本松遺跡・同馬郡遺跡などで確認されており、墳墓としては東脊振村西一本杉遺跡の墳墓[45]、五本谷遺跡の方形周溝墓群[46]、吉野ヶ里遺跡の前方後方形墳墓や方形周溝墓群、佐賀市銚子塚前方後円墳[47]、三田川町と上峰町・東脊振村にまたがる目達原古墳群[48]（前方後円墳7基・円墳4基以上）、神埼町伊勢塚前方後円墳、二子山前方後円墳、東脊振村下三津西前方後円墳[49]、

中原町姫方前方後円墳などの古墳が築造される。山麓部では中原町山口、上峰町谷渡・同屋形原・同鎮西山南麓、神埼町猿獄[50]・天神尾古墳群[51]などの古墳群が形成される。『古事記』や『続日本紀』『国造本紀』にみえる目達原古墳群を営んだと考えられる筑紫米多国造、『日本書紀』にみえる嶺県主、『続日本紀』にみえる佐嘉君などの豪族や有力農民層の動向が窺い知れる。

奈良時代には律令国家の成立に伴い、この地域の内中原町・上峰町・三根町は三根郡（律令時代初期には神埼町に属する）、現神埼郡と佐賀市の南部の一部は神埼郡、大和町、佐賀市の大半は佐嘉郡の範囲に含まれた。大和町には国庁跡[52]、国分寺[53]・国分尼寺跡などが存在し、その南には東西方向の駅路跡が存在する。この駅路跡は大和町から吉野ケ里遺跡を経て中原町までの約17km区間に痕跡をとどめており[54]、数ヶ所で発掘調査が実施され道路側溝や切通しなどが確認されている[55]。吉野ケ里遺跡や西に接する神埼町中園遺跡・同志波屋二の坪遺跡などの調査で、企画的に配置された多数の掘立柱建物跡群や井戸跡群が発掘され、木簡や墨書土器や箆描き土器（「神埼厨」）などの文字資料、帯金具が出土[56]するなど、神埼郡家や神埼駅家関連遺構の存在が想起される。この時代の集落跡も幾つか確認されているが、上峰町塔の塚廃寺[57]、東脊振村辛上廃寺[58]などの寺院跡は著名である。なお、ここ数年調査を継続している辛上廃寺では、方一町弱の寺域と、その内部に門跡や金堂と目される四面庇建物跡、塔の基壇などの遺構が確認され[59]、平成15年度の調査では推定金堂跡の北方約25ｍの位置で、僧坊と考えられる新旧２時期の掘立柱建物跡群が確認された。

平安時代には690町の勅旨田から発展した「神埼荘」と呼ばれる院領荘園が神埼郡域の大部分を占めるようになったと推定される。多数の中国の越州窯青磁や白磁・緑釉陶器・新羅の青銅箸・木製馬鞍などを出土した三田川町下中杖遺跡、木簡や緑釉陶器などを出土した神埼町荒堅目遺跡などか知られているが、他にも吉野ヶ里遺跡など平安時代から中世にかけての輸入陶磁器を出土する遺跡が数多く存在しており、対中国貿易拠点の一つとしての神埼荘の性格を窺わせている。

中世になると武士階級が実質的支配権を確立したと考えられ、小山塊上の山城跡や山城麓の館跡、平野部には環濠館跡などが多数存在しており、勢福寺城麓の神埼町城原二本谷西遺跡[60]や同町姉川城跡[61]などのように発掘調査によってその内容が明らかになったものも存在する。また、吉野ケ里遺跡内には建治4・弘安元（1278）年、元寇の際に勅願祈祷寺として創建されたとされる田手川左岸の東妙寺より20年前の正嘉2（1258）年創建とされる妙法寺（尼寺）跡が存在している。

以上のように、この地域は縄文時代晩期（弥生時代早期）以降、農業と金属器などの先進文化をいち早く摂取し発展させたものと考えられる。吉野ケ里遺跡が立地する佐賀平野東部地域が長期間にわたり政治的・軍事的に重要な位置を占めた背景には、水稲耕作に適した気候と広大な肥沃な土地や、南に国内外に開かれた有明海をもつなどの有利な地理的条件が少なからず影響しているものと考えられる。

註

(1) 佐賀県教育委員会『町南遺跡』佐賀県文化財調査報告書第68集　1983

(2) 神埼町教育委員会『船塚遺跡』神埼町文化財調査報告書第10集　1984

(3) 七田忠志「佐賀県戦場ヶ谷出土弥生式有紋土器について」『史前学雑誌』6―2　1934

(4) 佐賀県教育委員会「香田遺跡」『香田遺跡』佐賀県文化財調査報告書第57集　1981

(5) 神埼町教育委員会『志波屋六本松遺跡』神埼町文化財調査報告書第9集　1983
(6) 八尋実「志波屋一の坪遺跡」『佐賀県農業基盤整備事業に伴う文化財調査報告書８』佐賀県文化財調査報告書第98集　1990
(7) 久保伸洋「夕ヶ里遺跡」『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財報告書』1，佐賀県文化財調査報告書第69集　1983
(8) 佐賀県教育委員会『金立開拓遺跡』佐賀県文化財調査報告書第77集　1984
(9) 佐賀県教育委員会『久保泉丸山遺跡』佐賀県文化財調査報告書第84集　1986
(10) 佐賀県教育委員会「鈴熊遺跡」『九州自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報第４集』　1981
(11) 神埼町教育委員会『馬郡遺跡』神埼町文化財調査報告書第７集　1981
(12) 佐賀県教育委員会「浦田遺跡」『西原遺跡』佐賀県文化財調査報告書第66集　1983
(13) 佐賀県教育委員会「西石動遺跡」『西石動遺跡』佐賀県文化財調査報告書第97集　1990
(14) 東脊振村教育委員会『松原遺跡10区』東脊振村文化財調査報告書第22集　1998
(15) 佐賀県教育委員会「切畑遺跡」『切畑遺跡』佐賀県文化財調査報告書第116集　1993
(16) 千代田町教育委員会『黒井八本松遺跡』千代田町文化財調査報告書　1986
千代田町教育委員会『黒井遺跡』千代田町文化財調査報告書　1987
(17) 千代田町教育委員会『詫田西分貝塚』千代田町文化財調査報告書第２集　1983
千代田町教育委員会『詫田西分遺跡』千代田町文化財調査報告書第20集　1996
(18) 金関丈夫・金関恕・原口昌三「佐賀県切通遺跡」『日本農耕文化の生成』　1961
(19) 金関丈夫・坪井清足・金関恕「佐賀県三津永田遺跡」『日本農耕文化の生成』　1961
(20) 木下之治「考古学〈弥生時代〉―神埼郡東脊振村横田遺跡」『新郷土』20－1　1967
(21) 多々良友博『姫方原遺跡Ｆ地区』中野建設・中野ハウジング　1981
(22) 中原町教育委員会『原古賀遺跡群(1)』中原町文化財調査報告書第９集　1990
(23) 上峰村教育委員会『一本谷遺跡』上峰村文化財調査報告書　1983
(24) 佐賀県教育委員会「下石動遺跡」『下石動遺跡』佐賀県文化財調査報告書第86集　1987
(25) 神埼町教育委員会『的五本黒木遺跡』神埼町文化財調査報告書第11集　1985
(26) 佐賀県教育委員会『川寄吉原遺跡』佐賀県文化財調査報告書第61集　1981
(27) 佐賀市教育委員会『琵琶原遺跡』佐賀市文化財調査報告書第13集　1981　他
(28) 佐賀市教育委員会『村徳永遺跡―Ｅ・Ｆ・Ｇ・Ｈ地区の調査』佐賀市文化財調査報告書第32集　1990
(29) 上峰村教育委員会『船石遺跡』上峰村文化財調査報告書　1983
(30) 佐賀県教育委員会「二塚山遺跡」『二塚山』佐賀県文化財調査報告書第46集　1979
(31) 東脊振村教育委員会『石動四本松遺跡』東脊振村文化財調査報告書第19集　1995
(32) 神埼町教育委員会『志波屋六本松遺跡』神埼町文化財調査報告書第９集　1983
(33) 佐賀県教育委員会「朝日北遺跡」『朝日北遺跡』佐賀県文化財調査報告書第110集　1992
(34) 神埼町教育委員会『利田柳遺跡Ⅲ区』神埼町文化財調査報告書　1980
(35) 神埼町教育委員会『荒堅目遺跡』神埼町文化財調査報告書第12集　1985
(36) 千代田町教育委員会『姉遺跡Ⅰ』千代田町文化財調査報告書第３集　1985
(37) 藤口健二他『本分貝塚』佐賀県立博物館調査研究書第７集　1984

(38) 諸富町教育委員会『村中角遺跡』諸富町文化財調査報告書第２集　1985
(39) 七田忠昭「文様ある銅矛について―佐賀県目達原出土銅矛の紹介を兼ねて」『九州考古学』52 1976
(40) 千代田町教育委員会『高志神社遺跡』千代田町文化財調査報告書第27集　2000
(41) 佐賀市教育委員会『鍋島本村南遺跡―１・２区の調査』佐賀市文化財調査報告書第35集　1991
(42) 佐賀県教育委員会「惣座遺跡」『惣座遺跡』佐賀県文化財調査報告書第96集　1990
(43) 佐賀県教育委員会『下中杖遺跡』佐賀県文化財調査報告書第54集　1980
(44) 久保伸洋「瀬ノ尾遺跡」『佐賀県文化財年報』1　1996
(45) 佐賀県教育委員会「西一本杉遺跡」『西原遺跡』佐賀県文化財調査報告書第66集　1982
(46) 佐賀県教育委員会「五本谷遺跡」『二塚山』佐賀県文化財調査報告書第46集　1979
(47) 佐賀市教育委員会『佐賀市金立町銚子塚』　1976
(48) 松尾禎作「目達原古墳群調査報告書」佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告書第9輯　1950
(49) 東脊振村教育委員会「下三津西古墳」『平成6・7年度東脊振村内文化財調査報告書』東脊振村文化財調査報告書第21集　1997
(50) 佐賀県教育委員会「猿嶽A遺跡」「猿嶽C・D遺跡」『切畑遺跡』佐賀県文化財調査報告書第116集　1993
(51) 神埼町教育委員会『早稲隈山』神埼町文化財調査報告書第59集　1997
(52) 佐賀県教育委員会『肥前国府跡II』『肥前国府跡Ⅲ』佐賀県文化財調査報告書第58集・78集　1981・1985
(53) 大和町教育委員会『肥前国分寺跡』　1976
(54) 木下良「空中写真に認められる想定駅路」『びぞん』64　1976
(55) 七田忠昭「肥前神埼郡における駅路と周辺の官衙的建物群の調査」『条里制研究』4　1988
佐賀県教育委員会『古代官道・西海道肥前跡』　1995
(56) 八尋実「馬郡・竹原遺跡群の調査」『佐賀県における古代官衙遺跡の調査』　1997
(57) 松尾禎作「塔の塚廃寺址」佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告書第7輯　1940
(58) 七田忠志「肥前風土記神埼郡の條に於ける寺院に関する一考察」『上代文化』13　1935
松尾禎作「東脊振村辛上廃寺址の調査」佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告書第5輯　1936
佐賀県教育委員会『吉野ヶ里銅鐸―吉野ケ里遺跡大曲一の坪地区発掘調査概要報告書―』佐賀県文化財調査報告書第152集　2002
(60) 八尋実「城原二本谷西遺跡」『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書』12，佐賀県文化財調査報告書第122集　1994
(61) 神埼町教育委員会『姉川城跡』神埼町文化財調査報告書第50集　1996
神埼町教育委員会『姉川城跡―7次の発掘調査報告書』神埼町文化財調査報告書第63集　1998

Ⅲ．調査の概要と成果

地区別に遺構と遺物に分けて、確認調査の成果の概要を報告する。個々の遺構・遺物の詳細については、後の正式な調査報告書に掲載できるように整理・分析作業を進めているので、ここでは主なものについてのみ記す。今後の机上の整理・分析作業によって、時期別の遺構数や遺構の時期などに変更が生じる可能性が高いと考えられるので、本報告では、主に遺構数やそれらの変遷についての傾向を示してみたい。

１．吉野ヶ里地区Ⅴ区の遺構と遺物

吉野ヶ里地区Ⅴ区は、遺跡中央の尾根から西側の丘陵裾部にあたる三田川町域の、調査以前は畑地として利用されていた地区である。特別史跡区域にあたる。第306・307調査区は、南内郭跡西方の弥生時代後期に属する外環壕以西の丘陵緩斜面丘陵に設けた調査区である。昭和63年度まで実施していた神埼工業団地計画に伴う発掘調査の際外環壕に接する一部の発掘調査を実施し、大型のものを多く含む掘立柱建物跡群を検出したため、この地区一帯には弥生時代後期の多くの高床倉庫群の存在を推定していた。昭和63年度調査区の南から西にかけて広がる裾部について、掘立柱建物跡群の分布範囲などの状況把握を目的として第306・307調査区を設け確認調査を実施した。

調査の結果、第306調査区と第307調査区南部にかけて、弥生時代から古代・中世にかけての多数の掘立柱建物跡や弥生時代・古墳時代前期の竪穴建物跡などが、第307調査区北部では弥生時代中期の甕棺墓・土壙墓群や古墳時代後期の竪穴建物跡・掘立柱建物跡などが検出された。第307調査区の南部は、第306調査区と関連深い一連の遺構が存在するので両調査区をまとめ、第307調査区北部と分けて報告する。

(1)　第306調査区・第307調査区南部

第306調査区・第307調査区南部は、それぞれ昭和63年度まで工業団地計画に伴って発掘調査を実施し、弥生時代の多くの掘立柱建物跡を検出した吉野ヶ里地区Ⅴ区と接した南・南西方と西方に設けた調査区である。調査の目的としては、遺跡の全体像解明のため高床倉庫と考えられる掘立柱建物跡群の存在範囲とその内容を確認することと、国土交通省による本格復元整備の設計根拠を得ることであった。

昭和63年度までの調査によって弥生時代後期の外環壕の西に接した約5,400㎡の範囲で、弥生時代（後期から終末期に属するものが大半）の掘立柱建物跡40基、竪穴建物跡４基以上や溝跡のほか、古墳時代から中世にかけての掘立柱建物跡４基以上、井戸跡12基などが発掘されていた（後の整理作業によってあらたに17基の掘立柱建物跡の存在が明らかになった）。

平成10年度の第306調査区・第307調査区南部の約8.450㎡の範囲調査で、弥生時代から中世にかけての竪穴建物跡76基以上・掘立柱建物跡106基以上のほか、溝跡、墳墓跡、土壙、井戸跡、柵跡などが発掘された。時期を判定する遺物が出土していない遺構も多いが、遺構の形態や先後関係などから弥生時代に属する掘立柱建物跡71基以上、竪穴建物跡48基、古墳時代の竪穴建物跡20基以上、古墳時代から中世にかけて（大半が平安時代と考えられる）の掘立柱建物跡33基以上存在したものと考えられる。明らかに掘立柱建物を構成すると考えられる柱穴が多数存在しており、さらに多くの掘立柱建物跡が存在することは確実である。他に弥生時代の甕棺墓１基、古墳時代のある空間を囲むように掘削された溝跡２条、平安時代の井戸跡５基・土壙墓１基・円形周溝状遺構２基、中世の溝跡

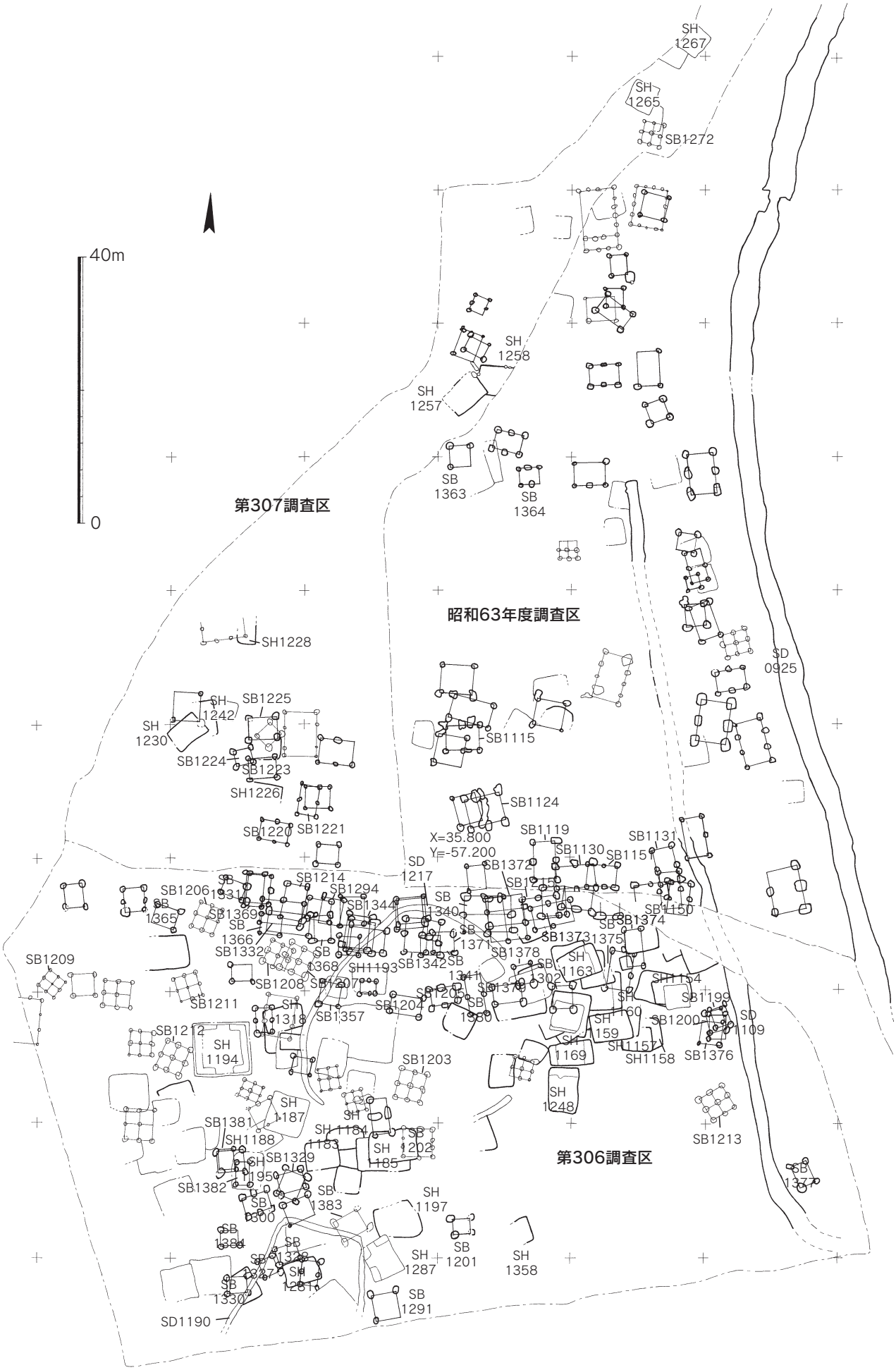


Fig. 4　吉野ヶ里地区Ⅴ区第306・307調査区 遺構分布略図
（太線のものは弥生時代）

15条などを検出した。

①遺構

ｉ) 弥生時代の遺構

竪穴建物跡

竪穴建物跡は、主に第306調査区の中央部に集中して存在するが、南部・北部にも数基存在する。この調査区での竪穴建物の初現は、工業団地計画に伴う発掘調査区の中央南寄りの位置で平面円形のものが検出されており、弥生時代中期前半に遡るものと考えられる。中期後半に属する平面楕円形のものも第306調査区の中央西寄りの位置に１基(SH1184)存在しており、中期全般にわたって集落域となっていたことが理解できる。中期の前半から後半にかけての竪穴建物跡は検出数が少ないので、密集して存在したとは考えられない。

後期に属すると考えられる平面長方形のものは主に南東部を除く第306調査区全域と第307調査区南部にわたって存在するが、第306調査区北部の掘立柱建物跡群が東西方向に数多く存在する地域には存在しない。後世の削平によって全体の形態を知ることができないものも多いが、45基程度は存在しているものと考えられる。出土遺物や遺構の先後関係などから後期初頭から前半に属すると考えられるものが数基存在するが、大半が後期後半から終末期に属するものである。

遺存状態がある程度良いものについてみると、基本的に平面長方形で、長中軸線上に２個の柱穴、床面中央に炉、両短辺（妻）側にベッド状遺構、片側の長辺の中央壁際に土壙を備えている。また壁からにじみ出る水を壁際土壙へ排水するため壁際に小溝を巡らせたものも存在する。

遺存状態が比較的良好なものを図示した(Fig.５)。SH1184竪穴建物跡は、隅丸長方形に近い平面楕円形で3.35ｍ×5.65ｍの規模である。南壁際に土壙むが存在し、主柱穴は２個と考えられる。中期後半の土器を出土した。SH1169竪穴建物跡は平面長方形で、規模は3.65ｍ×6.57ｍであるが、西側で幅が狭くなっている。東西の壁際にベッド状遺構が存在し、２個の柱穴と中央に炉跡、南壁際に土壙が存在する。SH1157竪穴建物跡は平面長方形で、規模は3.61ｍ×4.62ｍである。２個の柱穴と中央に炉跡が存在する。柱穴が短辺（妻）側の壁に接近しすぎているので、東西両側に存在したベッド状遺構が削平された可能性がつよい。SH1281竪穴建物跡は平面長方形で、規模は3.53ｍ×5.41ｍで、２個の柱穴と中央に炉跡、南壁際に土壙が存在する。壁際には小溝が巡っており、壁際土壙に集水する仕組みとなっているようである。この建物跡もSH1157竪穴建物跡と同様、元来ベッド状遺構が存在したか、あるいは切妻形の屋根構造であった可能性もある。

屋内から古墳時代初頭の多数の土器群を出土したSH1287竪穴建物跡は、平面長方形で、四隅のうちの３ヶ所にベッド状遺構をもち、内部から弥生時代後期終末期の土器も出土することなどから、弥生時代に属する可能性もある。

掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、第306調査区の南東部と西中央部、第307調査区の北部を除く、ほぼ全域に存在しているが、第306調査区南西部と、同調査区北部、第307調査区南部の３ヶ所に集中している。柱の本数が判明しているもので、１間×１間のもの44基、１間×２間のもの26基、２間×２間の総柱のもの１基、２間×３間の総柱のもの１基となっており、総柱構造のもの以外は、１間×１間の建物が１間×２間の建物に対して２倍弱の割合で多くなっている。しかし、上記の２基の総柱建物跡以外

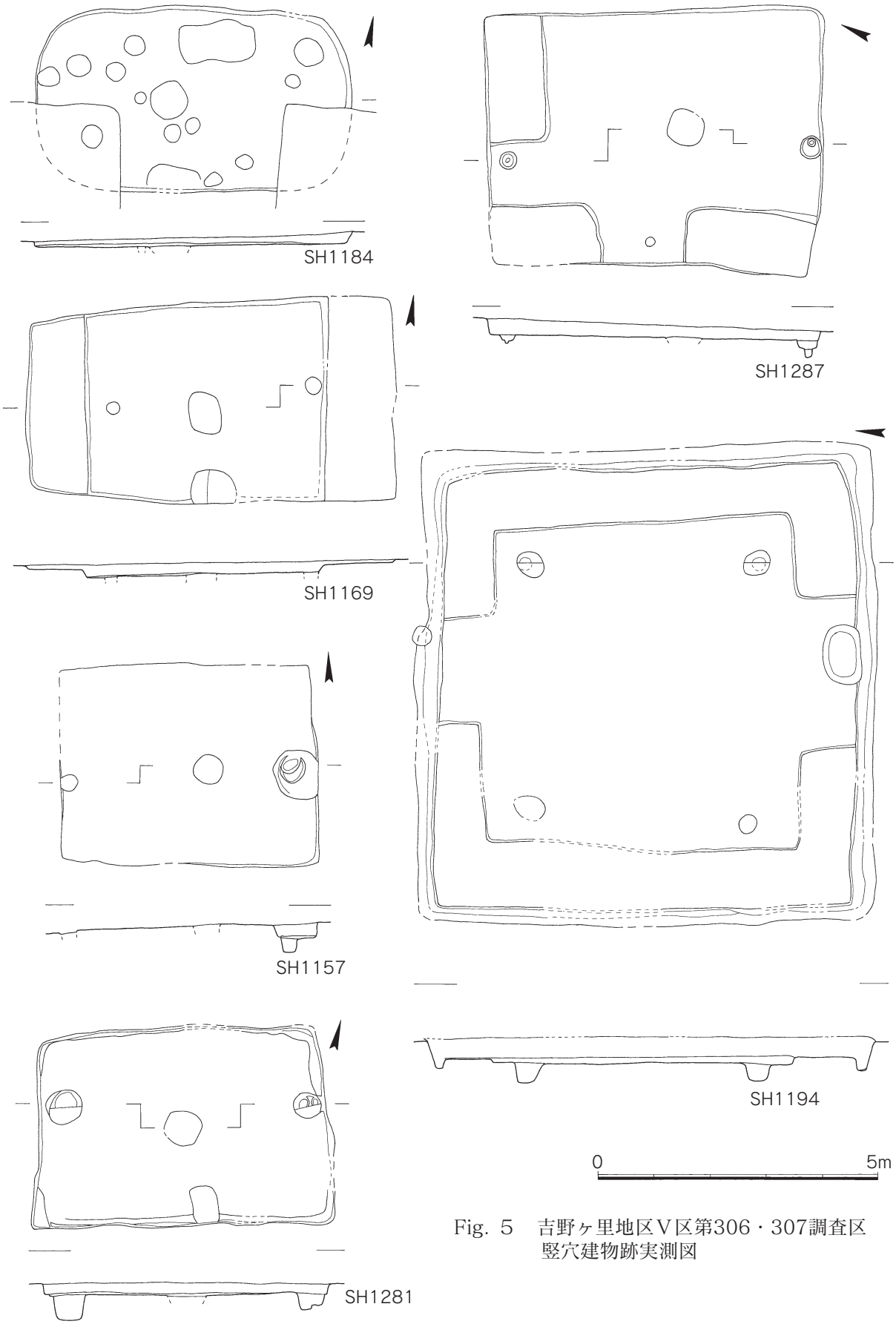


Fig. 5　吉野ヶ里地区Ⅴ区第306・307調査区
竪穴建物跡実測図

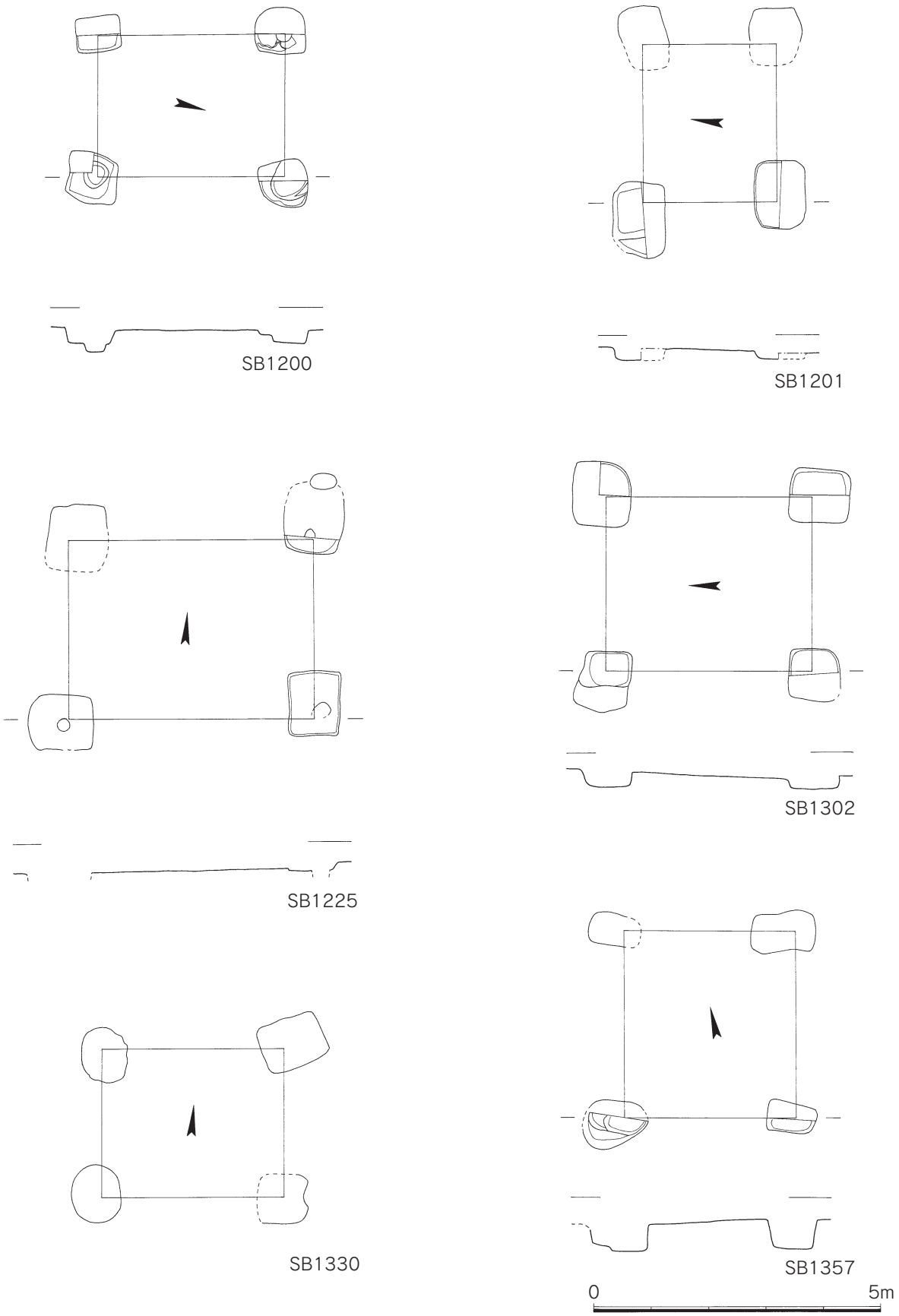


Fig. 6　吉野ヶ里地区Ⅴ区第306・307調査区 掘立柱建物跡実測図(1)

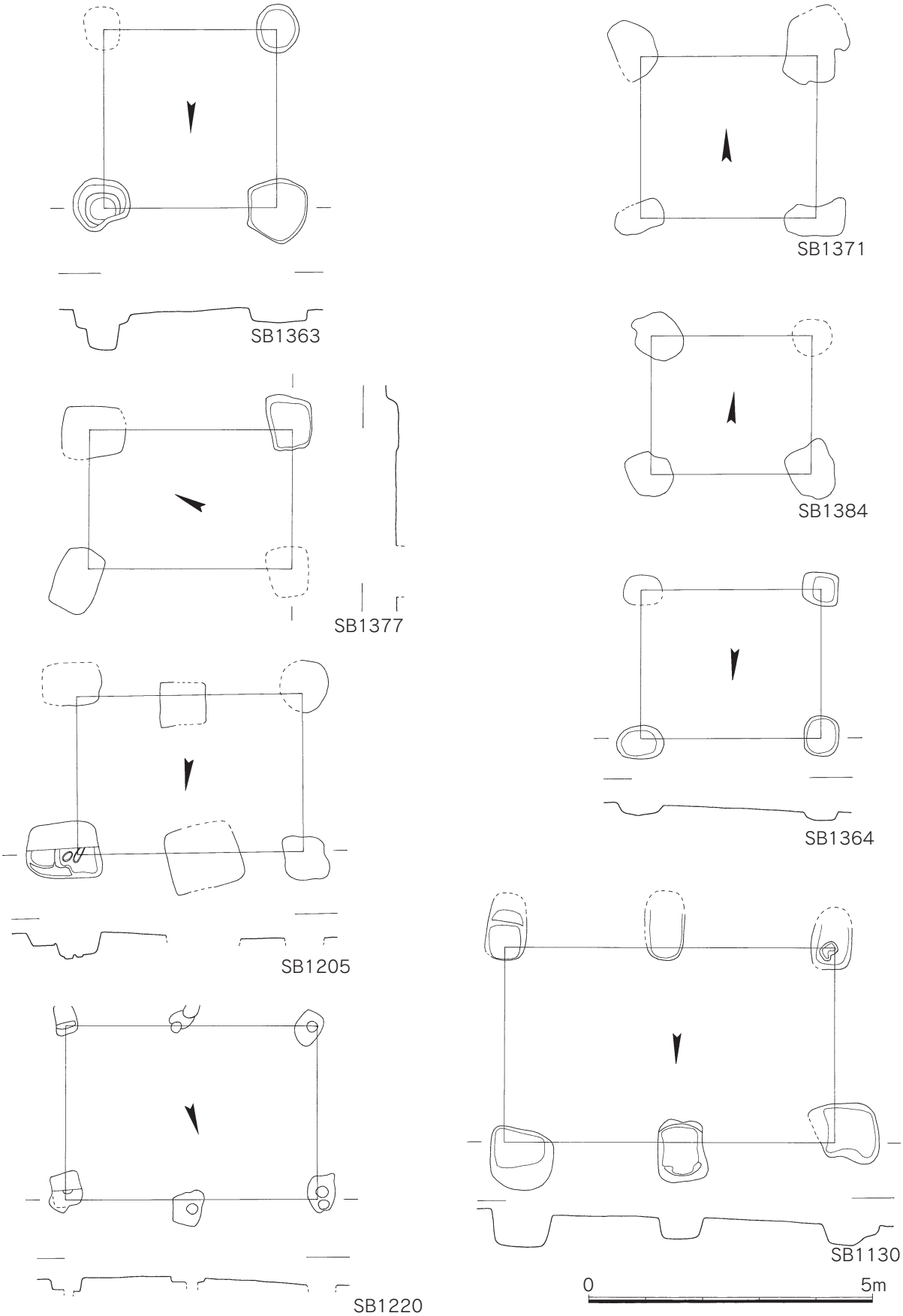


Fig. 7　吉野ヶ里地区Ⅴ区第306・307調査区 掘立柱建物跡実測図(2)

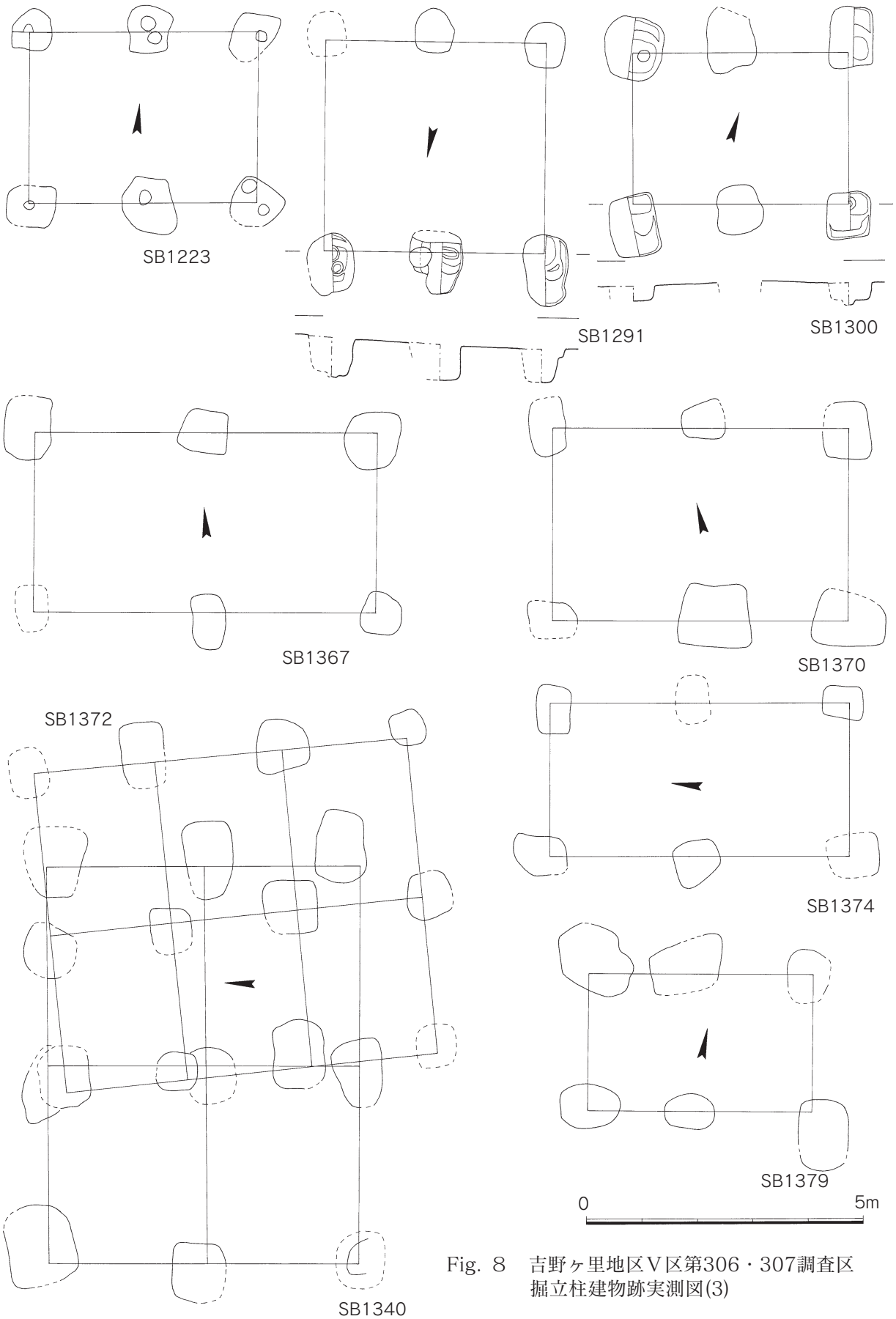


Fig. 8　吉野ヶ里地区Ⅴ区第306・307調査区
掘立柱建物跡実測図(3)

の掘立柱建物跡は、後に述べるSD1109溝跡とSD0925外環壕跡との間の南北に細長い空間に存在する掘立柱建物跡群に較べると小規模なものである。

建物方向は基本的に東西棟と南北棟に分けられるが、やや傾いたものも存在する。第307調査区南部の建物跡は東南東―西北西方向に傾き、第306調査区南西部の建物跡は東北東―西南西方向に傾く傾向がある。また、第306調査区北部では、緩やかに湾曲する弧状の空白地に並行するように、東半部ではわずかに東北東―西南西方向に傾き、西半部では東南東―西北西方向にわずかに傾いている。全体的にみると東西棟のものが多いが、第306調査区北部では、東部の道路状空白地南や西部の空白地北では南北棟のものが目立っている。

弥生時代の掘立柱建物と考えられる建物跡を構成する柱穴の平面形は、方形ないし長方形を基調としている。SB1291・SB1300掘立柱建物跡の柱穴のように、断面階段状に掘下げたものもあるが、径の大きい柱材を立てる場合に有効な工法と考えられる。なお、この場合、桁柱はそれぞれ外側から内側に向かって傾斜がつけられていることが多い。

１間×１間の建物跡は、2.30m×2.55mと小規模のもの（SB1199）から、4.15m×4.55m規模のもの（SB1454）まで存在するが、大半は約３m四方のものが多い。１間×２間の建物跡は、1.97m×2.33mと極小規模のもの（SB1304）から、3.30m×6.10m規模のもの（SB1430）まで存在する。

第306調査区北部の群は、東西方向に延びる道路と考えられる帯状の遺構空白地の両側に沿って密集して存在するが、特に空白地の北側では多数の建物跡群が重複して存在する。また、この群の東寄りの位置には２間×２間の総柱建物であるSB1340掘立柱建物跡と、２間×３間の総柱建物であるSB1372掘立柱建物跡が重複して存在する（Fig.８）。前者は5.16m×7.17m、後者は5.52m×6.72mの規模で、柱穴の規模も大きい。前者が後者より古く、ほぼ同じ位置に存在することから、同じ機能をもった建物を建替えたものとみられる。一段掘下げた前者の柱穴からは後期終末期のものらしい土器小片が出土している。

遺存状態が比較的良好なものを図示した(Fig.６～８)。それぞれの規模は１間×１間のものでSB1200が2.50m×3.25m、SB1201が2.33m×2.75m、SB1225が3.10m×4.25m、SB1302が3.03m×3.57m、SB1330が2.57m×3.21m、SB1357が3.00m×3.25m、SB1363が3.06m×3.15m、SB1364が2.62m×3.18m、SB1371が2.83m×3.12m、SB1377が2.45m×3.57m、SB1384が2.44m×2.83m、２間×２間のものでSB1130が3.42m×5.82m、SB1205が2.80m×3.96m、SB1220が3.07m×4.57m、SB1223が3.06m×4.12m、SB1291が3.80m×3.99m、SB1300が2.73m×3.90m、SB1367が3.24m×6.20m、SB1370が3.49m×5.34m、SB1374が2.78m×5.42m、SB1379が2.48m×4.06mである。

溝跡

工業団地計画に伴う発掘調査によって南内郭跡とこの地域を隔てる外環壕跡に並行して西側に約20mの間隔をもって存在する溝跡が検出されたが、第306調査区東部で、この溝跡の南への延長部分であるSD1109溝跡を検出した。後世の削平がひどい部分で幅1.5m、広い部分で3.0mの幅が遺存していおり、南端で東に湾曲しSD0925外環壕跡に合流するものと考えられる。

この溝跡とSD0925外環壕跡との間の南北約120mの細長い空間には、以前の発掘調査で掘立柱建物跡が検出されているが、特に大型のものが多くを占めていることは注目される。なお、この溝跡の

南端に近い位置の東内側に存在するSB1377掘立柱建物跡は、この空間へ出入りするための櫓門的な機能をもっていた可能性もある。

甕棺墓

第306調査区中央部で１基（SJ1189）を確認した。このSJ1189甕棺墓は、乳児を葬ったいわゆる小児棺で、本体（下甕）に甕、蓋（上甕）として口縁部を打欠いた鉢を利用している。下甕に蓋を覆ういわゆる覆口式の合せ口甕棺墓である。平面楕円形のSH1184竪穴建物跡などで代表される中期後半期の集落内での埋葬の痕跡と考えられる。

ⅱ）古墳時代以降の遺構

竪穴建物跡

古墳時代に属する竪穴建物跡は、第306調査区西半部に集中して存在するが、その基数は20基以上にのぼるものと考えられる。ほとんどが平面正方形で、古墳時代初頭から後期にかけてのものである。古墳時代初頭に属する竪穴建物跡の中には大型のもの２基(SH1194・SH1181)や、弥生時代後期以来伝統的なベッド付き平面長方形建物の内部から多量の土器群を出土したもの(SH1287)も存在した。

第306調査区の中央西寄りに位置するSH1194竪穴建物跡は、8.25m×8.50m規模の平面方形で、東西の壁際にそれぞれコ字形のベッド状遺構が、各コーナーの内側に４個の柱穴が存在する。壁際には排水のための小溝が巡っており、南壁際に設けられた土壙に集水する仕組みとなっている。埋土からは甕・壺・鉢・高坏・器台など多種の土器が出土したが、坏状の小型鉢が多く出土したことはこの建物の昨日を考える上で注目される。SH1181竪穴建物跡は、床面がかろうじて残る程度まで削平されていたが、平面形は方形で8.80m×9.00mと大型である。

第306調査区の南部西寄りに位置するSH1287竪穴建物跡はほぼ南北に長い4.84m×6.10mの平面長方形で、北東と北西・南西のコーナーのそれぞれベッド状遺構が中央部には炉跡が、南北の壁際中央にそれぞれ１個の柱穴が存在する。また、東壁の中央南寄りの位置には壁際土壙が存在する。埋土からは、弥生時代後期終末期の土器少数と、古墳時代初頭の多種多様な土器が多数出土したが、中には山陰地方など他地域から持ち込まれたもの、あるいは影響を受けた土器が存在する。

また、平面方形の竪穴建物跡の中には６世紀代の須恵器・土師器などを出土するものもあるが、第306調査区中央北半部に存在する径約30mの空間を丸く囲む溝跡や、同調査区南西部に存在する平面台形に屈曲して巡る溝跡から６世紀代の須恵器・土師器などが出土することと合わせ、一帯の空間の役割を考える必要がある。いずれにせよ、一帯は大きく古墳時代初頭と後期の２時期に集落となっていたことは確実である。

なお、古墳時代初頭の墳墓群は後に述べるとおり、工業団地計画に伴う発掘調査で発見された前方後方墳２基や方形周溝墓３基、平成11年度から13年度にかけて実施した確認調査で確認された前方後円墳２基・方形周溝墓１基など、東方あるいは東南方にあたる南内郭跡南東部から南約250mの範囲の丘陵尾根上に存在していたことが判明している。

掘立柱建物跡

古墳時代の掘立柱建物跡の確実なものは確認できなかった。古墳時代初頭の大型の竪穴建物跡が確認されていることから、弥生時代後期終末期の所産と考えた掘立柱建物跡の中に一部当該期の建物が

存在した可能性は否めない。また、第307調査区北部で古墳時代後期の竪穴建物跡と共存する２間×２間の総柱掘立柱建物跡が存在するので、平安時代を中心とした古代の総柱建物跡の中に古墳時代のものが一部存在する可能性もある。

平安時代以降の掘立柱建物跡は、第306調査区中央を東西方向に帯状に分布するが、第307調査区南部にも一部存在する。柱穴のほとんどが平面円形基調である。大半が２間×２間の総柱建物で、2.46m×3.00m規模のもの（SB1438掘立柱建物跡）から3.93m×4.35m規模のもの（SB1203掘立柱建物跡）まであるが。総柱ではない掘立柱建物跡も第306調査区西部と第307調査区南部に存在する。このうち規模が判明している建物跡としては、第306調査区の中央西寄りに位置するSB1448掘立柱建物跡と第307調査区南部中央に位置するSB1452掘立柱建物跡である。両者とも１間×３間の６本柱構造であるが、後者は桁柱の中央の間口が広くなっている。前者は4.30m×6.36m、後者は4.82m×6.65mの規模である。

溝跡

第306調査区中央北半部に径約30mの空間を丸く囲むSD1217溝跡や、同調査区南西部に平面台形に屈曲して巡るSD1190溝跡が存在する。いずれも幅0.6m～1.1mと小規模である。埋土からは６世紀前後の古墳時代後期の須恵器・土師器などを出土した。これらの溝跡の機能については、周辺の同時代の遺構群の分析を進めて考える必要がある。

井戸跡

井戸跡は、工業団地計画に伴う発掘調査により10基が検出されていたが、新たに10基程度が確認された。すべて平面の確認にとどめたが、その際出土した土器片などから大半が平安時代のものと考えられる。

土壙墓

第306調査区中央に平安時代から鎌倉時代にかけての土壙墓が数基存在する。墓壙内から瓦器碗や龍泉窯青磁碗などを出土した。また、第306調査区北西隅には平安時代のものと考えられるST1295円形周溝墓が存在する。2.05m×2.80mの平面楕円形の部分を幅0.35m～0.70mの周溝が囲み、中に0.50m×1.93mの棺となる土壙を設けている。第307調査区南西隅に円形周溝状遺構が２基存在するが、これらも同様の墳墓と考えられる。

(2)　第307調査区北部

第307調査区北部は、それぞれ昭和63年度まで工業団地計画に伴って発掘調査を実施し、弥生時代の多くの掘立柱建物跡を検出した吉野ヶ里地区Ⅴ区北部の西方に接して設けた調査区である。約650㎡の南北に細長い調査区から、弥生時代の竪穴建物跡２基・掘立柱建物跡２基・円形周溝状遺構１基・甕棺墓２基・土壙墓５基、古墳時代の竪穴建物跡５基・掘立柱建物跡１基、溝跡などを検出した。

① 遺構

ｉ) 弥生時代の遺構

竪穴建物跡

調査区南部に２基が重複して存在する。西部は削平のため消滅しているが、いずれも平面長方形であったものと考えられる。SB1257竪穴建物跡は4.20m×5.85mの規模で、長辺中軸線上に２個の

主柱穴、中央に炉、南東側の壁際中央には土壙を設けている。また、この土壙に向かって壁際には小溝が巡っている。内部の埋土からは後期前半の甕・壺・鉢・器台などが出土した。SB1257竪穴建物跡より古い時期のSH1258竪穴建物跡は幅4.32m×5m以上の規模である。

掘立柱建物跡

調査区南部の竪穴建物の北側に３基存在する。いずれも１間×１間の４本柱構造のもの２基（SB1389・SB 1470）と１間×２間のもの１基（SB1469）で、柱穴の形状は円形基調のものが多いが方形状のものも存在する。SB1389建物跡は3.22m×4.17m、SB1470建物跡は2.25m×3.28m、SB1469建物跡は2.22m×2.63mの規模である。後期に属するものと考えられる。

甕棺墓・土壙墓

調査区の北部で南北５m、東西３mの狭い範囲に集中して中期初頭前後に営まれたと考えられる甕棺墓２基・土壙墓５基が存在する。SJ1278甕棺墓は石蓋甕棺墓で、甕棺は中期初頭の城ノ越式期のものと考えられる胴が長く口縁部がくびれる形態である。土壙墓も規模が小さく、いずれも乳幼児を埋葬した墳墓と考えられる。工業団地計画に伴って発掘された吉野ヶ里地区Ｖ区北西部で集中して発掘された甕棺墓・土壙墓と同一の墓地と考えられる。これらを含めると元来径５～６mの小規模な墓域であったものと考えられる。

円形周溝状遺構

弥生時代後期前半の２基の竪穴建物跡のすぐ北に位置する。径約2.5mの円形に近い平面空間を幅0.5m前後の溝が囲む。竪穴建物跡とほぼ同時期のものと考えられる。

ⅱ）古墳時代以降の遺構

竪穴建物跡

調査区北半部に５基が存在する。いずれも平面方形と考えられる小型のものである。遺存状態が良好なSH1265・SH1267竪穴建物跡では、各コーナーの内側に４個の柱穴が存在する。また、これらの建物跡ではそれぞれ西側と北側に竈と煙道が存在した。全域を確認したSH1265竪穴建物跡は、4.03m×4.35mの規模であった。

掘立柱建物跡

調査区北部に存在する３基の竪穴建物跡の南にSB1272掘立柱建物跡１基が存在する。２間×２間の総柱建物跡で2.90m×3.22mと小規模なものであった。高床倉庫跡と考えられる。

② 遺物

竪穴建物跡出土遺物（Fig.９～14）

竪穴建物跡の屋内埋土から出土した土器のうち図示したものの概要ついては、以下のとおりである。

SH1163竪穴建物跡からは、甕が出土したが、(Fig.９―４・５)のように脚付きのものもある。(1)は外面にタタキを施した外来系の甕である。SH1183竪穴建物跡からは、中期中頃と後半の時期の甕(Fig.９―６・７)が出土し、SH1193竪穴建物跡からは、中期末から後期前半の時期の甕(Fig.９―８・９)が出土した。

大型竪穴建物跡であるSH1194竪穴建物跡からは、鉢・甕・壺・高坏・器台など古墳時代初頭に属す

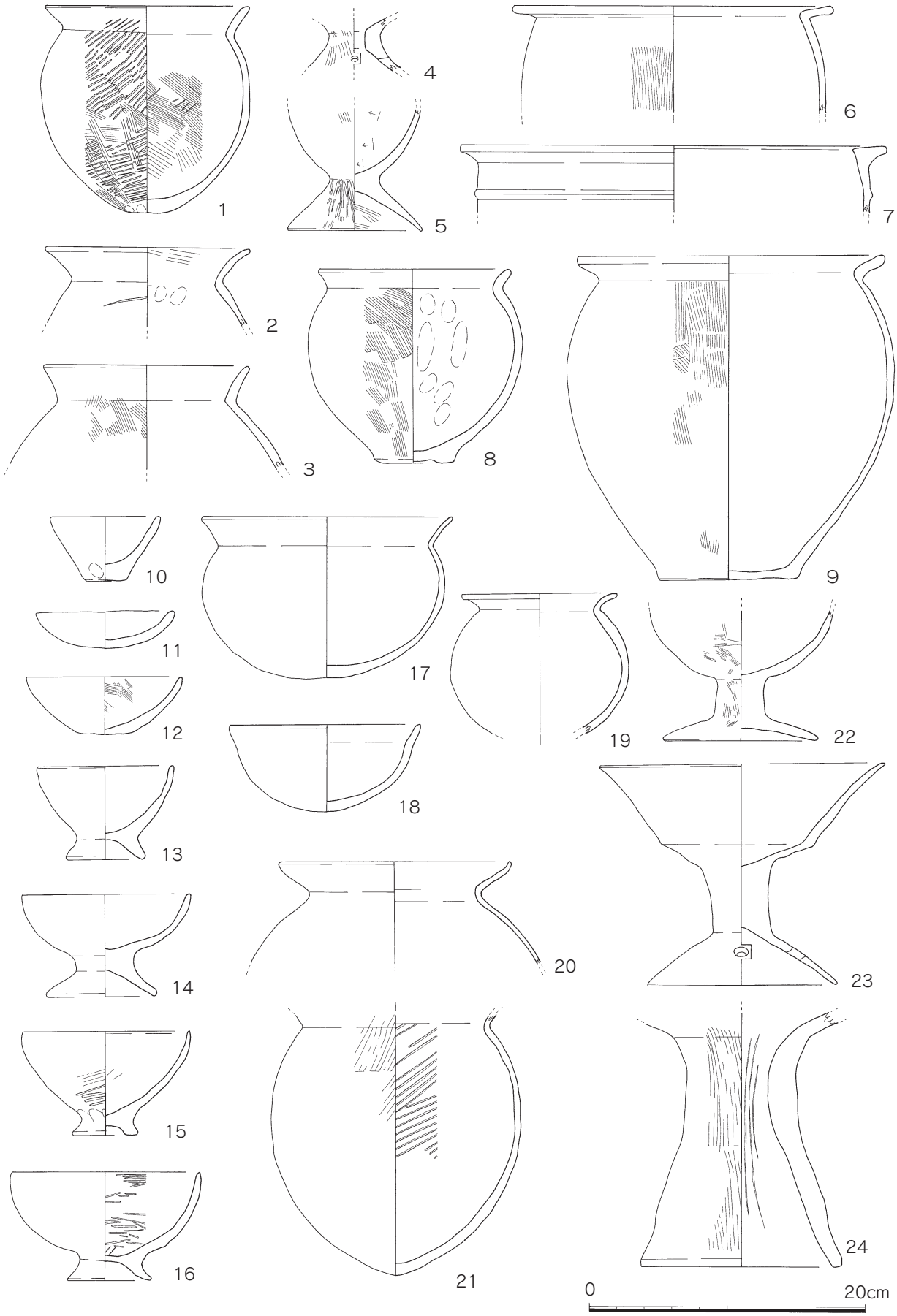


Fig. 9　吉野ヶ里地区Ⅴ区第306・307調査区 竪穴建物跡出土土器実測図(1)
（1～5はSH1163、6・7はSH1183、8・9はSH1193、10～24はSH1194出土）

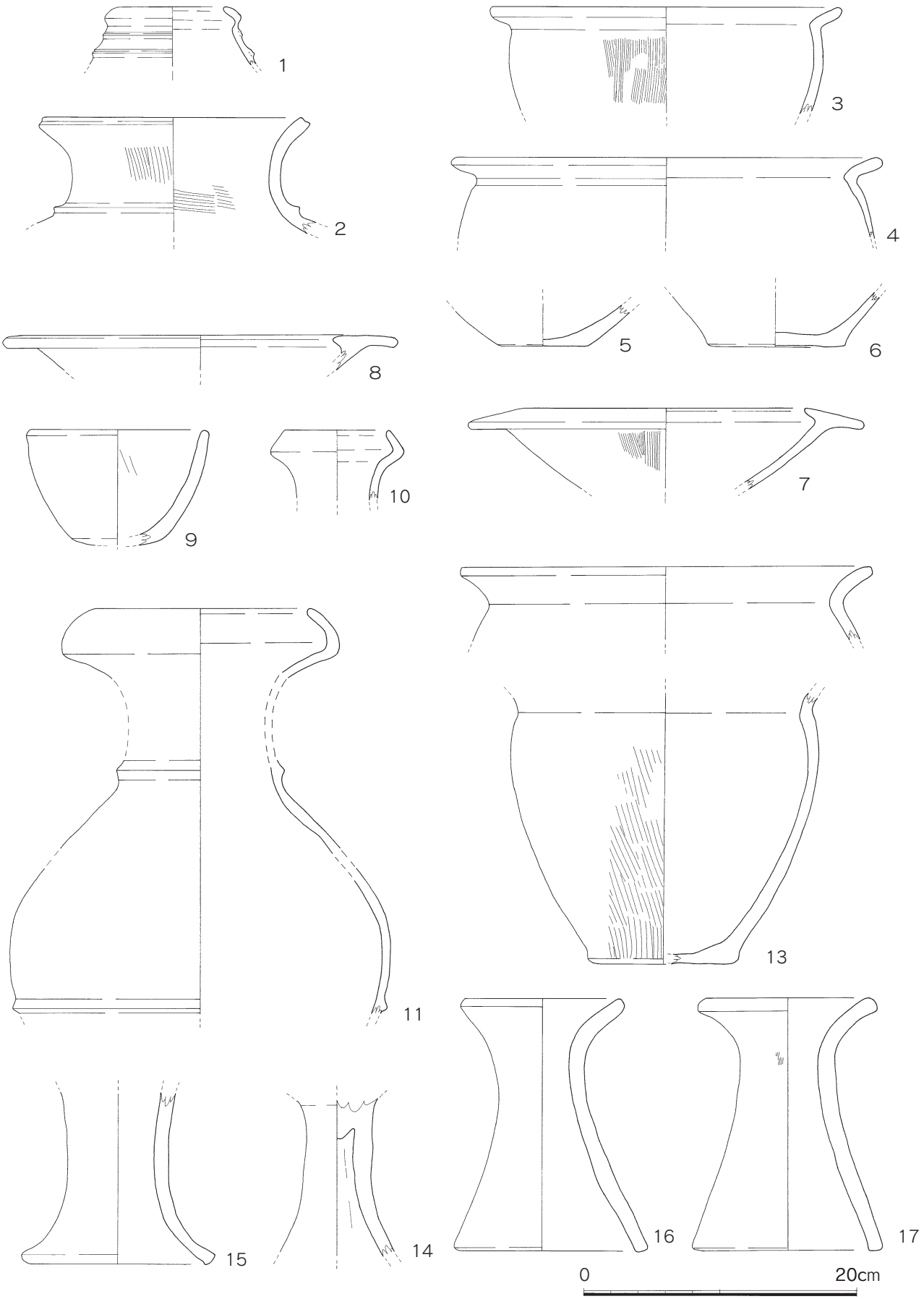


Fig.10　吉野ヶ里地区Ⅴ区第306・307調査区 竪穴建物跡出土土器実測図(2)
（1～7はSH1197、8～17はSH1257出土）

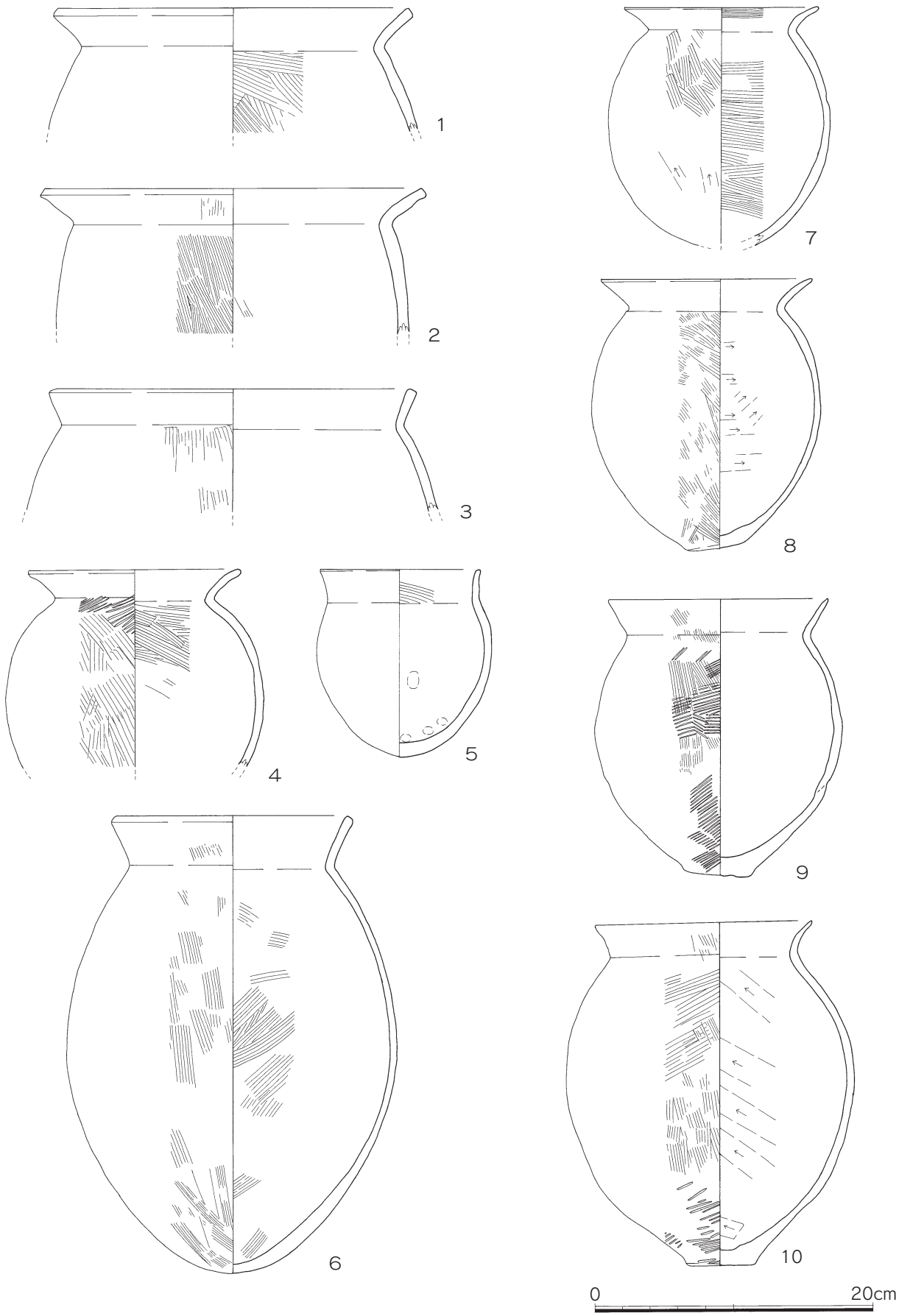


Fig.11　吉野ヶ里地区Ⅴ区第306・307調査区 竪穴建物跡出土土器実測図(3)
(SH1287出土 甕)

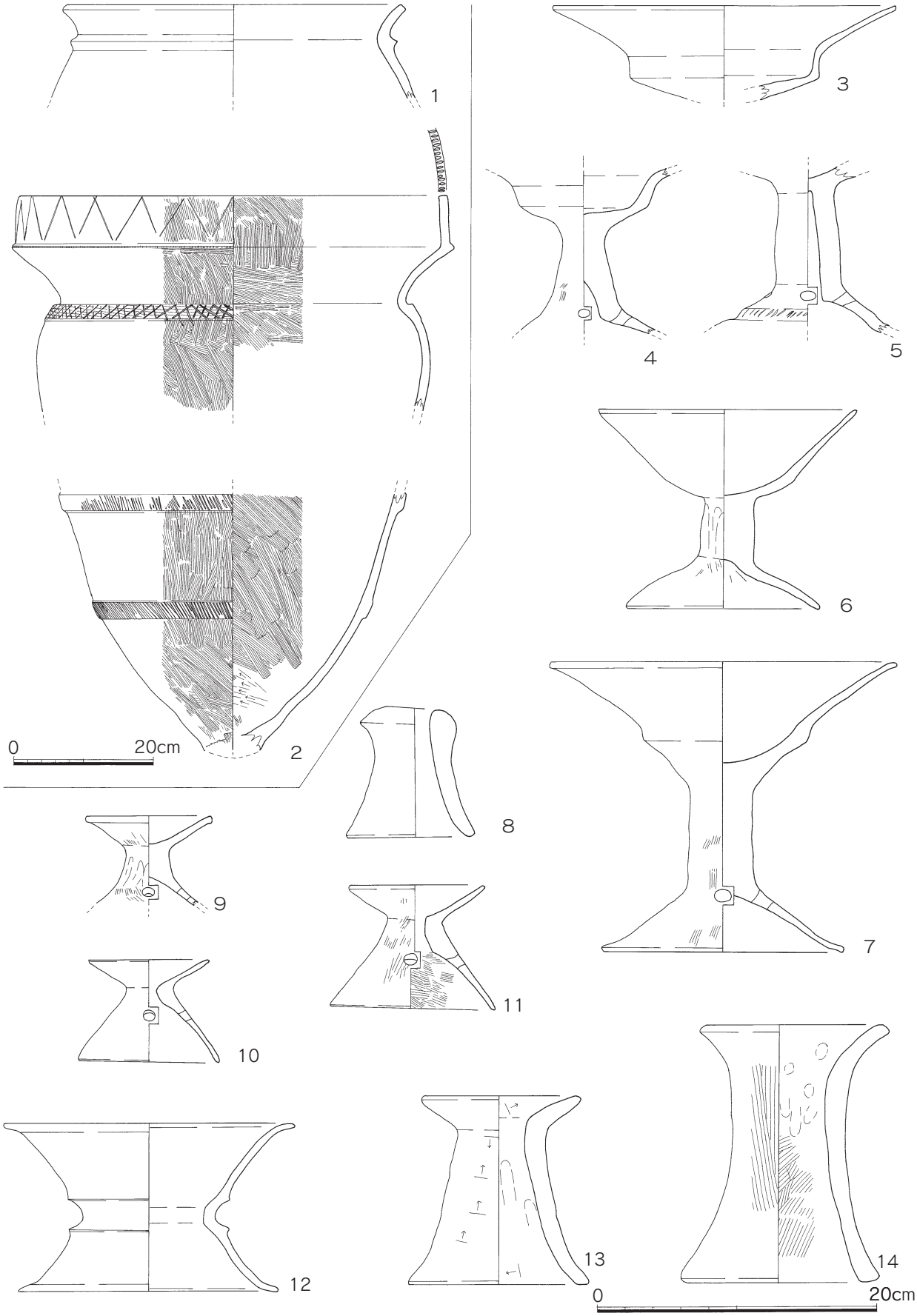


Fig.12　吉野ヶ里地区Ⅴ区第306・307調査区 竪穴建物跡出土土器実測図(4)
(SH1287出土甕・高坏・器台・支脚)

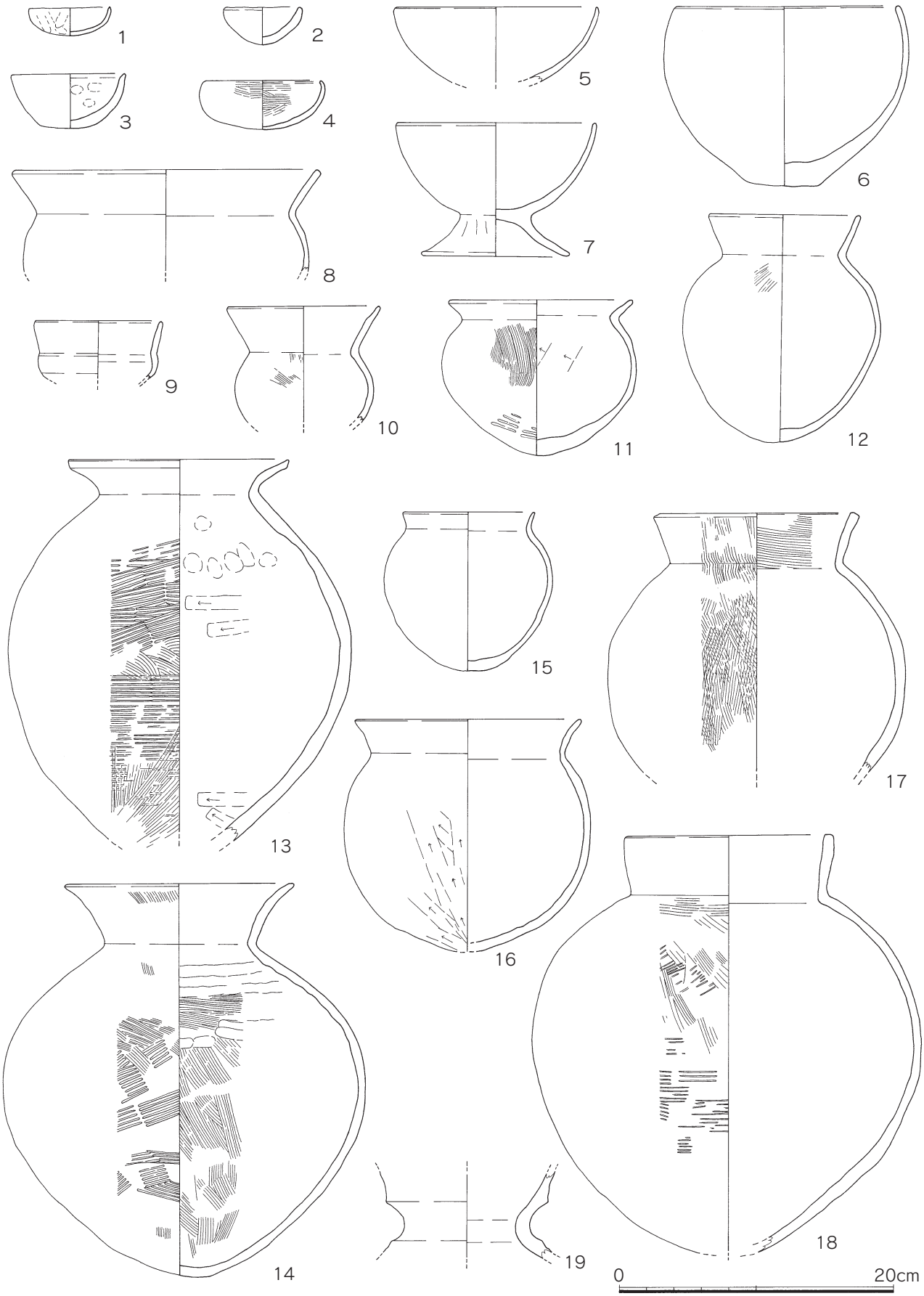


Fig.13　吉野ヶ里地区Ⅴ区第306・307調査区 竪穴建物跡出土土器実測図(5)
(SH1287出土鉢・壺)

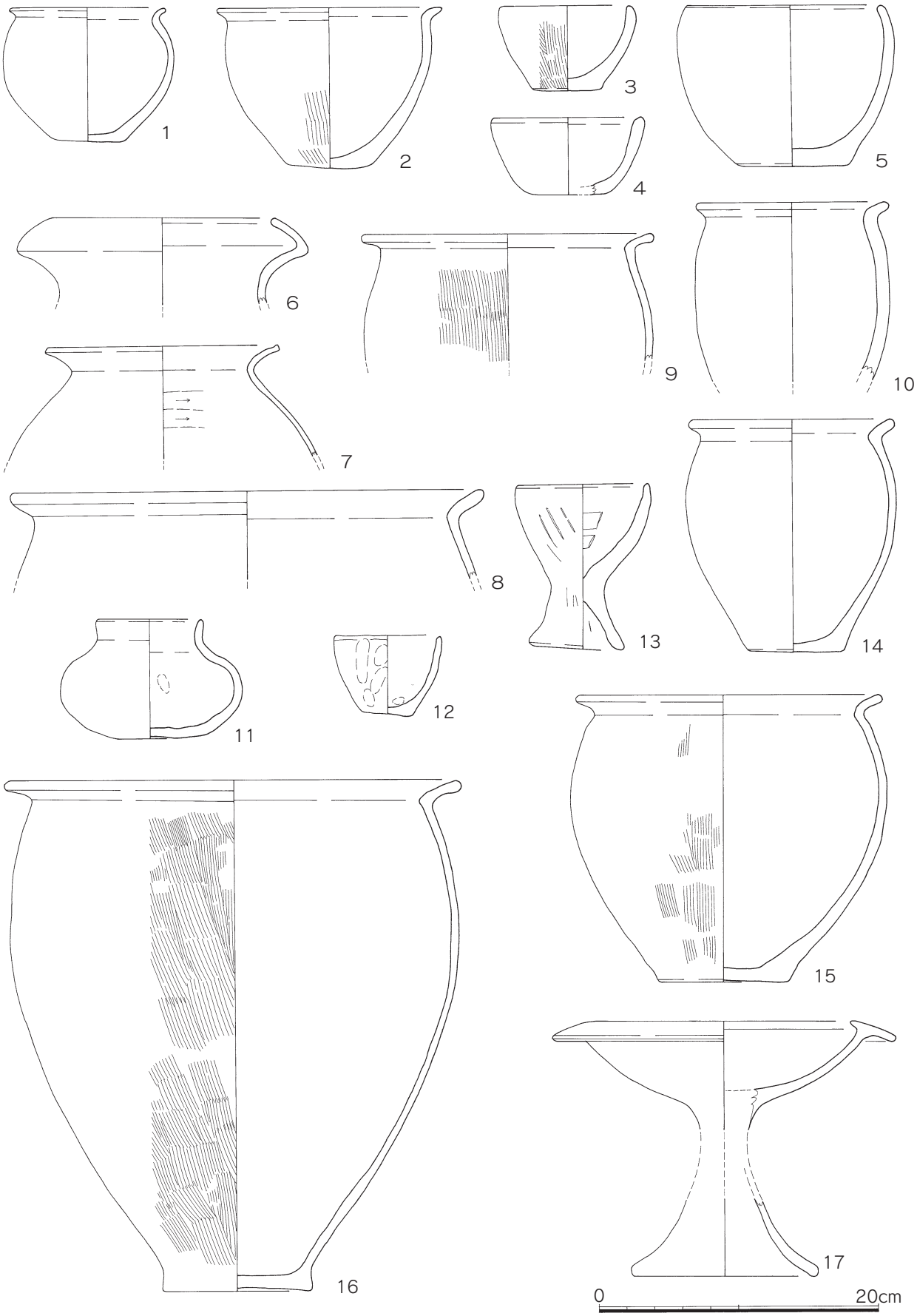


Fig.14　吉野ヶ里地区Ⅴ区第306・307調査区 竪穴建物跡出土土器実測図(6)
（1・2はSH1258、3～10はSH1318、11～17はSH1358出土）

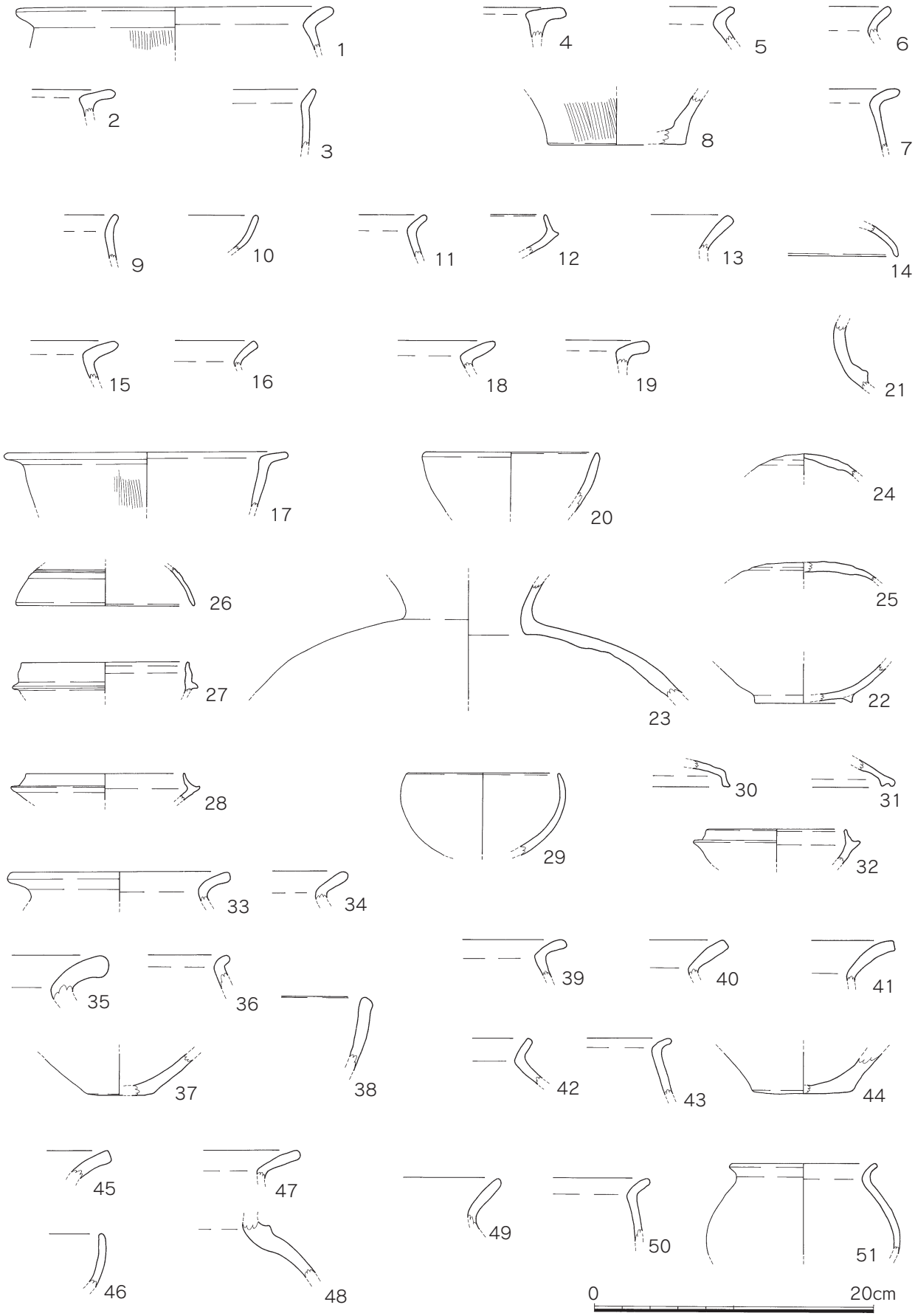


Fig.15　吉野ヶ里地区Ⅴ区第306・307調査区 掘立柱建物跡出土土器実測図(1)

(1～3はSB1199、4～8はSB1200、9・10はSB1201、11・12はSB1202、13・14はSB1203、15～17はSB1204、18～20はSB1205、21・22はSB1206、23～25はSB1207、26・27はSB1208、28はSB1209、29～32はSB1212、33～38はSB1214、39～44はSB1215、45・46はSB1223、47・48はSB1224、49～51はSB1225柱穴出土)

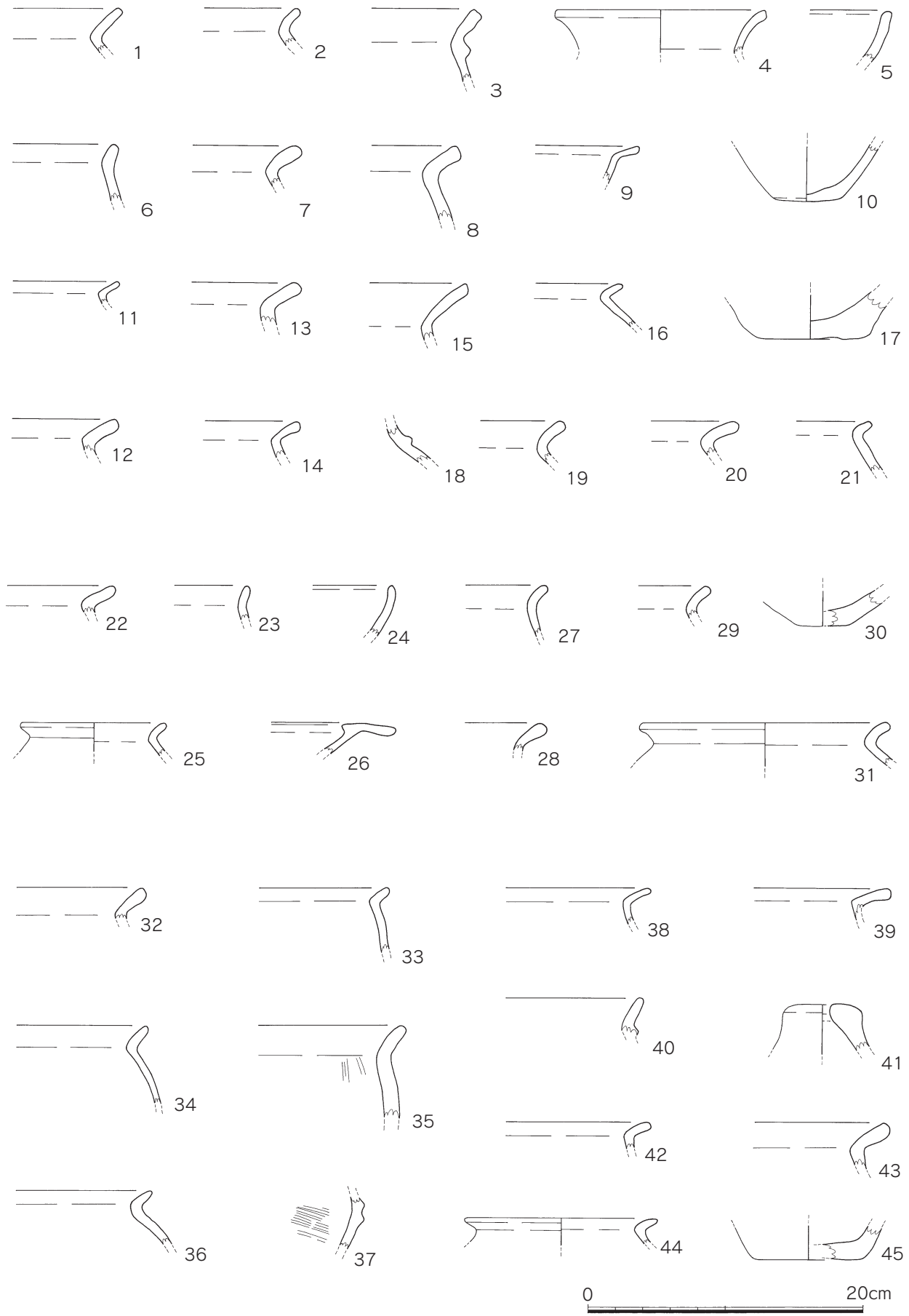


Fig.16　吉野ヶ里地区Ⅴ区第306・307調査区 掘立柱建物跡出土土器実測図(2)

（1はSB1291、2・3はSB1302、4・5はSB1327、6～10はSB1294、11・12はSB1329、13～16はSB1300、17はSB1328、18・19はSB1330、20・21はSB1331、22～26はSB1332、27・28はSB1340、29～31はSB1341、32～37はSB1342、38～41はSB1344、42～45はSB1357柱穴出土）

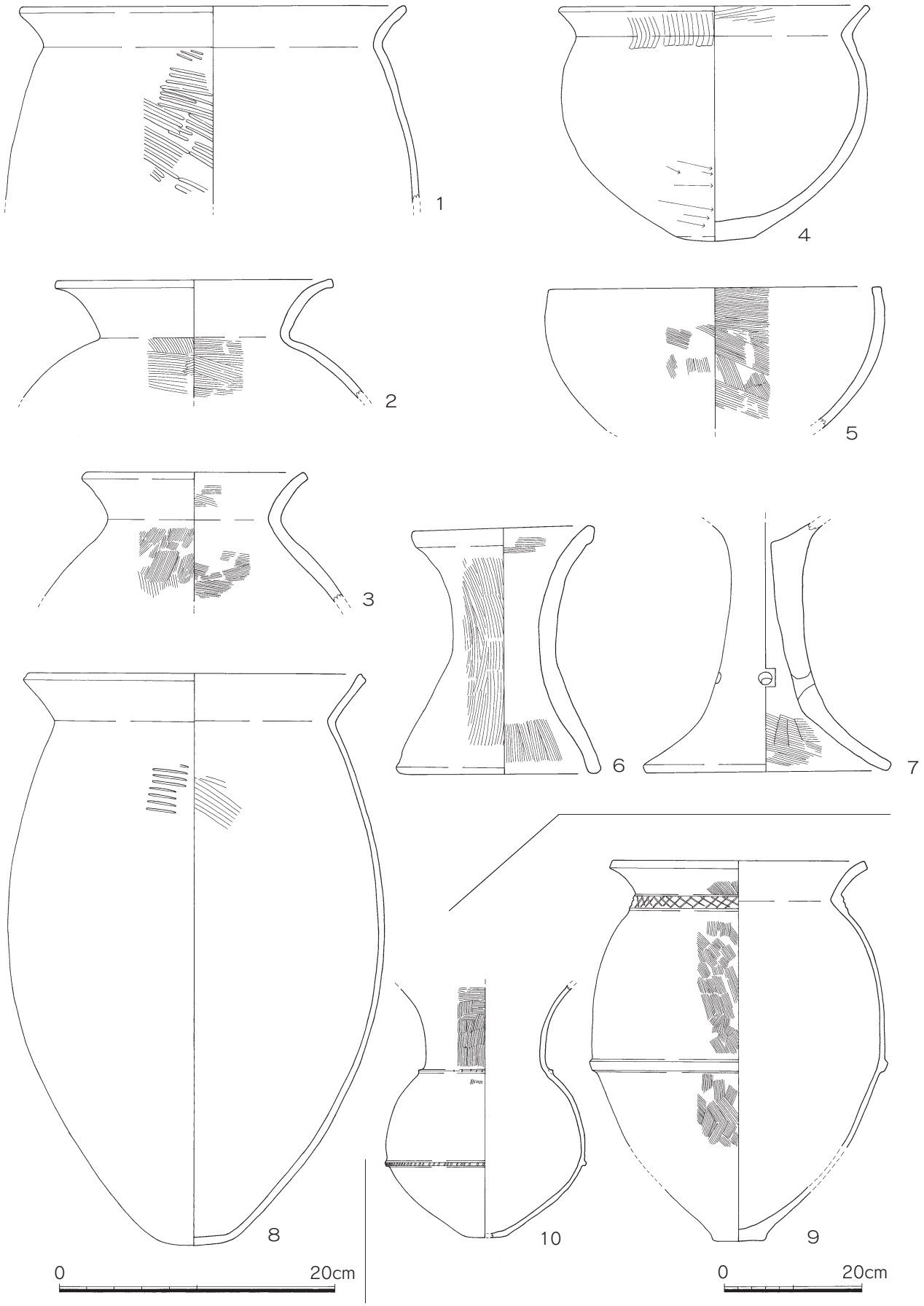


Fig.17　吉野ヶ里地区Ⅴ区第306調査区 SD1109溝跡出土土器実測図

る多数の土器が出土した(Fig.９―10～24)。中でも小型の鉢（Fig.９―10～12）や高台付き鉢(Fig.９―13～16）が多いことが注目される。在地の土器に混じって畿内系の甕（Fig.９―20・21）なども出土している。

SH1197竪穴建物跡からは、壺・甕・鉢・高坏などが出土した（Fig.10―１～７)。壺には袋状口縁をもつものと口頸部が開くものがある。後期前半のものである。SH1257竪穴建物跡からは、甕・壺・鉢・高坏・器台などを出土した（Fig.10―８～17)。後期前半のものであるが、形態的にSH1197竪穴建物跡出土のものより新しい。

SH11287竪穴建物跡からは、厚く堆積した状態で甕・壺・鉢・高坏・器台・支脚など多種の土器を多数出土した（Fig.11～13)。甕（Fig.11、Fig.12―１・２）は大半が在地のものであるが、(Fig.11、―５・９・10、Fig.12―２）などは外来の要素をもつ。(Fig.11―１・２、Fig.12―１・２）は弥生時代終末期の土器の特徴があるが、他はすべて古墳時代初頭の特徴をもつ。高坏（Fig.12―３～７）には在地のもの（７）と外来要素をもつもの（３～６）の２種がある。器台（Fig.12―９～14）には高坏形の小型のもの（９～11）と弥生時代から伝統的な筒形の器台（13・14)、鼓形器台（12）がある。鼓形器台は山陰地方のものと同形態で、胎土も白っぽく明るいことなどから、山陰地方からもたらされた可能性がたかい。鉢（Fig.13―１～９）には小型のもの（１～４）と口縁部が付く小型壺に似た形態の小型のもの（９)、大型のもの（８)、脚が付くもの（７）などがある。大半は古墳時代初頭のものであるが、（８・９）は弥生時代後期終末期にさかのぼる可能性がつよい。壺(Fig.13―10～19）は大半が在地のものであるが、(19）は外来系の二重口縁壺の頸部と考えられる。

SH1258竪穴建物跡からは、短頸壺（Fig.14―１）と鉢（Fig.14―２）が出土した。いずれも後期前半に属するものである。SH1318竪穴建物跡からは、甕（Fig.14―７～10）・壺（同―６・７）・小型鉢（同―３～５）を出土し、SH1358竪穴建物跡からは、小型の壺（同―11）や鉢（同―12・13)、甕（同―14～16)、高坏（同―17）などを出土した。いずれも後期前半に属するものである。

掘立柱建物跡出土遺物（Fig.15・16)

掘立柱建物跡の柱穴からは、弥生土器や古墳時代以降の土師器や須恵器の破片を出土したが、建物跡の時期を推測する上で貴重な資料となっている。図示したものは、建物跡を構成する柱穴から出土した土器のうち主に新しいものを選んだものである。

弥生土器のほとんどが弥生時代後期以降のもので、特に後期後半から終末期にかけてのものが多くを占めている。SB1207掘立柱建物跡やSB1212掘立柱建物跡の柱穴からは６世紀から８世紀にかけての須恵器片が、SB1206からは平安時代に属する瓦器碗片を出土している。

溝跡出土遺物（Fig.17)

外環壕跡（SD0925）の西側に存在するSD1109溝跡からは、甕・壺・鉢・高坏・器台などがある。すべて在地系の土器であるが、中に大型の甕(９)と壺(10)が存在する。高さは前者が55.2cm、後者が36.3cmである。後期終末期のものである。

２．吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区の遺構と遺物

吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区は、南内郭の南、南北に延びる標高20ｍ～20ｍの丘陵の鞍部に位置する。基盤となる地山は、阿蘇山の火砕流とみられる白色ロームでその上に褐色を呈するロームがのり、弥

生時代以降の遺構は、この褐色ロームから掘り込まれる。弥生時代後期後半から終末期にかけて営まれた南内郭跡南方の吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区では、平成11年度に、８年度に確認調査を実施した第227・228調査区を南へ約60ｍ拡張した第310調査区（約3,000㎡）を設けて確認調査を実施した。平成８年度の調査で検出された折れ曲がったSD2121溝跡の性格を探るとともに、一帯の遺構の性格や残存状況を調査した。さらに、平成12年度には、第310調査区の南東方に第316地調査区（約2,730㎡）を設けて確認調査を実施し、また、その南の田手二本黒木地区に第318調査区を設けて表土除去と一部遺構検出作業をおこなった。第318調査区の本格的な確認調査は、平成13年度に実施した。

調査の結果、第310調査区から第318調査区にかけての丘陵上一帯は、弥生時代前期の環壕集落跡内部にあたり、また、弥生時代中期の環壕集落跡の内部にもあたる弥生時代前半部の集落中心部と考えられる地域であり、竪穴建物跡や貯蔵穴（穴倉）跡を多数検出するなど多くの成果を得ることができた。また、昭和63年度までの工業団地計画に伴う発掘調査によって南内郭跡南東部で出土した前方後方墳２基・方形周溝墓３基の南方で新たに検出された前方後方墳２基・方形周溝墓１基は、弥生時代の吉野ヶ里集落の解体・終焉を考える際の貴重な資料となった。

また、丘陵の尾根筋に沿うか直行する方向に掘削された中世の溝跡群の存在は、吉野ヶ里遺跡のほぼ全域にわたって中世の城館関連の施設が構築されていたことを示した。

(1)　第310・317調査区

調査の結果、弥生時代の環壕跡と考えられる大規模なものを含む溝跡４条、竪穴建物跡６基、掘立柱建物跡２基、土壙６基、甕棺墓38基や、古墳時代初頭の前方後方墳１基、中世の溝跡３条などを検出した。

弥生時代中期の環壕跡は過去の確認調査で一部検出されていた弥生時代中期の環壕跡と考えられる大規模な溝跡の連続部分であり、約35ｍ区間検出した。平成８年度調査の第227・228調査区の両調査区にまたがり検出されていた折れ曲がった溝跡（SD2121溝跡）は、前方後方墳の後方部周溝であることが判明し、その全容を明らかにすることができた。

また、310調査区の南側には、第185・186調査区（平成３年度調査）、東側には、第169調査区（平成３年度調査）があり、それぞれ検出された遺構がまたがっているため、これらの調査区及びその一部を含めた形で概要を報告する。

①　遺構

ｉ) 弥生時代の遺構

竪穴建物跡

平面形が円形をした竪穴建物跡２基（SH2115、SH0230）と方形をした竪穴建物跡４基（SH2114・2224・2245・2227）の６棟を検出した。円形の竪穴住居跡２基は、弥生時代中期前半の甕棺墓に切られているため、それ以前の時期に建てられた建物と考えられる。

方形の竪穴住居跡のうち３棟は、いずれも切り合い関係を持ち、SH2245→SH2224→SH2227の順に営まれていた。SH2224竪穴建物跡からは、青銅鏡片（鏡式は不明）が出土している。SH2114竪穴建物跡は、弥生時代終末期の溝跡(SD2101)に切られている。

掘立柱建物跡

掘立柱建物跡はSB2242とSB2243の２棟を検出した。いずれも１間×２間の南北棟建物跡である。

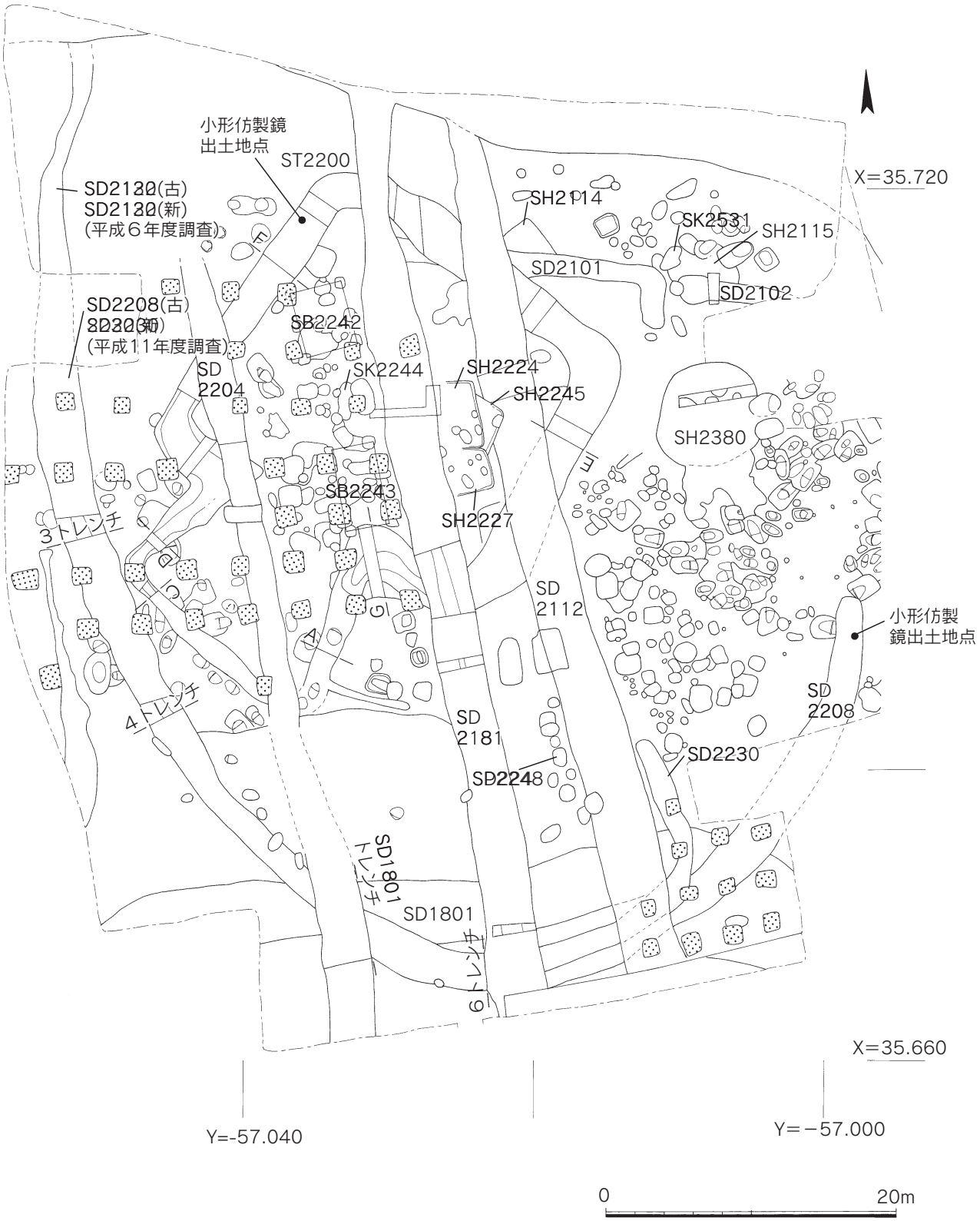


Fig.18　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第310調査区 遺構分布図

この他、高床建物の柱穴とみられる穴数基を検出したが、建物としての規則的な配置は、認められなかった。

溝跡

弥生時代の溝跡は、５条検出した。このうち、旧第227調査区で検出したSD2101・2102溝跡は、再度一部の土器を取り上げ、埋没時期の確認を行った。また、調査区西側を巡る溝跡が、弥生時代後期後半以降の新旧二条の環壕跡（SD2208・SD2230）であることが判明した。この溝跡のうち、古い溝跡（SD2208）は、北側が吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区（工業団地計画に伴う発掘調査）で検出したSD0635溝跡であり、西側に弧を描きながら第169調査区まで続く断面が逆台形をした溝跡である。新しい溝跡は、古い溝跡同様に吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区（工業団地計画に伴う発掘調査）で検出したSD0650溝跡の延長である。SD2230溝跡よりも幅が狭く、第310調査区では、SD2122溝跡（310調査区）を再掘削した形になっている。その南側の先端は、SD1801溝跡付近で北側に曲がる。なお、この新旧二つの溝跡は、吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区（工業団地計画に伴う発掘調査）で、それぞれ２ヶ所の出入口部分が確認されている。

SD1801溝跡は、第185・186調査区（平成３年度調査）で確認していた東西方向に延びる溝跡である。その規模は、幅約４ｍ、深さ2.5ｍ以上である。第185調査区では、約1.5ｍの幅の狭い出入口を確認している。今回、SD2122・SD2130溝跡と切り合う部分で断面を確認した。SD1801溝跡は、断面形が逆台形状をしており、大きく２層にわかれる。この溝跡の最下層からは、城の越式と考えられる弥生時代中期初頭の土器が出土している。

墳墓（甕棺墓・土壙墓）

前期末の金海式～中期中頃の須玖式甕棺38基を検出した。一部、169調査区及び第227・228調査区の甕棺が重複して数えている。甕棺墓は、ST2200前方後方墳の西北側及び前方部付近に群集している。中世及び現代に土地の改変が行われ、甕棺墓の残存状況はかなり悪い。

この甕棺墓38基の中には小児棺18基が含まれており、乳幼児の死亡率が高かったことを示している。

弥生時代の土壙墓は４基確認されている。このうち、SP2248土壙墓は、土壙の長辺側面に横穴を穿つ土壙墓で中期後半以降の所産と考えられる。

土壙

弥生時代の土壙は多く検出しているが、大半は弥生時代中期の貯蔵穴と考えられる。SD2101溝跡とSD2102溝跡の間にあるSK2531土壙から出土した高杯（Fig.23―９）は、在地のものではなく、他地域からもたらされた外来系の土器である。現在のところ、その地域がどこであるかは、あきらかにできない。また、SK2249土壙の検出面では、西新式の大型甕（Fig23―６）が出土しており、ST2200前方後方墳が築造される前段階の土器とみられる。

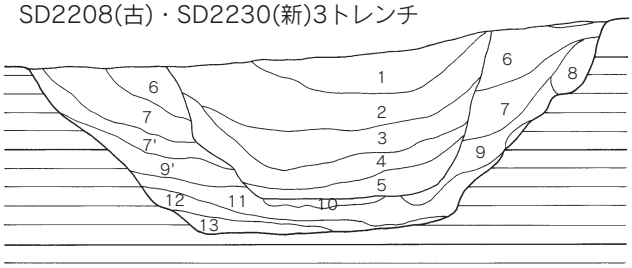
ⅱ）古墳時代以降の遺構

前方後方墳（ST2200）

第227・228調査区（平成６年度実施）で方形環溝の一部と考えていた溝跡は、今回の調査で前方後方墳の周溝であることが判明した。墳丘は、比較的早い段階で削平されており、主体部も見つかっていない。このST2200前方後方墳の規模は、全長30ｍ、前方部長11.8ｍ、同幅13.5ｍ、後方部長18.2ｍ、同幅21.6ｍ、前方部周溝幅0.9～1.6ｍ、後方部周溝幅2.0～3.8ｍ、くびれ部幅7.8ｍであ

20.000m

SD2208(古)・SD2230(新)3トレンチ

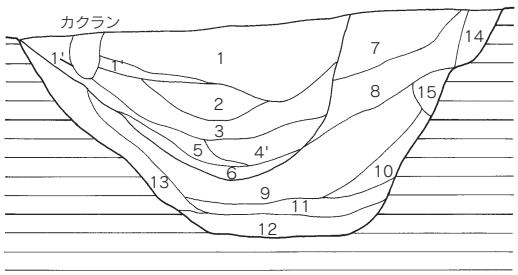


SD2208・2230溝跡3トレンチ土層図

1　暗褐色粘質土
2　褐色粘質土…1層に比べやや明るい。
3　暗褐色粘質土…土器及び炭化物を多く含む。
3'　暗褐色粘質土
4　暗褐色粘質土
5　暗褐色粘質土
6　暗褐色粘質土…炭化物を含む。
7　暗褐色粘質土…鈍い褐色土、黄白色土ブロックを含む。
7'　暗褐色粘質土
8　暗褐色粘質土…黄褐色ローム粒を含む。
9　暗褐色粘質土…鈍い褐色土、黄白色土を少量含む。
9'　暗褐色粘質土
10　暗褐色粘質土…鈍い褐色土、黄白色土を少量含む。
11　黄白色粘質土…褐色ブロックを含む。
12　暗褐色粘質土…褐色土・黄白色土を含む。
13　暗褐色粘質土…黄褐色土を含む。

20.500m

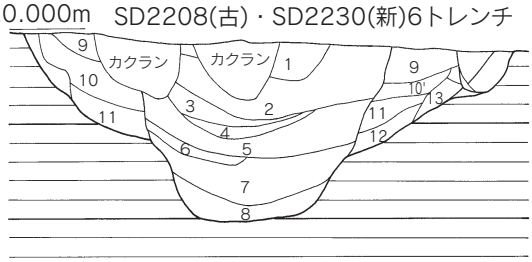
SD2208(古)・SD2230(新)4トレンチ



SD2208・2230溝跡4トレンチ土層図

1　暗褐色粘質土
1'　暗褐色粘質土…1層に比べやや暗い。
2　鈍い黄褐色粘質土…黄褐色土を含む。
3　褐色粘質土
4　暗褐色粘質土…黄褐色土を少量含む。
5　暗褐色粘質土…黄褐色土を少量含む。
6　鈍い黄褐色粘質土…黄褐色土を少量含む。
7　暗褐色粘質土
8　暗褐色粘質土…黄褐色ローム粒を含む。
9　暗褐色粘質土…黄褐色ローム粒を含む。
10　鈍い黄褐色粘質土…炭化物を少量含む。
11　暗褐色粘質土…炭化物・灰白色ロームを少し含む。
12　鈍い黄褐色粘質土…灰白色ロームブロックを含む。
13　鈍い黄褐色粘質土
14　鈍い黄褐色粘質土…褐色土・黄白色土を含む。
15　鈍い黄褐色粘質土…暗褐色土を含む。

20.000m　SD2208(古)・SD2230(新)6トレンチ

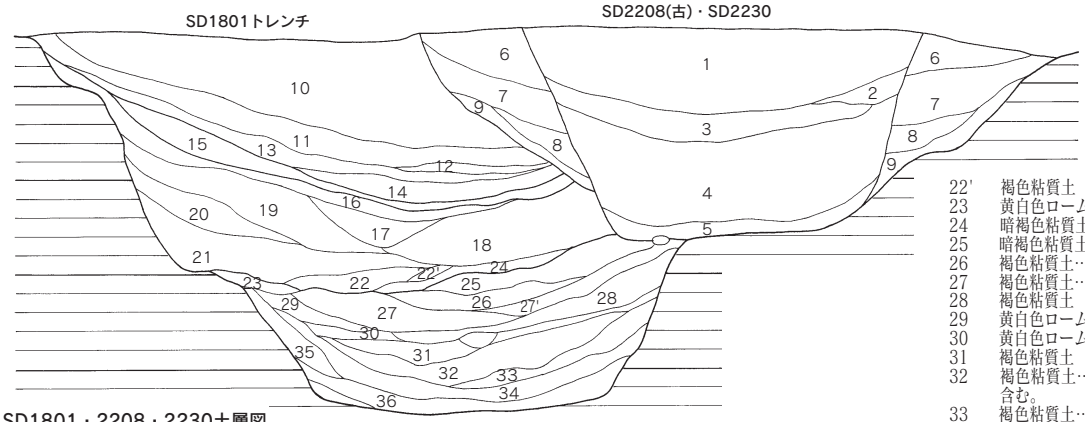


SD2208・2230溝跡6トレンチ土層図

1　暗褐色粘質土…やや黒味がある。
1'　暗褐色粘質土
2　暗褐色粘質土
3　暗褐色粘質土…黒褐色粘質土ブロックが混ざる。
4　暗褐色粘質土…黒褐色粘質土ブロックが混ざる。
5　暗褐色粘質土…灰白色ロームブロックを含む。
6　鈍い黄褐色粘質土…黒褐色粘質土ブロックが混ざる。
7　暗褐色粘質土…炭化物が混ざる。
8　褐色粘質土…黄褐色ロームブロックを含む。
9　暗褐色粘質土…
10　暗褐色粘質土…赤褐色ロームを含む。
10'　暗褐色粘質土
11　暗褐色粘質土
12　暗褐色粘質土…赤褐色ローム・黄白色ロームを少量含む。
13　赤褐色粘質土…暗褐色土を含む。

20.000m

SD1801トレンチ　SD2208(古)・SD2230



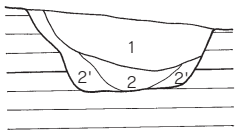
SD1801・2208・2230土層図

1　暗褐色粘質土
2　褐色粘質土
3　暗褐色粘質土
4　暗褐色粘質土…炭化物を若干含む。
5　褐色粘質土
6　暗褐色粘質土…5層に比べやや暗く、土器多い。
7　暗褐色粘質土
8　暗褐色粘質土
9　暗褐色粘質土…わずかに黒味を持つ。
10　暗褐色粘質土
11　暗褐色粘質土…10層に比べやや暗い。
12　暗褐色粘質土
13　暗褐色粘質土…黄褐色ローム粒を含む。
14　暗褐色粘質土
15　黒褐色粘質土…黄褐色ローム粒を含む。
16　暗褐色粘質土…6層に類似。
17　黒褐色粘質土
18　暗褐色粘質土
19　褐色粘質土
20　褐色粘質土…黄褐色ローム粒を含む。
21　褐色粘質土…黄褐色ブロックを含む。
22　褐色粘質土
22'　褐色粘質土
23　黄白色ローム土
24　暗褐色粘質土
25　暗褐色粘質土
26　褐色粘質土…ローム粒を含む。
27　褐色粘質土…黄白色ロームブロックを含む。
28　褐色粘質土
29　黄白色ローム土…褐色粘質土を含む。
30　黄白色ローム土…褐色粘質土を含む。
31　褐色粘質土
32　褐色粘質土…黄白色ローム粒及びブロックを含む。
33　褐色粘質土…黄白色ローム粒及びブロックを含む。
34　褐色粘質土…黄白色ローム粒及びブロックを含む。
35　褐色粘質土…黄白色ロームブロック及び炭化物を含む。
36　褐色粘質土
37　褐色粘質土

0　2m

Fig.19　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第310調査区 弥生時代溝・環壕跡断面土層図

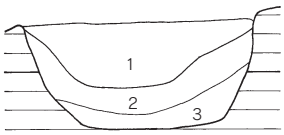
19.500m



ST2200前方後方墳Cトレンチ土層図

1　黒褐色粘質土…少量の炭化物を含む流入土
2　暗褐色粘質土…灰白色粘質土ブロックを多く含む。
2'　暗褐色粘質土

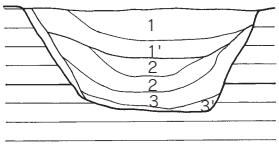
20.000m



ST2200前方後方墳Aトレンチ土層図

1　黒褐色粘質土…少量の炭化物を含む流入土
2　暗褐色粘質土…黄褐色ローム粒子を含む。
3　暗褐色粘質土…黄褐色ロームブロックを含む。

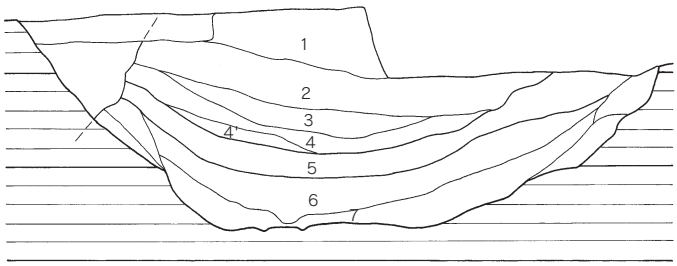
19.500m



ST2200前方後方墳Dトレンチ土層図

1　黒褐色粘質土
1'　黒褐色粘質土
2　暗褐色粘質土
2'　暗褐色粘質土
3　暗褐色粘質土
3'　暗褐色粘質土

20.500m

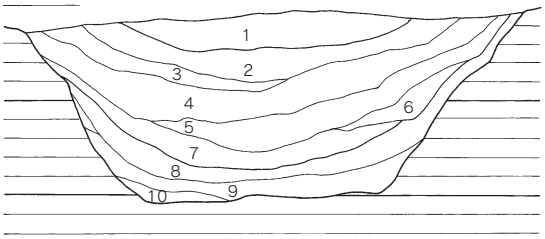


ST2200 後方部Eトレンチ

ST2200前方後方墳Eトレンチ土層図

1　褐色粘質土…炭化物を少量含む。
2　暗褐色粘質土…褐色土ブロック少量含む。
3　暗褐色粘質土…2層に比べ黒味を帯びる。
4　暗褐色粘質土…褐色土ブロックの混入量増加。
4'　暗褐色粘質土
5　黒褐色粘質土…褐色土ブロック少量含む。
6　褐色粘質土…赤褐色粒子を含む。
7　褐色粘質土…黄褐色粒子を含む。
8　黄褐色粘質土…褐色土ブロックを含む。
8'　黄褐色粘質土
9　灰褐色粘質土…黄褐色ブロックを含む。
9'　灰褐色粘質土

20.000m

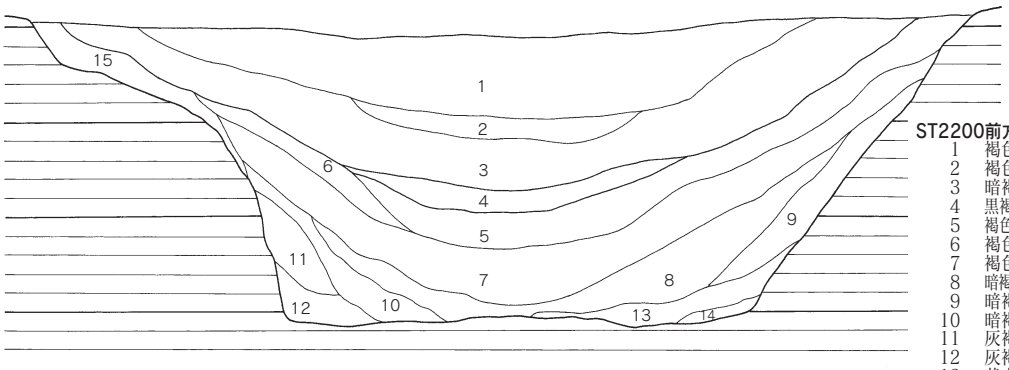


ST2200 後方部Fトレンチ

ST2200前方後方墳後方部Fトレンチ土層図

1　褐色粘質土…赤褐色粒子・炭化物を含む。
2　黒褐色粘質土…赤褐色粒子を含む。
3　暗褐色粘質土…炭化物・赤褐色粒子を含む。
4　暗褐色粘質土…土器を多量に含む。
5　暗褐色粘質土…土器を多量に含む。
6　暗褐色粘質土…黄褐色ブロックを含む。
7　暗褐色粘質土…灰白色土を含む。
8　暗褐色粘質土…炭化物・赤褐色粒子を含む。
9　暗褐色粘質土
10　暗褐色粘質土…褐色土ブロックを含む。
11　灰褐色粘質土…地山ブロックの2次堆積

20.500m



ST2200 Gトレンチ（東側くびれ部）

ST2200前方後方墳東くびれ部Gトレンチ土層図

1　褐色粘質土…赤褐色粒子・炭化物を含む。
2　褐色粘質土…細かな黄褐色粒子を含む。
3　暗褐色粘質土…赤褐色粒子を含む。
4　黒褐色粘質土…褐色土ブロックを含み、土器出土。
5　褐色粘質土…赤褐色粒子、黄白色ブロックを含む。
6　褐色粘質土…黄白色ブロックを含む。
7　褐色粘質土…灰白色の地山ブロックを含む。
8　暗褐色粘質土…黄白色・灰白色の地山ブロックを含む。
9　暗褐色粘質土
10　暗褐色粘質土…褐色土ブロックを含む。
11　灰褐色粘質土…地山の混合土
12　灰褐色粘質土…地山の混合土
13　黄白色粘質土…地山の2次堆積か
14　暗褐色粘質土
15　黄白色粘質土…地山の2次堆積か

0　2m

Fig.20　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第310調査区 ST2200前方後方墳周溝跡断面土層図

る。この前方後方墳の特徴として、周溝が全周する点、東側くびれ部が検出面から1.8mと深い点があげられる。

この古墳から出土した遺物として東側の後方部周溝を中心に弥生時代終末期～古墳時代初頭の土器が多量に出土しているほか、小型仿製鏡１面、鉄鏃１点、鉄鎌１点、袋状鉄斧１点、鉄鑿１点などが出土した。また、西側くびれ部からは、内面に赤色顔料が付着した東部瀬戸内系の壺上半部が出土している。葬送儀礼に使用した土器と考えられる。

この前方後方墳の築造時期は、弥生時代終末期の溝跡であるSD2101溝跡を切って築造されていることや出土した土器の形態などから古墳時代初頭と考えられる。

溝跡（中世）

中世の遺構として南北方向に延びる溝跡3条を検出している。いずれの溝跡も出土遺物が少なく、時期を明らかにできないが、吉野ヶ里丘陵南部にある鎌倉時代に建立された東妙寺・妙法寺等中世の寺院関連遺構または、戦国期の城跡に関連するものとみられる。

なお、310調査区と吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区の間には、丘陵が狭くなった場所があり、古くから小道として利用されていた。特に調査を実施していないが、東西方向に掘削された中世段階の堀切の可能性がある。

② 遺物

溝跡出土遺物（Fig.21～25）

弥生時代中期の条壕（環壕）跡とみられるSD1801の上層からは、器台（Fig.21―１～５）がまとまって出土している。この溝跡の下層からは板付Ⅱ式とみられる壺、（Fig.21―６・７）城ノ越式の鉢（Fig.21―８）、甕（Fig.21―９～12）が出土している。

SD2101溝跡から出土した土器は、すでに一部報告を行なっているが、平成11年度調査の際に取上げた土器について報告する。小型の壺には、複合口縁を持つもの（Fig.22―１）や短口縁で胴部が球形をするもの（Fig.22―２～６）、胴部が扁平になるもの（Fig.22―10）などがある。底部が丸底で、体部が中央で最大径を持つ壺（Fig.22―11・14・15）には、わずかに外反する短い口縁部がつく。

鉢は、体部が丸みを持つもの（Fig.23―１・２）、口縁部が大きく開くもの（Fig.23―３）、台がつくもの（Fig.23―５）などいくつかの種類がみられる。高杯は、口縁部を外反させる在地のもの（Fig.23―６・７）である。甕には、在地の甕（Fig.23―９～12）が多くを占めるが、底部から胴部にかけて丸みを持つ外来系の甕（Fig.23―13）もみられる。

SD2102溝跡から出土した土器は８点を図示した。いずれの土器も11年度の調査の際、取上げた土器である。SD2101溝跡同様、一部の土器については、すでに報告を行なっている。壺は、小型の壺（Fig.24―１～４）と大型の壺（Fig.24―８）にわけられる。いずれも在地の土器である。

(Fig25)

SD2208・2230溝跡から出土した土器16点を図示した。あきらかに混入したとみられる弥生時代中期の高杯（Fig.25―16）もあるが、出土した土器の多くは、終末期の特徴を持つ土器である。SD2208とSD2230溝跡は、切り合いを持ち新旧関係にあるが、土器の面では明確にし得ない。出土した壺や甕、鉢、支脚、器台は、在地の土器が主体を占める。

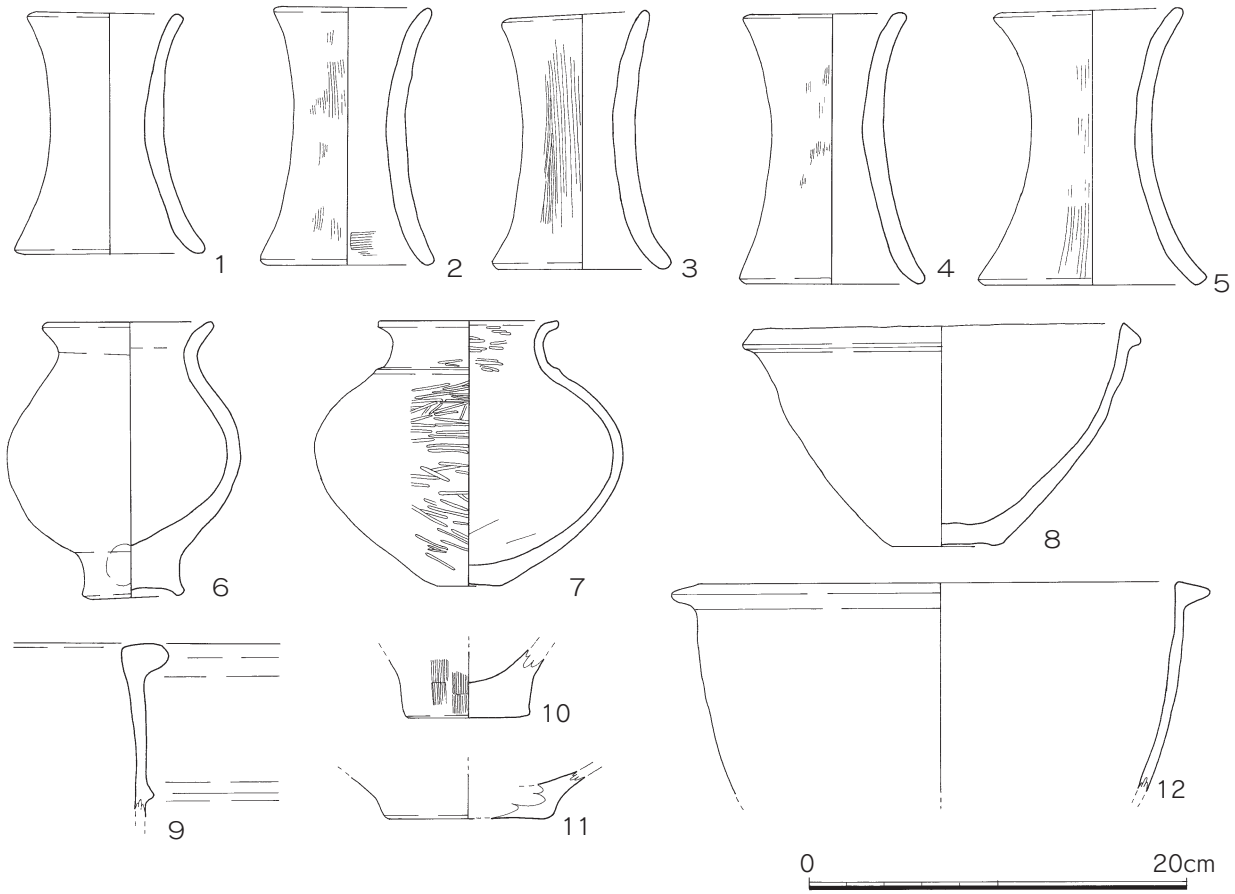


Fig.21　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第310調査区 SD1801環壕跡出土土器実測図

なお、平成３年度の調査（吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第169調査区SD01溝跡）でSD2208溝跡の南側先端部から小形仿製鏡１点（Fig.27―５）が出土している。この鏡は、平縁の一部を欠失するものの、ほぼ完形に近い鏡である。銅質は良好。面径8.6ｃｍ。文様構成は、縁から内側に向かって粗い櫛歯文帯、連弧文帯、文様帯、圏線、鈕となる。縁は、平縁で幅0.8～1.0ｃｍ、半浮彫状の連弧文帯は、10個である。内区の文様は、鋳上がりが悪いため、不鮮明であるが、虺龍文鏡の文様を省略化したようにもみえる。鈕の幅は、約1.4ｃｍで比較的大きなものである。この小形仿製鏡は、高倉洋彰氏による分類の内行花文鏡系仿製鏡Ⅱa式に相当する。

なお、この小形仿製鏡については、2003年３月に発行した佐賀県文化財調査報告書第156集『吉野ヶ里遺跡－平成８年度～10年度の発掘調査の概要』において、吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区SD2121出土鏡としていたが、実際には、吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第169調査区SD01溝跡から出土していたものであった。この本文をもって訂正としたい。

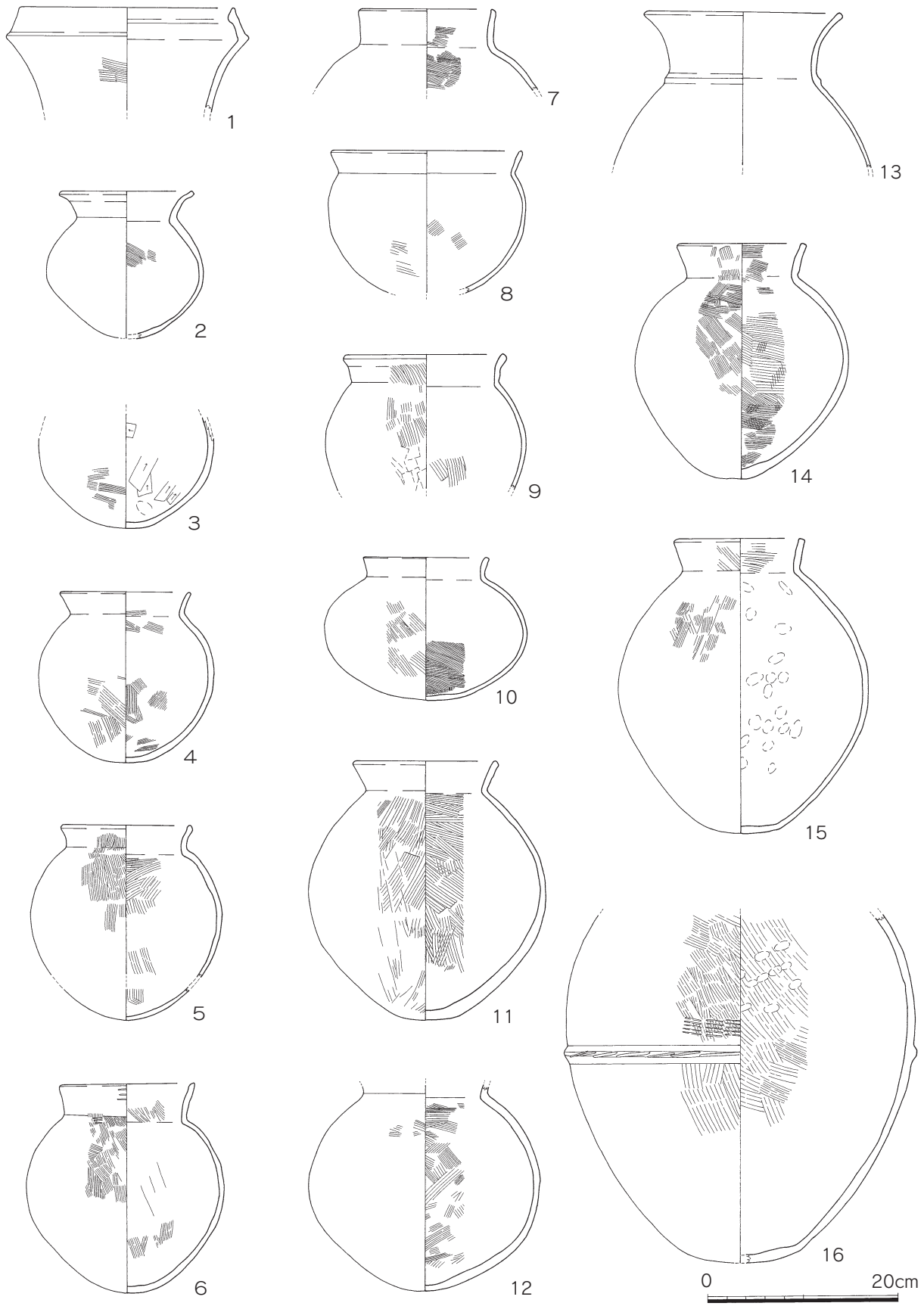


Fig.22　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第310調査区 SD2101環壕跡出土土器実測図(1)

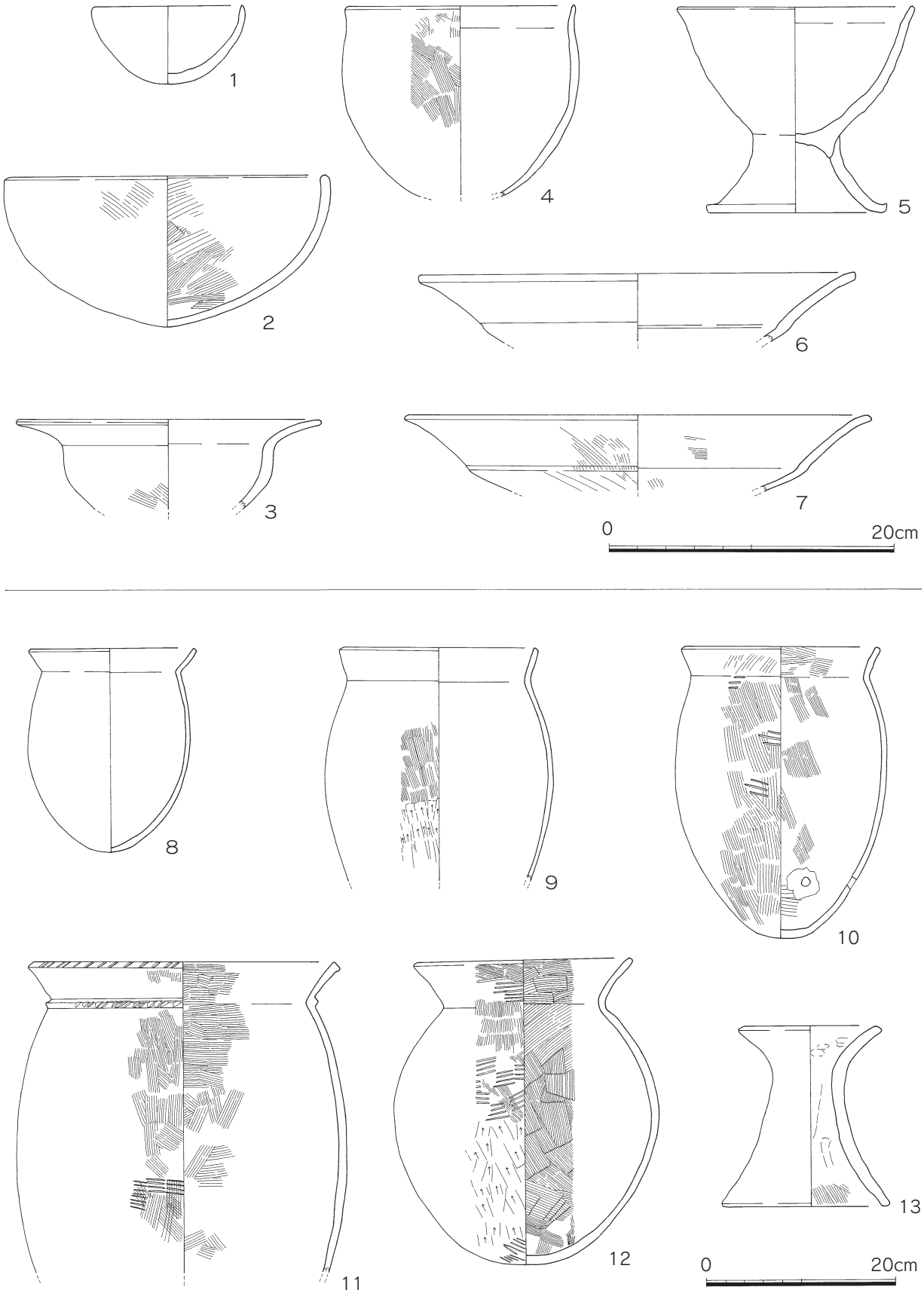


Fig.23　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第310調査区 SD2101環壕跡出土土器実測図(2)

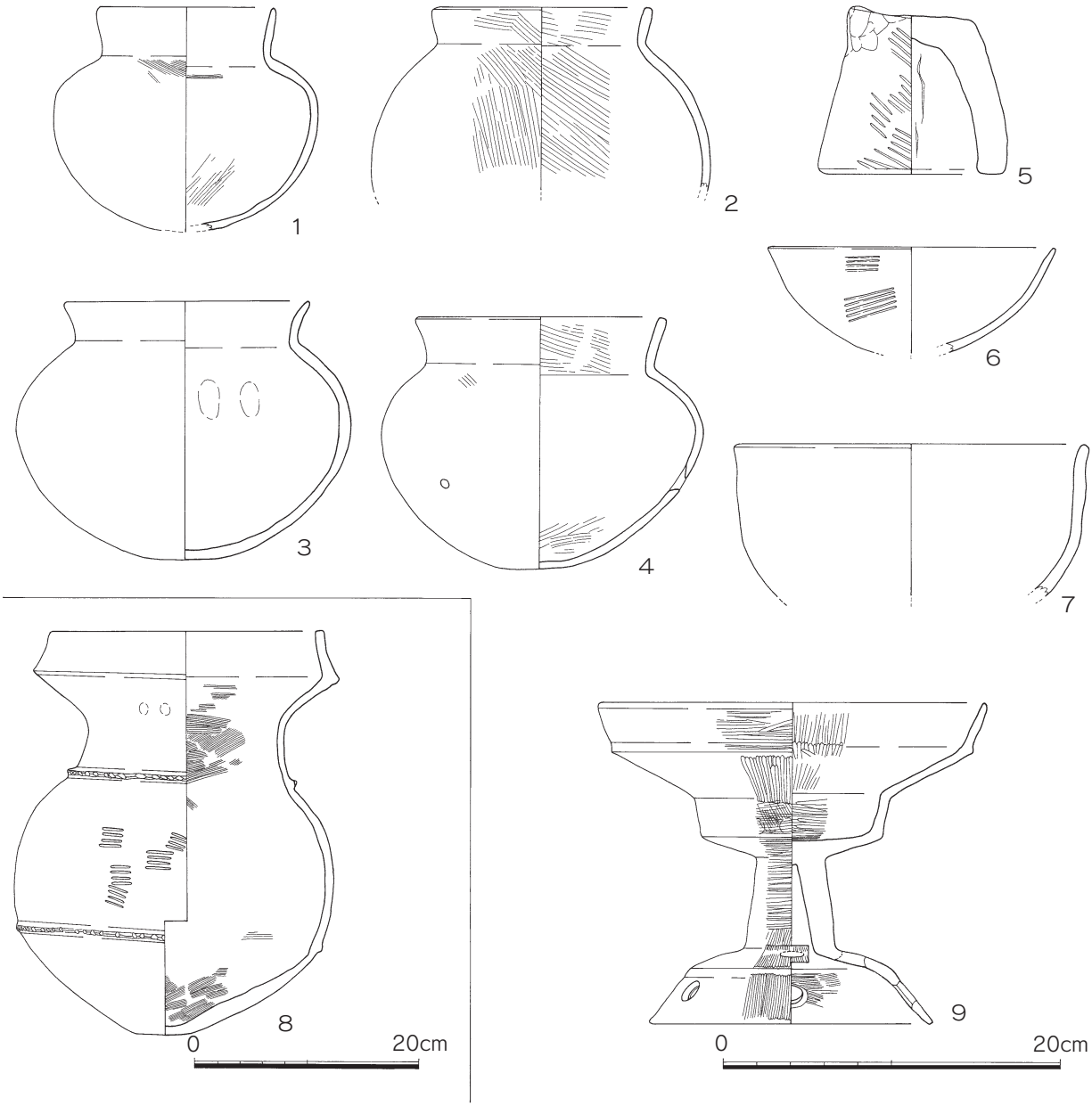


Fig.24　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第310調査区 SD2102環壕跡・SK2531土壙出土土器実測図
（9は、SK2531出土、他はSD2102出土）

前方後方墳出土遺物（Fig.26・27）

ST2200前方後方墳は、弥生時代終末期の溝跡などを切って築造されているため、他の遺構の土器などが混入していると考えられるが、近接した時期であるため、一部の土器を除き、両者の土器の区分を明確にし得ない。このため、比較的、前方後方墳の時期を示すと思われる土器19点を図示した(Fig.26)。

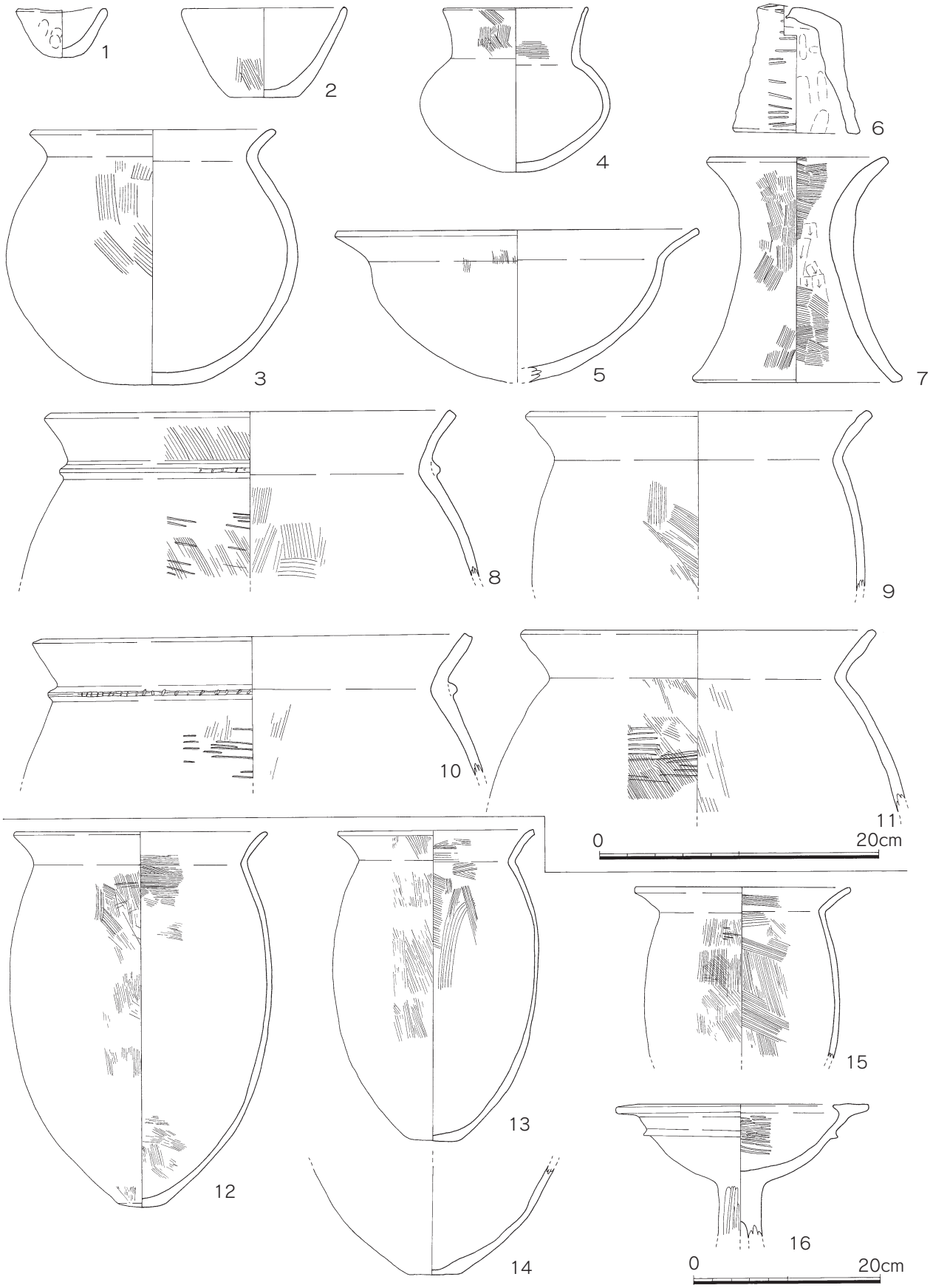


Fig.25　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第310調査区 SD2208・SD2230環壕跡出土土器実測図

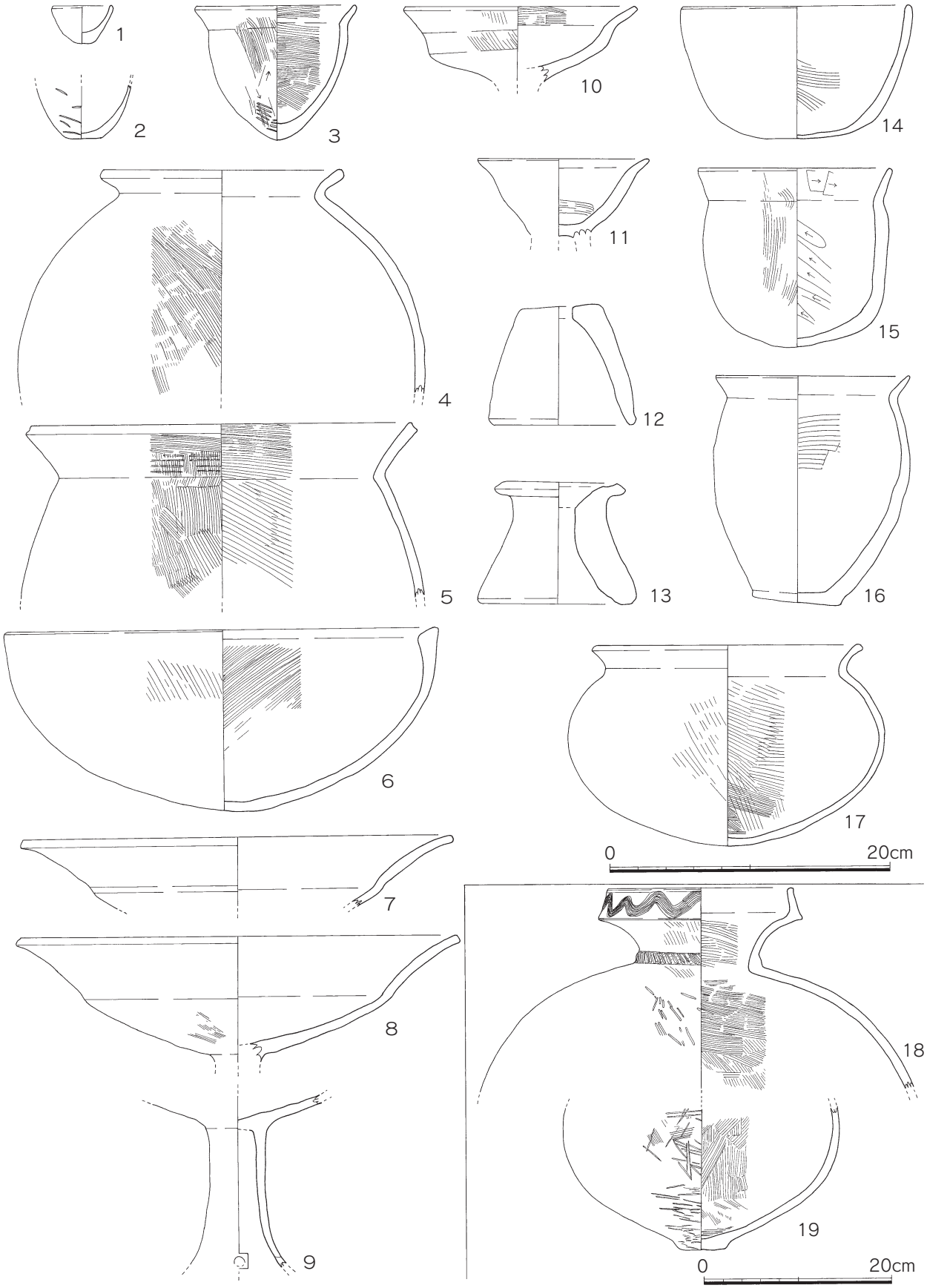
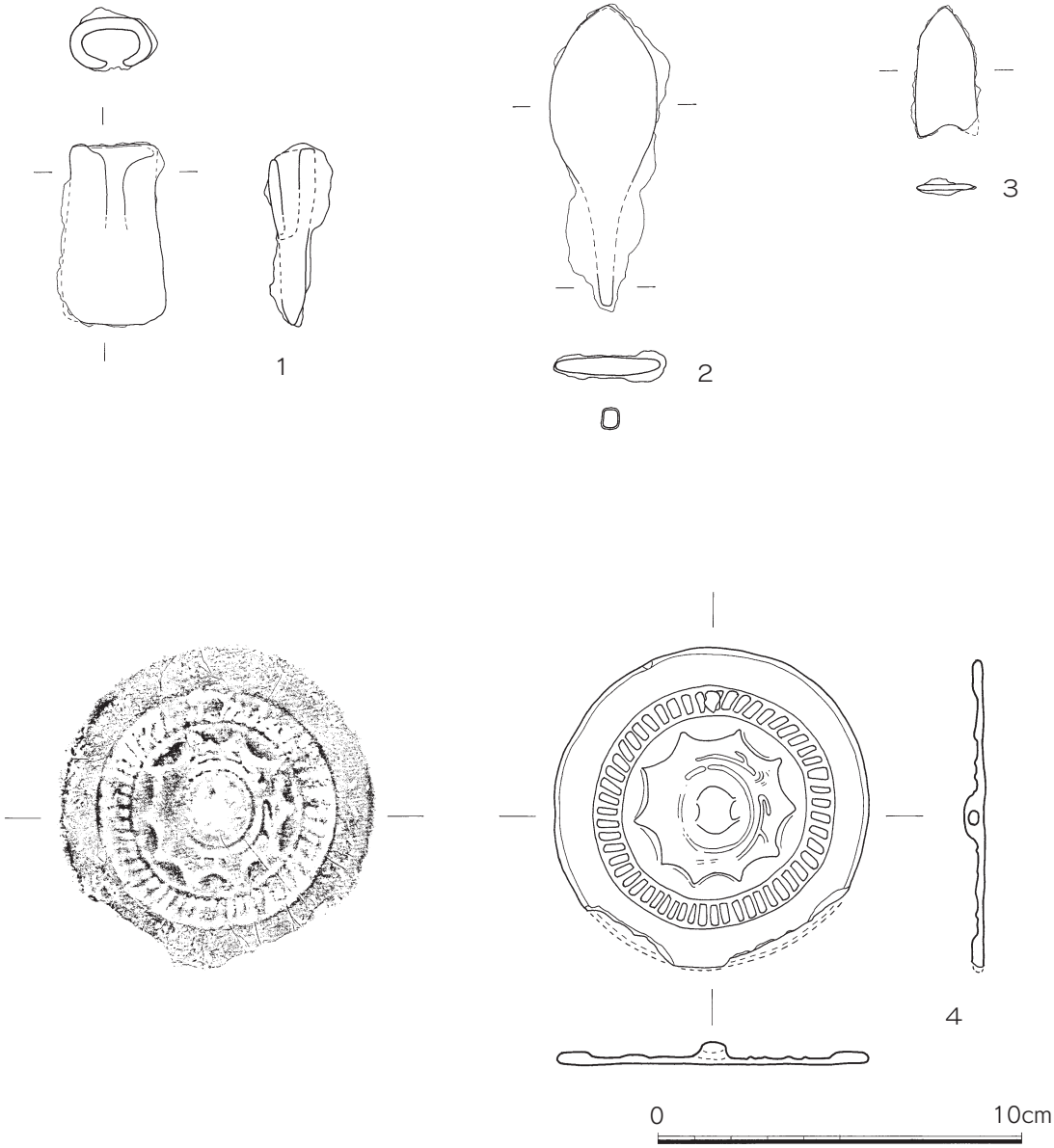
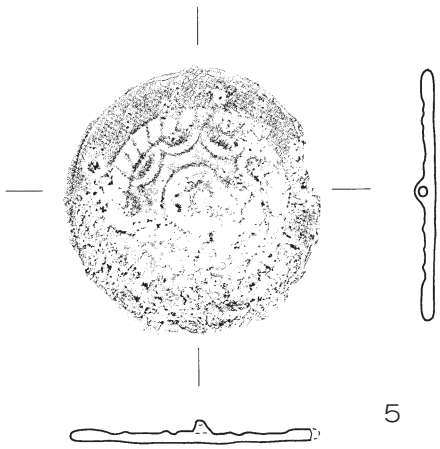


Fig.26　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第310調査区 ST2200前方後方墳周溝跡出土土器実測図





1・2・5　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第310調査区
ST2200前方後方墳周溝出土

3　吉野ヶ里地区Ⅴ区第306調査区P－84小穴出土

4　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第169調査区SD01溝跡出土

Fig.27　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第310調査区ほか出土金属製品実測図

このうち、小型の鉢（3）は、底部が尖る不安定な形をしている。高杯は、４点図示した。このうち、３点の高杯（7～9）は、在地のもので、外反する屈曲部から口縁部にかけて長く伸びており、新しい様相を示す。小型の高杯（10）は、畿内系とみられる。壺は、４点図示した。在地のもの（4・17）と外来系のもの（18・19）に分かれる。特に複合口縁壺（18）は、球胴形の体部に大きく外反する頸部を持つ。複合口縁部には、一条の櫛描波状文が描かれているほか、頸部に刻みを施した突帯を巡らす。その形状から東部瀬戸内系の壺とみられる。体部の上部と口縁部を失欠する胴部下半部の壺（19）は、レンズ状の底部を持ち、胴部中央部で最大径となる。外面には、磨きが施されており、葬送儀礼に用いられた壺とみられる。

ST2200前方後方墳の後方部からは、鉄製品４点、小形仿製鏡１点などの金属製品も出土している(Fig.27)。鉄斧（1）は、全長4.9ｃｍ、袋部幅2.2ｃｍの小型の袋状鉄斧である。先端の一部を欠失するが、ほぼ完形である。鉄鏃（2）は、身が柳葉形を呈する有茎の鏃である。錆びや泥が付着しているが、ほぼその形を知ることができる。全長8.2ｃｍ、身の幅3.0ｃｍと比較的大型の鉄鏃である。後方部から出土した小形仿製鏡（4）は、面径6.8ｃｍと小型である。鏡背の一部に有機質状のものが付着しており、文様帯は一部不鮮明である。この鏡の文様構成は、縁から内側に向かって、粗い櫛歯文帯、連弧文帯、圏線、鈕となる。半浮き彫り状の連弧文の数は、一部不鮮明な部分もあるが、肉眼では、６個確認でき、鏡内区全体では、９～10個と考えられる。この鏡の特徴として連弧文の前面に一条の弧線が巡る。この鏡は、高倉洋彰氏による分類の内行花文鏡系仿製鏡IIa式の亜種と考えられる。

なお、この小形仿製鏡については、2003年３月に発行した佐賀県文化財調査報告書第156集『吉野ヶ里遺跡－平成８年度～10年度の発掘調査の概要』において、第221調査区SD0265溝跡出土として報告していたが、実際には、吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区SD2121溝跡（ST2200前方後方墳周溝跡）から出土していたものであった。この本文をもって訂正としたい。

(2)　第316調査区

第316調査区は、第310調査区の南東に接して設けた調査区で、調査の結果、弥生時代の竪穴建物跡22基、掘立柱建物跡１基、貯蔵穴跡73基(一部土壙も含む)、甕棺墓１基や土壙多数、古墳時代初頭の方形周溝墓１基、古墳時代の土壙２基、奈良時代の土壙９基、中世の溝跡５条・土壙数基などを検出した。丘陵南部地域ではじめて多数の竪穴建物跡や貯蔵穴群が集中して確認されたされた意義は大きく、弥生時代前期から中期にかけての環壕集落内部の状況を知る手掛かりを得ることができた。また、弥生土器に混じって多数の朝鮮系無文土器を出土したことも注目される。

① 遺構

ｉ) 弥生時代の遺構

竪穴建物跡（Fig.29）

調査区の中央から南部に集中して存在する。調査区北部中央に位置する平面隅丸長方形の竪穴建物跡２基以外は、すべて平面円形の竪穴建物跡である。全体を検出できたもので、直径は3.80ｍ～6.55ｍと小型のものと大型のものがある。中央に炉状の穴、その両側に２個の小穴、壁際には４個～６個の柱穴が存在するものが一般的であるが、建物の規模に比例して柱の本数に違いが認められる。

また、壁に接した位置に柱穴と考えられる穴が存在する竪穴建物も存在する。

SH2414竪穴建物跡とSH2431竪穴建物跡は壁に接した位置に柱穴が存在する建物跡で、柱穴が周囲全体に配置されるのではなく、北と南など２方向にまとまって設けられていた可能性がたかい。前者は径4.00m～4.13m、後者は径3.80m～3.94mと小型である。

竪穴建物跡の大半は、柱穴が壁より内側に設けられるもので、図示したSH2442竪穴建物跡で径4.12m～4.27m、SH2400竪穴建物跡で径6.60m、SH2440竪穴建物跡で径4.75m、SH2437竪穴建物跡で径6.10m～6.44m、SH2404竪穴建物跡で径6.55mの規模である。竪穴建物跡は、出土した土器の形態などから、弥生時代前期末から中期後半の所産と考えられる。SH2437竪穴建物跡からは中期初頭の弥生土器に混じって粘土帯口縁をもつ甕片や壺の牛角把手片、SH2440竪穴建物跡からは壺の牛角把手片など朝鮮系無文土器が出土した。

SH2440竪穴建物跡などいくつかの竪穴建物跡の床面には図示していないが径５cm前後の小さな穴が無数に存在し、中から黒曜石やサヌカイトの微細な石片が出土した。利用できるような石片ではなく、けがから免れるために床に埋めたものとも考えられる。

掘立柱建物跡（Fig.30）

掘立柱建物跡は調査区北部で１基のみ確認された。１間×１間の４本柱構造で、2.90m×3.38mと小規模である。柱穴掘方の形態などから弥生時代のものと考えられるが、周辺に後期の遺構がほとんど存在しないことから、竪穴建物跡群と同じ弥生時代中期の所産と考えられる。

貯蔵穴跡（Fig.30）

調査区のほぼ全域に存在する。遺構の遺存状態が良好でないため、貯蔵穴なのか一般の土壙なのかを確実に判別することは困難であるが、現在60基以上は貯蔵穴と考えている。竪穴建物跡周辺には少なく、竪穴建物跡が存在しない空間に多く存在する傾向がある。平面形態は長方形基調のものが大半であるが、平面円形の断面フラスコ状のものも数基存在する。

規模は、図示した貯蔵穴で、SK2402貯蔵穴が1.81m×2.60m、SK2418貯蔵穴が2.00m×2.55m、SK2420貯蔵穴が2.28m×2.60m、SK2449貯蔵穴が1.79m×2.78m、SK2451貯蔵穴が2.45m×3.22m、SK2452貯蔵穴が1.84m×2.70m、SK2492貯蔵穴が2.59m×2.62m、SK2516貯蔵穴が1.07m×2.84mの規模である。

弥生時代前期後半から中期後半にかけての土器などを出土したが、SK2449貯蔵穴からは弥生時代前期末から中期初頭の弥生土器に混じって朝鮮系無文土器の壺の牛角把手片が出土した。

甕棺墓・土壙墓（PL.18）

甕棺墓は調査区中央南部にSJ2528甕棺墓１基が存在する。小型の甕と甕を組み合わせた接口式の合せ口甕棺墓で、埋め戻す際に甕棺の直上に板状の石を置いていた。弥生時代中期中頃の乳幼児を埋葬した墳墓である。土壙墓は調査区北東部にSP2468土壙墓Ⅰ基が存在する。0.96m×1.31mの一次墓壙内に0.52m×0.97m（深さ0.31m）の棺となる壙を設けている。これも乳幼児を埋葬した墳墓と考えられる。

ⅱ）古墳時代以降の遺構

古墳時代以降の遺構としては、古墳時代初頭の方形周溝墓１基のほか、中世の溝跡や掘立柱建物跡

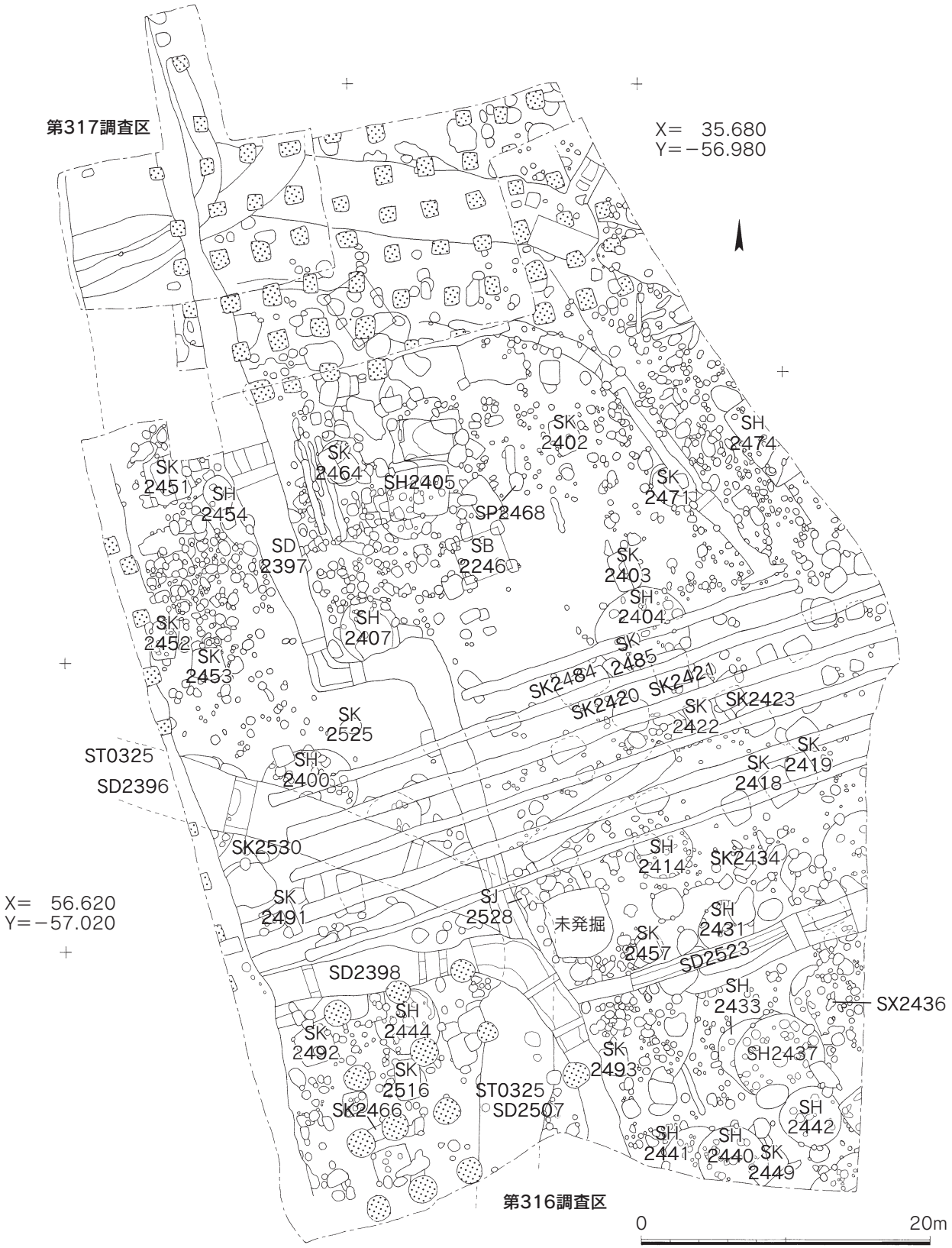


Fig.28　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316・317調査区 遺構分布図

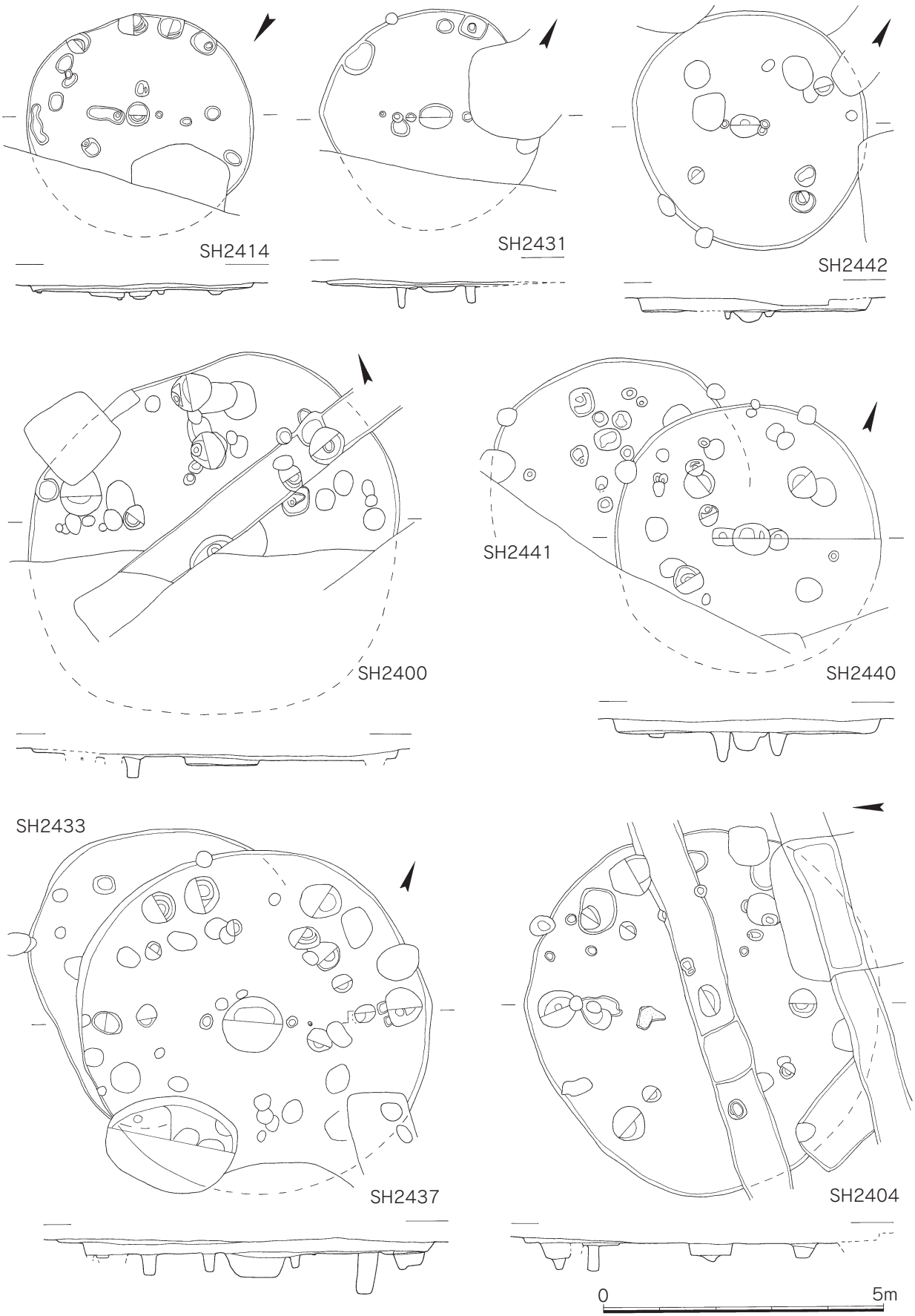


Fig.29　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316調査区 竪穴建物跡実測図

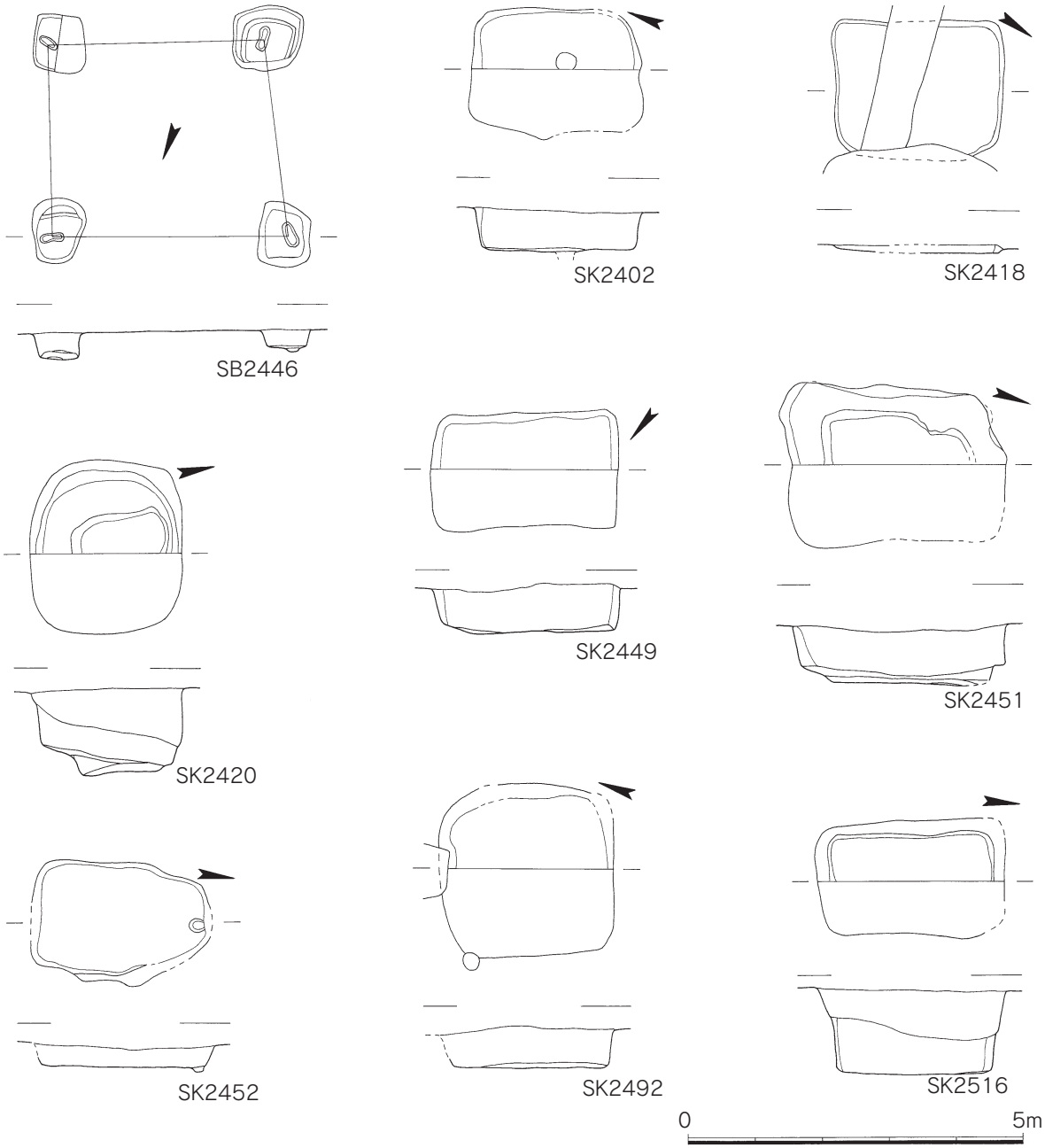


Fig.30　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316調査区 掘立柱建物跡・貯蔵穴実測図

などを確認した。中世の遺構は丘陵が延びる南北方向に延びるものや東西方向に延びるもの、また南北方向から東西方向へと屈曲して延びるものもある。山城などのの曲輪を取り囲むための溝と考えられる。埋土からは土器・陶磁器とともに瓦片も多く出土した。また、調査区北東部一帯の東へ傾斜するあたりでは中世の柱穴をいくつか確認したが、規模などについて明らかにすることはできなかった。調査区南東部に位置するSX2436遺構からは備前焼大甕の上半部が出土した。

ここでは、古墳時代の方形周溝墓について、概要を記しておく。

方形周溝墓

古墳時代の遺構として、調査区南西部で確認されたST0325方形周溝墓がある。第316調査区で検

出した溝跡（周溝…北溝はSD2396、東溝はSD2507）からは弥生時代の土器が出土し、また、この周溝墓を構成する周溝の西側部分は平成６年度の第187調査区の調査でも既に確認されていたものの、出土する遺物が弥生時代のもので占められていたため、弥生時代の特別な空間を取り囲む溝跡ではないかと考えていたものである。この調査区の南に接して設けた田手二本黒木地区Ⅲ区第318調査区の平成13年度の調査で、古墳時代初頭の二重口縁壺を出土したことから、一帯で明らかになった前方後方墳群とともに営まれた方形周溝墓であると確認したものである。

② 遺物

竪穴建物跡出土遺物（Fig.31・32・33）

SH2400竪穴建物跡から中期前半の土器片とともに環状青銅製品２点が出土した。このうち(Fig.31―２)は発掘の際発掘道具があたり少し曲がってしまったが、観察の結果、元来２点とも同じ法量だったと考えられる。(Fig.31―１)は径2.50cm～2.35cm、対角線同士の長さが0.25cm と0.26cmの断面四角形となっている。形状から耳環（耳飾）または指輪と考えられる。

SH2404竪穴建物からは、鉢（Fig.32―１)、甕（Fig.32―２～５)、壺（Fig.32―６・７)、高杯（Fig.32―８)、器台（Fig.32―９・10）が出土した。甕は、鋤先状の口縁部先端が、若干下がり、口縁の内面先端も内側に伸び、須玖Ⅱ式の特徴を持つ。この竪穴建物は、弥生時代中期後半の時期とみられる。

SH2407竪穴建物から出土した壺（Fig.32―11）と甕（Fig.32―12）の２点を図示した。甕の口縁と胴部には、それぞれ一条の刻みが施された突帯が巡り、弥生時代前期末の時期と考えられる。

弥生時代中期初頭（城ノ越式）のSH2437竪穴建物からは、在地の土器に伴って朝鮮半島の無文土器の特徴を持つ口縁に断面円形の粘土紐を巡らした甕（Fig.32―14）や牛角把手壺の把手部分(Fig.32―20）がそれぞれ１点出土している。

SH2440竪穴建物からは、口縁に穿孔を持つ特異な壺（Fig.33―１）が出土しているほか、牛角把手壺の把手部分（Fig.33―２）が出土している。この竪穴建物の甕の特徴から城ノ越式かもう一段階新しい時期（須玖Ⅰ式前半）とみられる。

SH2444竪穴建物から出土した土器のうち２点を図示している。いずれも城ノ越式の範疇で考えられる甕（Fig.33―７）と鉢（Fig.33―８）である。

SH2454竪穴建物から出土した板付式の壺（Fig.33―９）は、胴部に２条の沈線を巡らす。前期でも新しい時期のものか。

SH2474竪穴建物から出土した土器のうち、壺（Fig.33―10・13～15)、甕(Fig.33―11・12）器台（Fig.33―16)の計７点を図示した。壺（Fig.33―10・12）の口縁部は、「く」の字に立ち上がってきており、甕の口縁部（Fig.33―11）もやや「く」の字の傾向が見え始めている。中期後半頃と推定している。

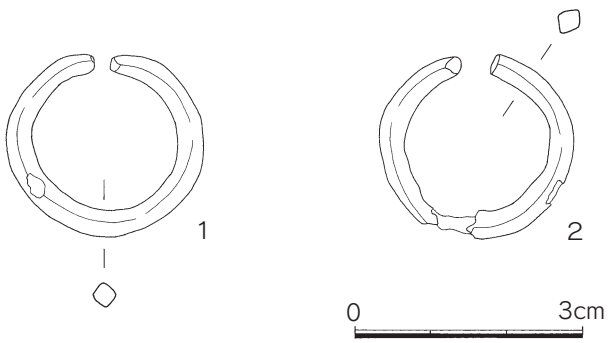


Fig.31　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316調査区
SH2400竪穴建物跡出土環状青銅製品実測図

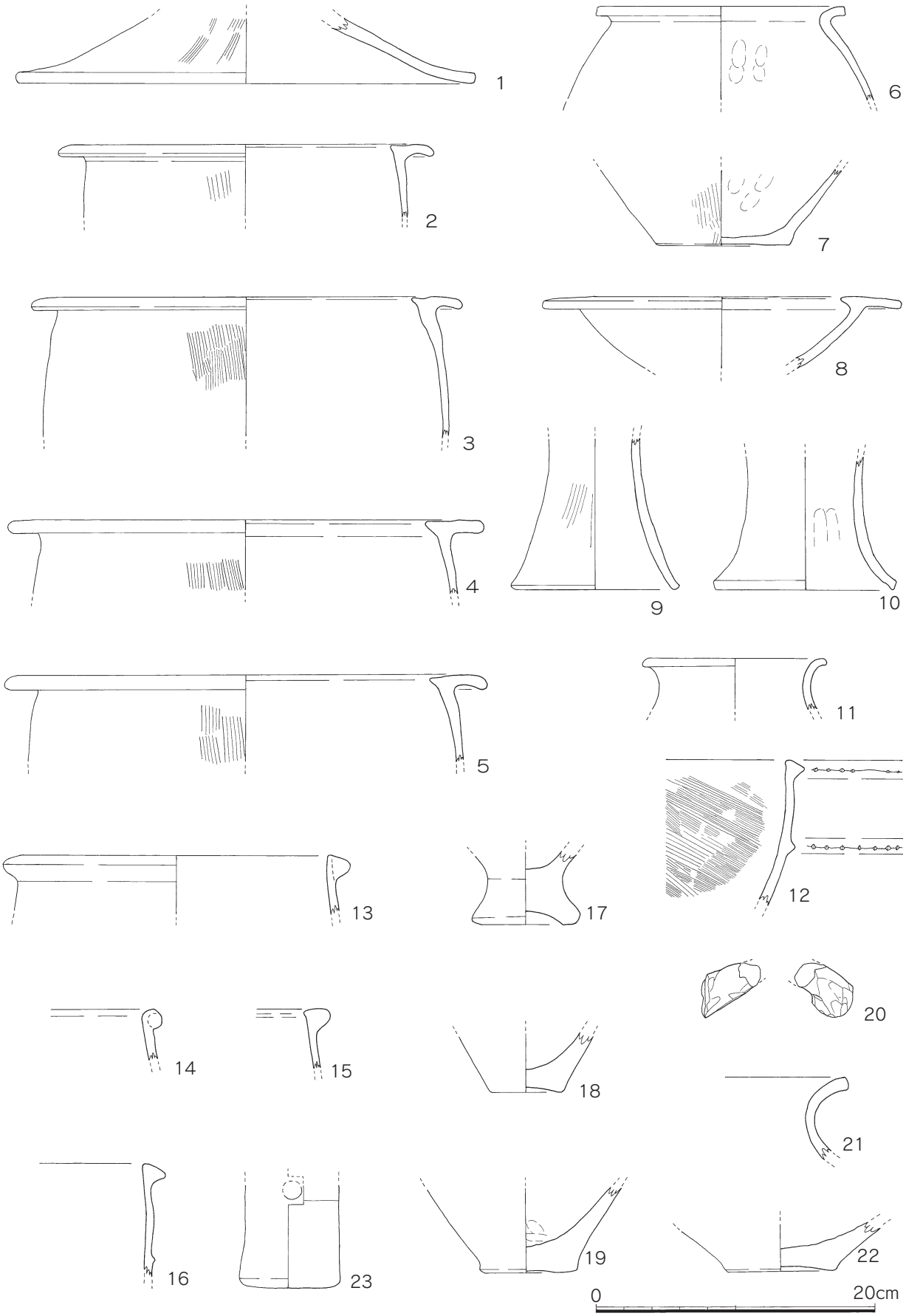


Fig.32　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316調査区 竪穴建物跡出土土器実測図(1)
(1～10はSH2404、11・12はSH2407、13～23はSH2437出土)

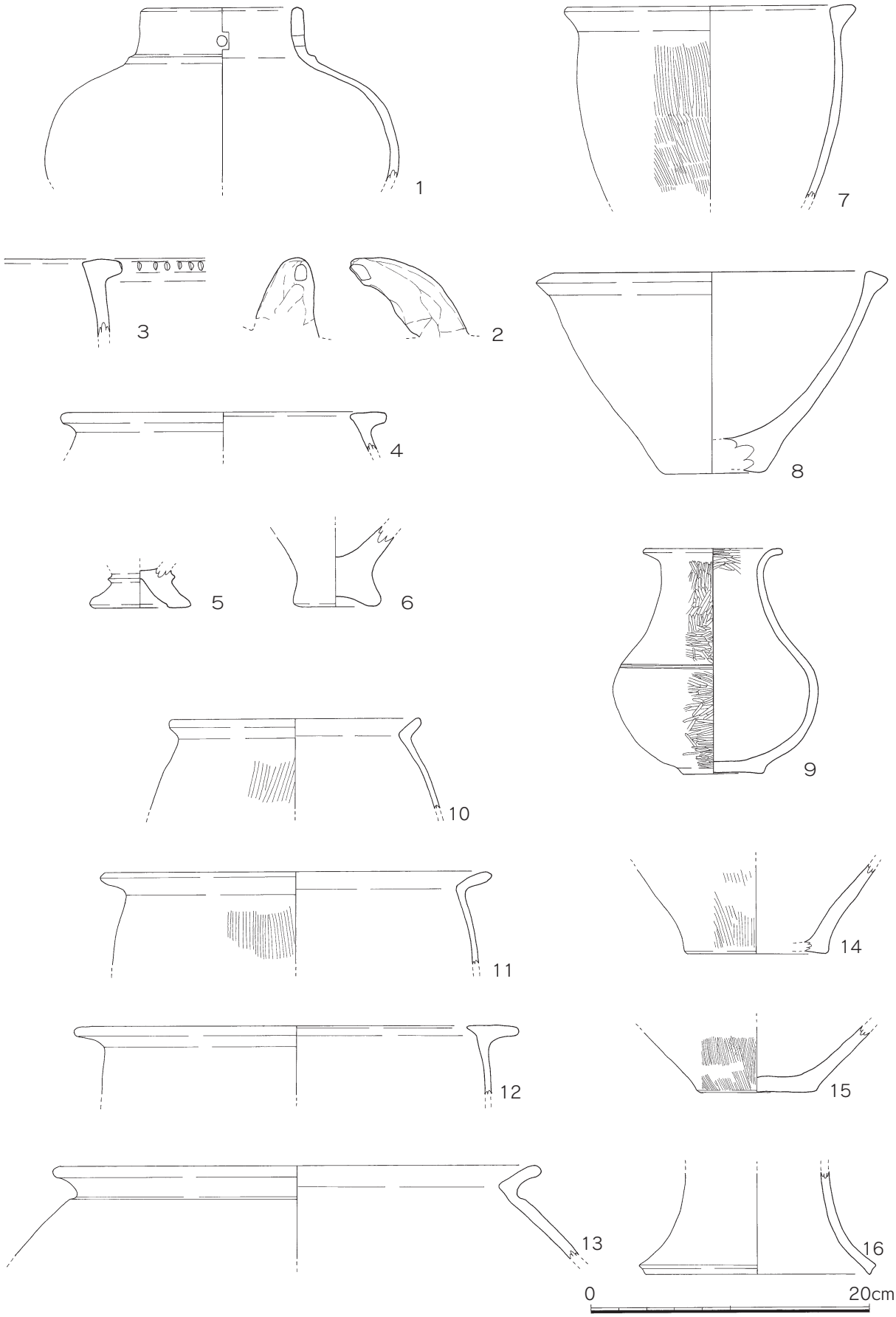


Fig.33　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316調査区 竪穴建物跡出土土器実測図(2)
（1～6はSH2440、7・8はSH2444、9はSH2454、10～16はSH2474出土）

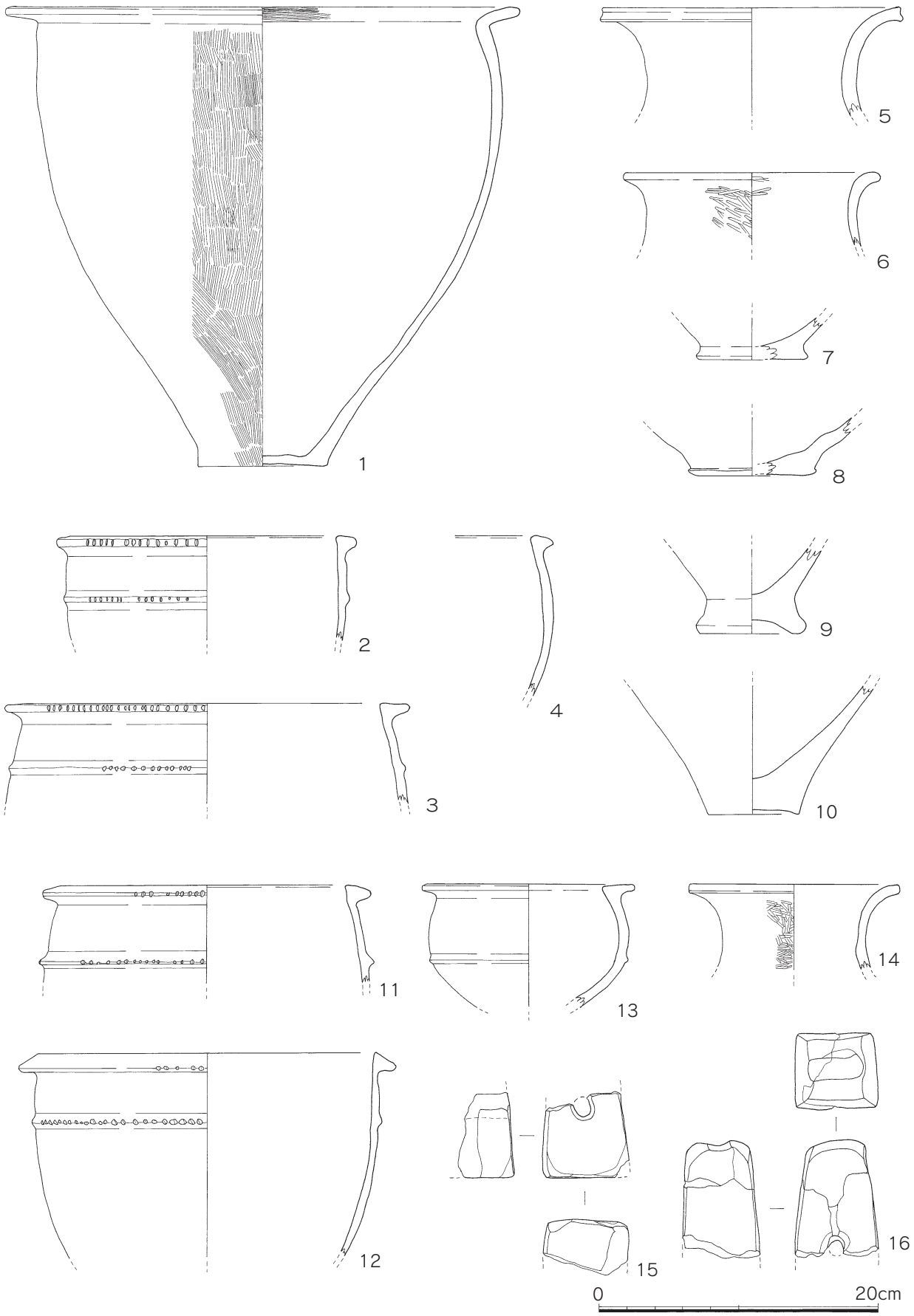


Fig.34　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316調査区 貯蔵穴出土土器実測図(1)
(1はSK2418、2～10はSK2419、11～16はSK2420出土)

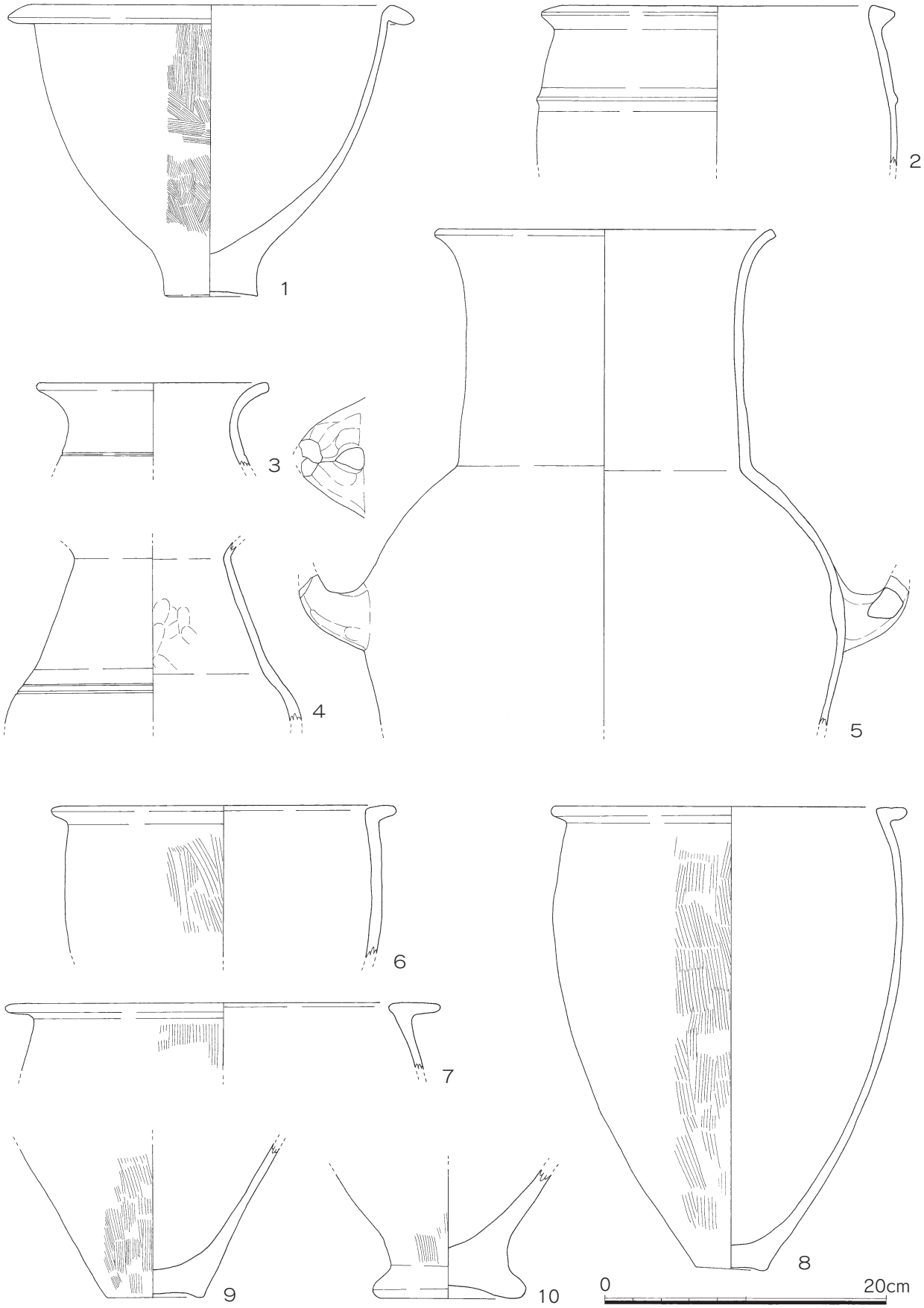


Fig.35　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316調査区 貯蔵穴出土土器実測図(2)
(1～5はSK2449、6～10はSK2451出土)

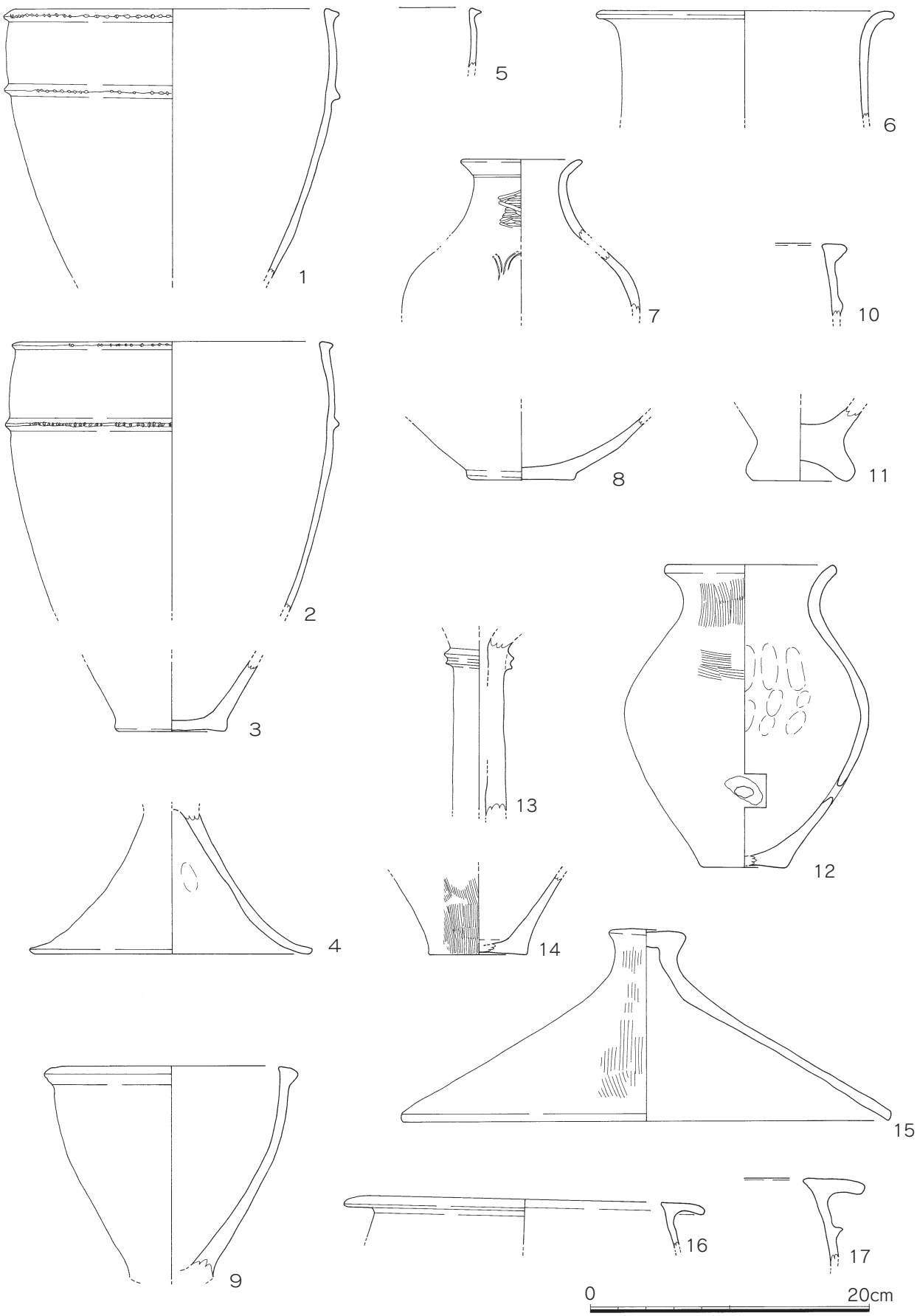


Fig.36　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316調査区 貯蔵穴出土土器実測図(3)
(1～4はSK2452、5～8はSK2464、9はSK2466、10～12はSK2471、13～17はSK2485出土)

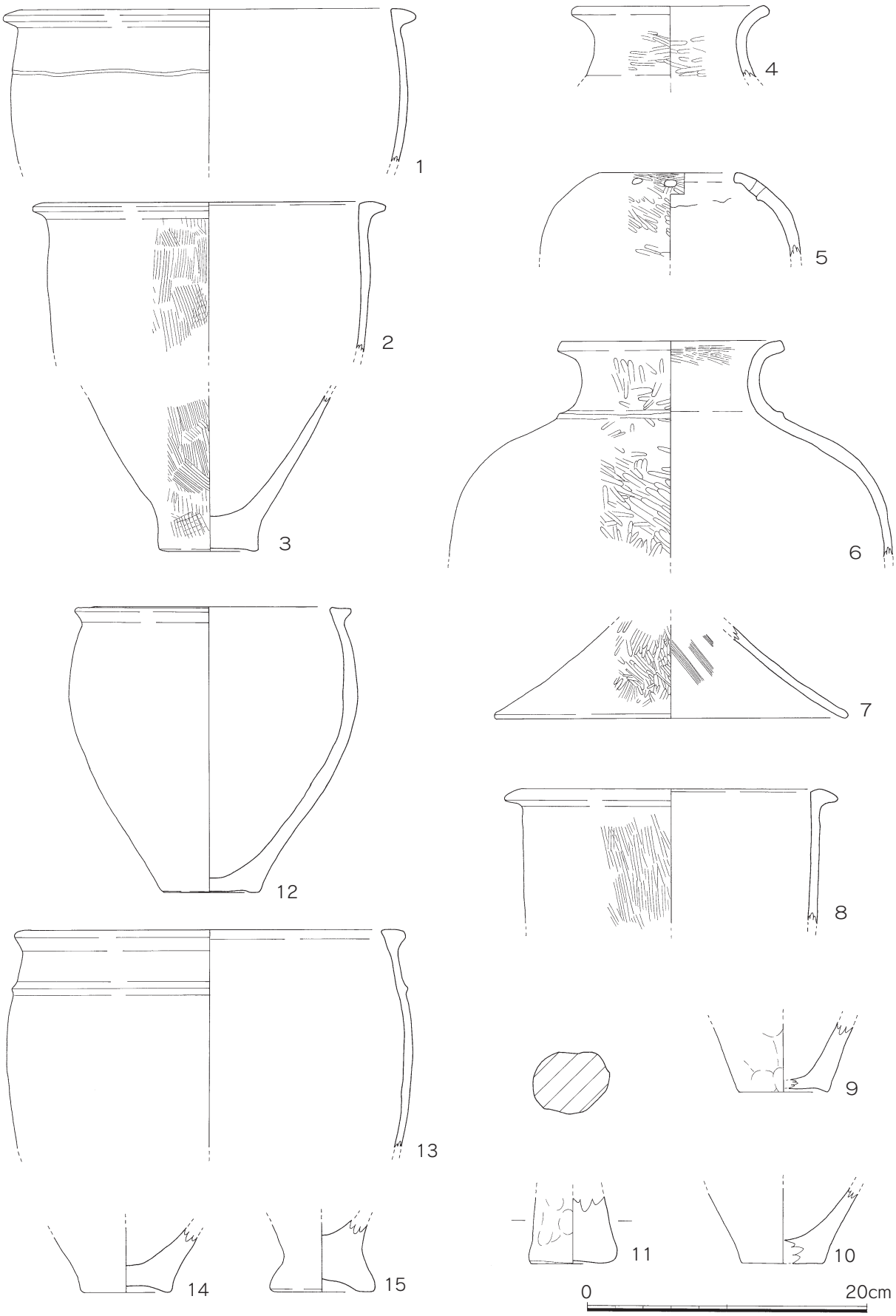


Fig.37　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316調査区 貯蔵穴出土土器実測図(4)
(1～3はSK2491、4～11はSK2525、12～15はSK2530出土)

貯蔵穴出土遺物（Fig.34～37）

SK2418貯蔵穴からは、ほぼ完形の甕１点（Fig.34―12）が出土している。口縁部に「く」の字の傾向がみえることから、中期後半から末にかけての時期とみられる。

SK2419貯蔵穴は、口縁端部と胴部に刻目突帯を巡らした甕（Fig.34―２・３）が出土しており、壺の口縁部（Fig.34―５・６）も前期の特徴を示すものであるが、甕の底部（Fig.34―９・10）は、上げ底気味であり、城の越式の特徴を持つ。この土壙は、弥生時代前期末から中期初頭の時期と推定される。

SK2420貯蔵穴は、上記のSK2427土壙同様、前期末の刻み目突帯文土器（Fig.34―11・12）が出土している。ただし、小形の壺（Fig.34―13）は、鋤先状の口縁部に球胴部の胴部に一条の突線を巡らしており、須玖式Ⅰ式段階に下る可能性が考えられる。また、この土壙からは、穿孔された特異な支脚（Fig.34―14）が出土している。

SK2449貯蔵穴からは、中期初頭の城ノ越式土器に伴って牛角把手壺（Fig.35―５）の上半部が出土している。この牛角把手壺は、頸部が直線的に立ち上がり、口縁部付近でわずかに外反する。この形態は、佐賀市津留遺跡から出土した土器棺墓に使用されたものに近似している。表面は、黒色で、磨きが施されている。

SK2451貯蔵穴から出土した土器のうち、５点を図示した。完形の甕（Fig.35―９）は、鋤先状の口縁部を持ち、須玖Ⅰ式土器の特徴を持っているが、甕の底部（Fig.35―10）には、弥生時代中期初頭の城ノ越式土器の特徴を持つものもある。ここでは、完形の甕を土壙の時期に当て、弥生時代中期前半とする。

SK2452貯蔵穴は、口縁部と胴部に刻み目を持つ甕（Fig.36―１・２）の存在しているため、弥生時代前期末と推定する。

SK2464貯蔵穴から出土した土器のうち、口縁の幅が狭く、胴部に二条の連弧文を持つ壺は、板付Ⅱ式に相当する時期と考えられるため、前期後半頃の土壙と推定する。

SK2466貯蔵穴は、城ノ越式の甕（Fig.36―９）が出土しており、弥生時代中期初頭である。

SK2471貯蔵穴から出土した土器３点を図示した。甕の口縁（Fig.36―10）と底部（Fig.36―11）は、城の越式の特徴を示すため、弥生時代中期初頭の時期と推定される。ただし、頸部にしまりがなく、胴部中央で最大径を持つ壺（Fig.36―12）は、あまり類例がない壺である。

SK2485貯蔵穴からは、丹塗りを施した高杯（Fig.36―13）の脚上半部が見つかっているほか、祭祀用とみられる広口壺（Fig.36―17）も出土しており、祭祀土壙の可能性が考えられる。時期は、弥生時代中期後半である。

SK2491貯蔵穴出土土器（Fig.37―１～３）及びSK2525貯蔵穴出土土器（Fig.37―４～11）、SK2530貯蔵穴出土土器（Fig.37―12～15）は、いずれも城ノ越式の特徴を備えており、弥生時代中期初頭と考えられる。

石器・石製品（PL.22）

第316調査区から出土した石器・石製品のうち器種が明らかなものには、石鏃26点、石斧24点、石庖丁18点、石錐２点、石鎌（？）１点、石剣１点、砥石27点、紡錘車３点、磨石１点、敲石１点、

その他剥片などがある。石鏃は凹基式のもの９点、尖基式のもの７点、抉入りのもの２点、不明４点であり、石斧の内訳は太型蛤刃石斧14点、柱状片刃石斧６点、扁平片刃石斧２点と縄文系石斧２点などである。砥石は粗砥が11点、仕上げ砥が７点、その他・不明が６点である。

これらのうち遺構に伴って出土したものは、石鏃21点（竪穴建物跡出土12点、貯蔵穴出土７点、溝跡２点）、石斧14点（竪穴建物跡出土６点、貯蔵穴出土５点、溝跡出土３点）、石庖丁８点（貯蔵穴出土４点、溝跡出土４点）、石錐１点（竪穴建物跡）、砥石16点（竪穴建物跡出土７点、貯蔵穴出土５点、溝跡出土４点）、紡錘車３点（竪穴建物跡出土１点、溝跡出土２点）、敲石１点（貯蔵穴出土）などとなっている。

Ⅳ．まとめ

１．丘陵南部の弥生時代前期・中期の集落跡について

遺跡南部の丘陵上で実施した工業団地計画に伴う発掘調査や平成元年度以降実施している国庫補助事業による確認調査によって、弥生時代前期から中期にかけての吉野ヶ里集落の状況が明らかになりつつある。特に平成11・12年度に実施した第316・317調査区、平成13年度に実施の第318調査区、さらには平成14年度実施の第346区の調査によって、弥生時代前期の環壕によって囲まれた丘陵頂部一帯に弥生時代前期から中期にわたる集落中心部が存在したらしいことが明らかになった。

弥生時代前期の環壕によって囲まれた面積は、現状では約2.5haと考えているが、その内部から確実に前期に遡る竪穴建物は、前期末の土器を出土するものはあるものの、数基の貯蔵穴を確認したに過ぎない。環壕が果たして集落を防衛するための施設であったのかという疑問も存在する。しかし、環壕埋没の過程で環壕の内外から廃棄された状態で土器片など多数の遺物が出土することなどから、内外に生活の場あるいは施設が存在した可能性が高い。

第310調査区南部から第317調査区にかけて確認された中期の環壕跡以南に弥生時代中期初頭から中期前半にかけての多数の竪穴建物跡や貯蔵穴跡が確認されたが、弥生時代前期の環壕がほぼ埋没した後、その環壕区域を中心として多数の竪穴建物と少数の掘立柱建物跡、貯蔵穴群、小規模な甕棺墓地からなる集落が営まれたことを示している。特に第316調査区から竪穴建物跡22基、貯蔵穴跡60基以上(遺存状態が悪いものが多く、80基程度になる可能性が高い)、掘立柱建物跡１基が検出され、その南の田手二本黒木地区Ⅲ区第318調査区でも竪穴建物跡41基以上や100基を越すと考えられる貯蔵穴跡が検出されたことや、大規模な環壕によって囲まれた内部に位置することなどから、この一帯が弥生時代中期の吉野ヶ里集落の中心的な集落であったと考えられる。竪穴建物跡の大半はいわゆる「松菊里型」とよばれる朝鮮半島由来の住居形態であり、第316・318調査区や平成14年度に実施した第346調査区では、朝鮮系無文土器が数多く出土するなど、環壕集落という集落形態を含め、弥生時代前半期には半島文化の色濃い内容が見て取ることができる。朝鮮系無文土器や半島系磨製石器群などとともに半島系文化のひとつと考えられるものに青銅製環状製品がある。中期前半のSH2400竪穴建物跡内部の小穴から２点まとまって出土したもので、耳飾または指輪と考えられる。

工業団地計画に伴い昭和63年度に実施した田手二本黒木地区の発掘調査の成果と総合してこの一帯の状況を概観すると、丘陵尾根に営まれた弥生時代前期の環壕集落跡の内部一帯に中期になって多

Fig.38　吉野ヶ里遺跡丘陵南部主要遺構分布図

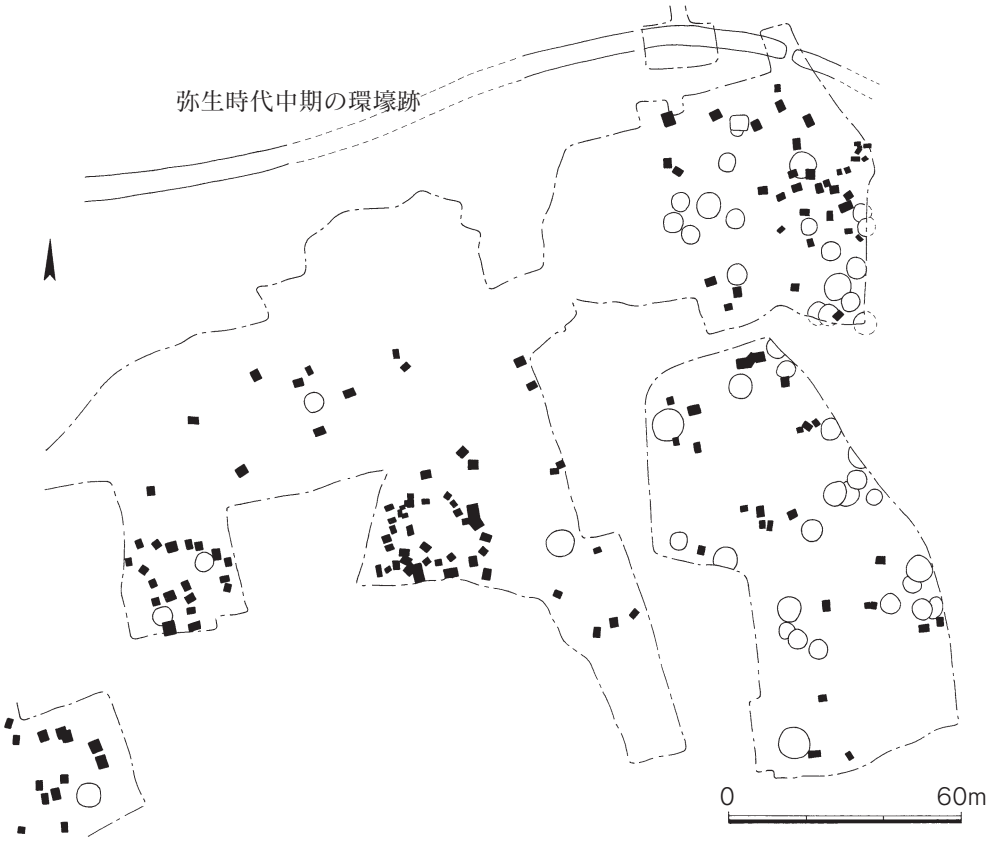


Fig.39　吉野ヶ里遺跡丘陵南部 弥生時代中期環壕集落跡内の竪穴建物跡・貯蔵穴跡分布概略図

くの竪穴建物が営まれたことが明らかになり、吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316調査区と田手二本黒木地区Ⅲ区第318調査区一帯が弥生時代中期の吉野ヶ里集落の中心部だったことも明らかになった。竪穴建物跡周辺には貯蔵穴跡が存在するが、その数は概して竪穴建物の数の４倍程度となっている。集落内部では、竪穴建物の周囲より建物が存在しない空き地に多く分布する傾向が認められる。

また、集落中心部の西方（前期環壕跡西壕より以西）には中期前半前後の貯蔵穴が数多く存在することが工業団地計画に伴う発掘調査で明らかになっているが、貯蔵穴群が平面円形に集中するところが数ヶ所存在している。一帯も遺構の遺存状態が良くないため不明であるが、例えば柵状の施設によって囲まれた空間に貯蔵穴群を設け、まとめて集中管理していたとも考えられる。それらの側には少数の竪穴建物跡も存在しており、倉の管理のための施設であった可能性も考えられる。

本書で報告したように、南内郭跡西方（吉野ヶ里地区Ⅴ区第306・307調査区一帯）の高床倉庫と考えられる掘立柱建物跡群は、主に弥生時代後期後半から終末期にかけて営まれていたが、掘立柱建物跡群が群をなして存在し、その周辺に竪穴建物跡が存在することと似かよっていることは注目される。

なお、丘陵南部の弥生時代前期・中期の環壕集落跡については、平成13年度から15年度にかけて実施した田手二本黒木地区Ⅲ区第318・346・367調査区の分析が終了した段階で改めて報告したい。

２．南内郭西方の掘立柱建物跡群について

弥生時代後期に属する南内郭の西方、外環壕跡の外側に位置する吉野ヶ里地区Ⅴ区（第306・307

調査区）では、弥生時代の掘立柱建物跡や竪穴建物跡、古墳時代の竪穴建物跡、主に平安時代以降の掘立柱建物跡などが多数検出された。中でも弥生時代の建物跡群は、弥生時代後期終末期の時期に属するものが大半と考えられ、同時期の吉野ヶ里環壕集落の構造を考える際の重要な手がかりを提供したと言うことができる。平成10・11年度の調査結果に昭和63年度の成果を総合すると、一帯の弥生時代の状況は以下のように考えられる。

(1)　変遷

南内郭西方の外環壕と西の濠によって囲まれた約3.65haの地域では、南部の谷水田が存在した部分は現代の水田造成など後世に削平されており、削平を免れた部分（田手二本黒木地区Ⅰ区第236調査区）で弥生時代後期前半の掘立柱建物跡６基が検出されたのみであったが、中部から北部にかけては、北部で一部削平部分が存在する以外は概ね良好に遺構が存在していた。

弥生時代中期前半の平面円形竪穴建物跡数基を確認したことから、この時期にはじめて集落が形成されたことが判明した。この時期、東の丘陵上には多数の竪穴建物跡が存在しているが、集落の中枢は、南内郭跡南の環壕集落内部であったことが、平成15年度までの発掘調査で判明しつつある。（なお、中期中頃までの倉庫は穴倉（貯蔵穴）が主体であり、丘陵上の竪穴建物群の周辺で営まれていたが、中期後半になると、西の丘陵裾部で掘立柱形式の高床倉庫が営まれるようになる。）中期後半になると、数基の平面楕円形や隅丸長方形の竪穴建物跡から集落が継続したことが理解できる。時期不明の掘立柱建物跡の中にはこの時期のものも存在した可能性がある。

後期になり、外環壕が掘削され、集落中枢がのちの南内郭が存在する一帯へ移動してくると、この地域にも竪穴建物とともに掘立柱建物が営まれるが、両者とも、後期後半以降に中央で東西方向に帯状に分布する建物群とほぼ同じ分布状態を示している。また、平成９年度に調査を実施した南部谷部でも、この時期に掘立柱建物群が設けられている。なお、中期後半以降中期の環壕集落一帯の丘陵裾部（南西部）に存在した掘立柱建物群は営まれなくなり、集落中枢の移動に伴ってこの地域へ移動したものと考えられる。

弥生時代後期後半～終末期になると、掘立柱建物・竪穴建物ともにさらに増加し、大きく４つの群をなして分布している。多数の掘立柱建物と少数の竪穴建物が営まれる範囲以外には４箇所の広場（空間）が存在しており、建物群は広場と深い関係をもって配置されていると考えられる。また、この時期には吉野ヶ里遺跡では例がなかった２間×２間、２間×３間の大型総柱建物の存在は、倉庫以外の機能をもった建物が出現した可能性が考えられる。

(2)　弥生時代後期後半～終末期の遺構

最も数多くの遺構が集中する弥生時代後期後半～終末期の遺構としては、掘立柱建物跡61基、竪穴建物跡７基、外環壕に沿って走る溝跡１条などがあげられる。建物跡は外環壕と並行する溝跡との間の南北に細長い区域（第１群）、とその北方（２群）、中央部の湾曲する東西方向の区域（第３群）、さらに約20mの間隔をもった南方の区域（第４群）に分かれて分布する。各群の建物跡の構成は以下のとおりである。

建物群１

・掘立柱建物跡８基…１間×１間―２基、１間×２間―５基、１間×３間―１基

1間×1間…SB1385・SB1377、1間×2間…SB1018・SB1095・SB1094・SB1038・

Fig.40　吉野ヶ里遺跡 高床倉庫群跡の遺構分布図（弥生時代後期終末期）

SB1120（SB1110は溝で破壊）、1間×3間…SB1098

・竪穴建物跡0基

建物群２

・掘立柱建物跡８基…１間×１間―４基、１間×２間―４基

1間×1間…SB1145・SB1076・SB1363・SB1364、1間×2間…SB1016・SB1017・SB1019・SB1146

・竪穴建物跡０基

建物群３

・掘立柱建物跡35基…１間×１間―12基、１間×２間―21基、２間×２間(総柱建物)―１基、２間×３間(総柱建物)―1基

〔道路状遺構以北〕

１間×１間…SB1225・SB1331・SB1366・SB1368・SB1371、１間×２間…SB1223・SB1220・SB1369・SB1367・SB1214・SB1368・SB1370・SB1342・SB1215・SB1119・SB1373・SB1130・SB1151・SB1131・SB1150、２間×２間…SB1340、２間×３間…SB1372

〔道路状遺構以南〕

１間×１間…SB1365・SB1357・SB1378・SB1302・SB1199・SB1200・SB1376、１間×２間…SB1204・SB1205・SB1380・SB1379・SB1375・SB1374

・竪穴建物跡６基

〔道路状遺構以北〕

平面長方形…SH1228・SH1226

〔道路状遺構以南〕

平面長方形…SH1169・SH1163・SH1157・SH1154

建物群４

・掘立柱建物跡10基…１間×１間―６基、１間×２間―４基

１間×１間…SB1381・SB1382・SB1384・SB1330・SB1327・SB1201、１間×２間…SB1300・SB1329・SB1383・SB1291

・竪穴建物跡1基

平面長方形…SH1281

その他

・掘立柱建物跡2基…1間×2間―2基（第3群北の広場内）

1間×2間…SB1115・SB1124

以上弥生時代後期後半～終末期に属すると考えられる遺構を列挙したが、もちろんこれらの建物が同時に存在した訳ではなく、時期幅の中で建て替えられたものも存在している。それぞれの建物跡の詳細な規模などについては、特に建物群１には１間×２間の大型建物が多く、１間×３間の特殊な建物が存在していること、建物群２と建物群４は１間×１間のものと１間×２間のものとの比率がほぼ同じであること、建物群３は最も数が多く、同じ区域内での数回の建て替えが認められるといった特徴をもっている。また、建物群３の中央東寄りの部分に位置する２間×２間と２間×３間の２棟の総柱建物は倉庫以外の機能をもった特殊な構造の建物と考えられ、この一帯の施設群の用途や機能を考える際の重要な建物と考えられる。なお、建物群３の建物跡群は東西方向に二列に分布するが、その間には、幅２ｍ～３ｍの道路状の空白が存在することも注目される。

(3)　建物群と広場（空間）

広い空間の中には、建物跡が存在しない広場と考えられる遺構空白地が少なくとも4箇所存在する。建物群１と建物群２・建物群３によって囲まれた平面方形の空白地（広場１）、建物群３の南で建物群４の東を占める平面方形の空白地（広場３）、建物群３と建物群４の間の空白地（広場２）、空間の西を画する濠跡の南部に設けられた出入口（門）を入った部分から北方の空白地（広場４）である。

広場３と建物群４、広場３の南は、その南の谷や落ち込みに向かって傾斜がつよくなるので、建物群や利用できる広場が存在したとは考えがたい。

Fig.41　吉野ヶ里遺跡環壕集落跡概要図

(4)　まとめ

本書で述べた吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316調査区一帯や吉野ヶ里地区Ⅴ区第306・307調査区一帯の調査によって、貯蔵穴群や掘立柱建物跡などの貯蔵施設の変遷がほぼ明らかになってきたと言える。弥生時代前期から中期中頃の集落は、竪穴建物の周辺には必ずと言っていいほど貯蔵穴が伴っており、居住形態である竪穴建物と貯蔵形態である貯蔵穴によって形成されていたことが理解できる。一般の集落内とは違って、環壕集落など地域の拠点的な集落においては、集落中心部に近いか周辺にあたる一定区画内に貯蔵穴群を集中して営んだものと見ることができる。中期中頃から貯蔵穴は減少し、代わって高床倉庫と考えられる掘立柱建物が増加し、居住形態である竪穴建物とは隔たったところに集中して営まれるようになることが、田手二本黒木地区西部の丘陵裾部一帯の調査によって明らかにされている。

弥生時代後期になり大規模な環壕が営まれるようになると、吉野ヶ里地区Ⅴ区第306・307調査区での調査結果が示すように、集落拠点の北方への移動に伴い貯蔵施設も北方に移動したものと考えられる。東側を大規模な外環壕、西側を幅広い壕によって囲郭され、いくつかの門が設けられ、内部空間に掘立柱建物群や広場をもち、さらに溝によって仕切られた内部に大型の掘立柱建物が存在し、道路状の空白地のそばに立て替えられた総柱の高層建物が存在することなどは、古代中国の文献や画像石また発掘資料が示す「市」との共通点も多い。『倭人伝』には「国国有市、交易有無」とあり、地域の拠点的な集落には位置が備わっていたものと読み取ることができる。今後、市の可能性も考慮しながら発掘資料の整理・分析を進めていく必要があると思われる。

３．吉野ヶ里遺跡の前方後方墳群について

(1)　吉野ヶ里遺跡の前方後方墳

吉野ヶ里遺跡から検出された前方後方墳は、工業団地造成計画に伴い、昭和63年度に調査した吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区の２基（ST0941・ST0942）と平成11年度に調査した１基（ST2200）、さらに平成13年度の調査で検出した丘陵南部にある田手二本黒木地区の１基（ST0568）の計４基となった。いずれの前方後方墳の墳丘は、削平されており、主体部もみつかっていないが、周溝出土の土器から弥生時代最終末期から古墳時代初頭頃にかけて造営されたと考えられる。

通常、同一丘陵上に４基もの前方後方墳が相次いで築造されるケースはなく、また、前方後方墳の祖形となる前方後方系周溝墓が誕生したされる東海地域とは地理的にも離れており、吉野ヶ里遺跡における前方後方墳の存在は、弥生時代終末期に営まれた吉野ヶ里遺跡の集落の終焉を考えるうえでも避けて通れない問題である。ただし、全長40ｍの九州最大規模の前方後方墳であるST0568前方後方墳の整理作業がまだ途中の段階であり、すべての前方後方墳の整理が終了するまでに期間を要するため、これまでに得られた吉野ヶ里遺跡の前方後方墳に関する所見を述べる。

吉野ヶ里遺跡に所在する前方後方墳は、標高約20ｍの丘陵の南部に集中する。ST0941・ST0942前方後方墳は、南内郭新段階の環壕が埋没後に前方部を東側に向け築造されている。このうち、北側にあるST0942前方後方墳は、全長約20ｍで前方部先端には周溝が認められない。このため、最初に築造された前方後方墳と考えられる。

ST0941前方後方墳は、後方部の周溝の一部が削平されており、完全な形で残っていないが、全長

約26mの前方後方墳と推定されている。周溝は、全周する。前方部先端には、３基の方形周溝墓が築造され、それぞれの溝を共有する。ST0941前方後方墳からは、竹管文が上下二段に施された畿内系の二重口縁壺が出土しており、築造時期の手がかりとなっている。また、ST0826方形周溝墓の西周溝からは、４世紀前半に下る二重口縁壺が出土している。

平成11年度に調査を実施したST2200前方後方墳は、全長30mの前方後方墳である。この周溝からは、在地の土器に混じり、西側のくびれ部から東部瀬戸内系と考えられる壺の上半部が出土している。壺の内面に赤色顔料が付着しているため、葬送儀礼に用いられたものとみられる。ただし、この土器が他地域から搬入されたものか、吉野ヶ里遺跡周辺でつくられたものかは、現在のところ判断がつかない。

このST2200前方後方墳後方部の周溝からは、小型仿製鏡や鉄鏃、鉄斧等の金属製品が出土しているが、これらの金属製品は、その出土状況からST2200前方後方墳と切り合い関係にある弥生時代終末期のSD2101溝跡を破壊した際に混入したと考えられる。このため、後方部から出土した土器がかならずしも時期を決定する土器とは限らない。葬送儀礼に用いられた西くびれ部の土器が、この前方後方墳の時期を決めるものになるとみられる。

ST2200前方後方墳の特徴のひとつとして、東側くびれ部が深く掘り込まれていることである。このくびれ部分が丘陵のもっとも高いところに位置し、墳丘盛土を確保するために深く掘削した可能性が考えられる。また、東側くびれ部からは、供献された土器がみつかっていない。供献された土器は、東側くびれ部よりも低い位置にある西側くびれ部に転落したものとみられる。

ST2200前方後方墳から南南西方向に約170m離れた田手二本黒木地区に位置するST0568前方後方墳（平成13年度調査）は、墳丘が削平されているが、全長は、約40mで、福岡県朝倉郡夜須町焼ノ峠古墳、長崎県対馬島出居塚古墳と並び、九州最大規模の前方後方墳である。前方部は、ST2200前方後方墳と同様に南西方向を向いている。東西の両くびれ部からは、焼成前穿孔を持つ二重口縁壺や大型の直口壺、頸部に櫛描きを持つ単口縁壺、小型丸底壺などの土器が出土している。この前方後方墳からは、小型丸底壺が初めてみつかったほか、出土した二重口縁壺は、外反する二重口縁部に一条の竹管文を巡らせ、底部は、穿孔の周囲が面取りされており、時期が下る要素をもっている。このため、このST0568前方後方墳の築造時期は、一連の前方後方墳のなかでも新しいものと考えられる。

また、ST0568前方後方墳の北には、大型のST0325方形周溝墓（約30m四方）が接するように築造されており、順序は異なるが、福岡県那珂川町妙法寺古墳群と同様、前方後方墳１基と方形周溝墓１基が対になるタイプである。

以上、吉野ヶ里遺跡に展開する前方後方墳４基についてみてきたが、幾つか問題及び課題について触れる。

(2)　古墳時代初頭の吉野ヶ里遺跡とその周辺

これまでに九州で発見されている前方後方墳の数は22基[1]とされ、弥生時代終末期から古墳時代前期にかけて築造とされている。同一丘陵上に４基もの前方後方墳が展開する場所は、吉野ヶ里遺跡のみであり、全国的にみてもその存在は極めて珍しいものである。全国各地で前方後円墳が営まれるなか、少数である前方後方墳という墳形を採用したのか、今後の課題のひとつである。

また、これら前方後方墳の造営主体となった集落は、どこに位置するのか。この問題については、

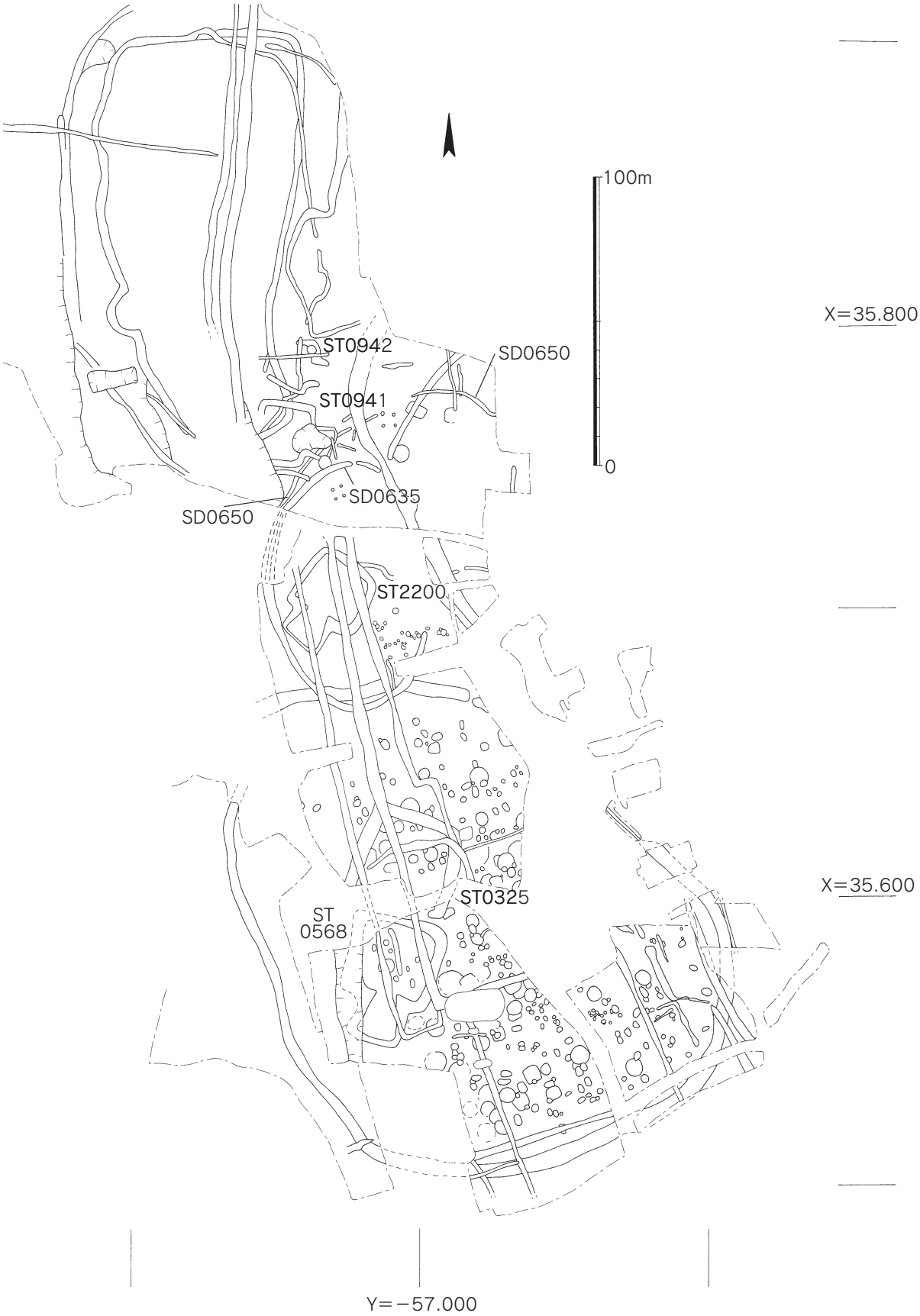


Fig.42　吉野ヶ里遺跡丘陵南部 前方後方墳配置図

北内郭の埋没後、数棟の竪穴建物が存在するほか、吉野ヶ里丘陵西側斜面の高床倉庫群跡（吉野ヶ里地区Ｖ区第306・307調査区）付近でも数棟の竪穴建物が見つかっている。近年、田手二本黒木地区（平成14・15年度）調査で、古墳時代前期の竪穴建物が位置しているほか、土壙から畿内形の手焙り形土器がみつかっており、南の丘陵上にも該期の生活空間が存在している可能性がある。

ただし、弥生時代後期終末期に存在した集落の規模に比べ極めて少なく、貧弱になっている点は否めない。また、吉野ヶ里遺跡西側の自然堤防上に位置する馬郡（まぐり）遺跡や枝町（えだまち）遺跡では、弥生時代終末期から古墳時代初頭の畿内系土器群を含む条濠の南側に方形周溝墓４基があり、この条濠が集落域と墓域を分ける溝跡と考えている。このほか、田手川を挟んで東側の段丘上にある瀬ノ尾（せのお）遺跡などの遺跡でも古墳時代初頭の集落が見つかっており、若干距離が離れているが、前方後方墳の造営主体である可能性が考えられる。

標高約20ｍの丘陵上にある吉野ヶ里遺跡の前方後方墳が望める馬郡遺跡や枝町遺跡が前方後方墳の造営主体である可能性を秘めてはいるが、すでに方形周溝墓群を墓域として確保しており、馬群・枝町遺跡が前方後方墳の造営主体であるためには、墓制の階層差を考えなければならない。いずれにせよ、まだ仮説の域をでない段階であるため、今後の検討課題である。

(3)　まとめ

弥生時代の吉野ヶ里遺跡は、銅剣を副葬した墳丘墓、突出部を持つ北内郭や南内郭の存在を始め、拠点集落が、ムラからクニへと移行する様子を示す遺跡として知られているが、その終焉については、あまり関心が寄せられていなかった。今回、新たな前方後方墳の存在を確認することができ、古墳時代成立以降の吉野ヶ里遺跡の動向に新たな知見が加えられた。ただ、前方後方墳がどのようなルートを経由し生まれたのか、その造営主体は、どこにあるのか、また、不明な点がいくつも存在する。今後、前方後方墳の出現に係わる検討課題の克服に努めて行く必要がある。

註１）九州における前方後方墳の数については、柳田康雄氏（2001）をもとに記しているが、この中には、弥生時代の低墳丘墓と考えられるものも一部含んでおり、本来の数はもう少し少ないと考えている。

参考文献

蒲原　宏行「肥前（壱岐・対馬）」『九州における古墳時代首長墓の動向』九州考古学会・宮崎考古学会合同実行委員会1995

柳田康雄「Ⅲまとめ　１北部九州の前期古墳」『城山遺跡群Ⅳ』夜須町文化財調査報告書第54集 2001

図　版

吉野ヶ里地区Ⅴ区 高床倉庫跡全景（平成元年度調査・平成11年度調査の合成写真、上が北）

吉野ヶ里地区Ⅴ区 第306調査区
SH1157・1158・1160竪穴建物跡

SH1159竪穴建物跡

SH1169竪穴建物跡

SH1185竪穴建物跡

SH1184竪穴建物跡

SH1187・1188竪穴建物跡

吉野ヶ里地区Ⅴ区 第306調査区 SH1194竪穴建物跡

SH1195竪穴建物跡

SH1248竪穴建物跡

SH1281竪穴建物跡

SH1287竪穴建物跡

同土器取上げ後

吉野ヶ里地区Ⅴ区 第307調査区 SH1230竪穴建物跡

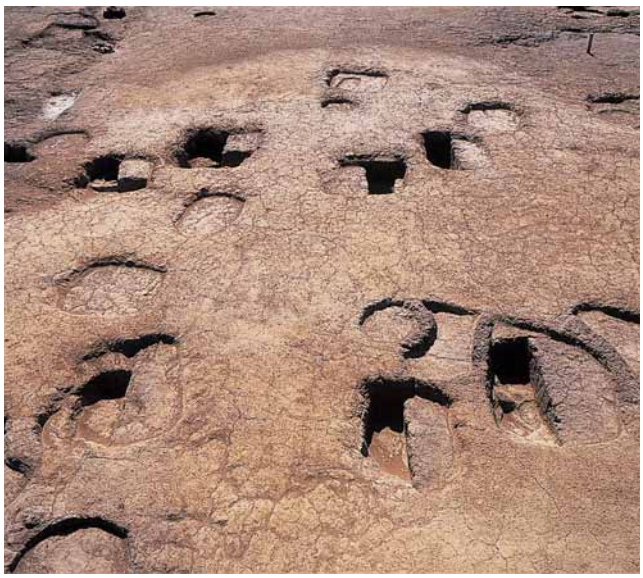
SH1242竪穴建物跡

SH1258竪穴建物跡

第307調査区北部

SH1265竪穴建物跡

SH1267竪穴建物跡



吉野ヶ里地区Ⅴ区 第306調査区 SB1200掘立柱建物跡

SB1201掘立柱建物跡

SB1205掘立柱建物跡

SB1207掘立柱建物跡

SB1208掘立柱建物跡

SB1209掘立柱建物跡

吉ヶ里地区Ⅴ区 第306調査区 SB1211掘立柱建物跡

SB1212掘立柱建物跡

SB1213掘立柱建物跡

SB1215掘立柱建物跡

SB1300掘立柱建物跡

SB1302掘立柱建物跡

吉野ヶ里地区Ⅴ区 第306調査区 SB1330掘立柱建物跡

SB1340掘立柱建物跡

第307調査区 SB1220掘立柱建物跡

SB1221掘立柱建物跡

第306調査区 SB1340・1372掘立柱建物跡

吉野ヶ里地区Ⅴ区 第306調査区 SD1109溝跡（南から）

同（北から）

第307調査区 SX1231円形周溝遺構（弥生時代）

同SX1259円形周溝遺構（弥生時代）

第306調査区 ST1295円形周溝遺構（平安時代）

同SP1348土壙墓（平安時代）

吉野ヶ里地区Ⅴ区 第306調査区 SJ1189甕棺墓

第307調査区 SP1273土壙墓

SP1274土壙墓

SP1275土壙墓

SP1276土壙墓

SP1277土壙墓

SJ1278甕棺墓

SJ1279甕棺墓(左はSJ1278)

吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第310調査区 SH2227竪穴建物跡

SH2245竪穴建物跡

SB2199掘立柱建物跡

SJ2194甕棺墓

SJ2207甕棺墓

SJ2211甕棺墓

吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第310調査区 ST2200前方後方墳周溝跡 Cトレンチ断面

Ａトレンチ断面

Ｄトレンチ断面

Ｅトレンチ断面

Ｇトレンチ断面

Ｆトレンチ断面

西側くびれ部土器出土状況

同壺形土器出土状況

吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316調査区北部（南東から）

第316調査区南部（東から）

吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316調査区 SH2400竪穴建物跡

SH2400竪穴建物跡環状青銅製品出土状況

SH2404竪穴建物跡

SH2405竪穴建物跡

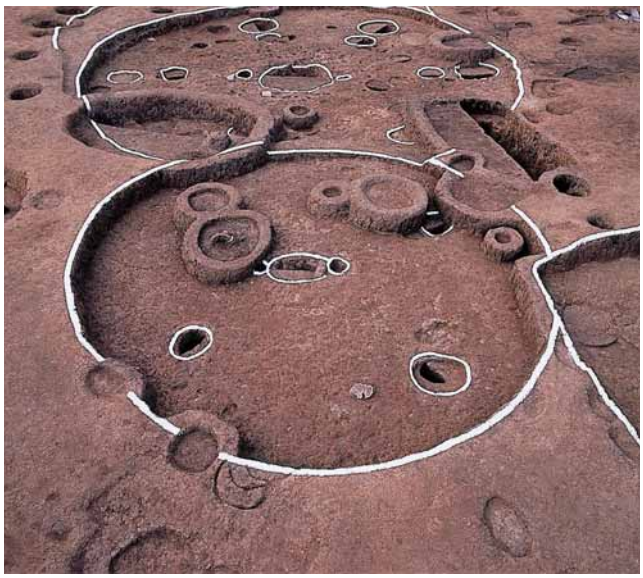
SH2407竪穴建物跡

SH2414竪穴建物跡

吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316調査区 SH2431竪穴建物跡

SH2437竪穴建物跡

SH2440竪穴建物跡

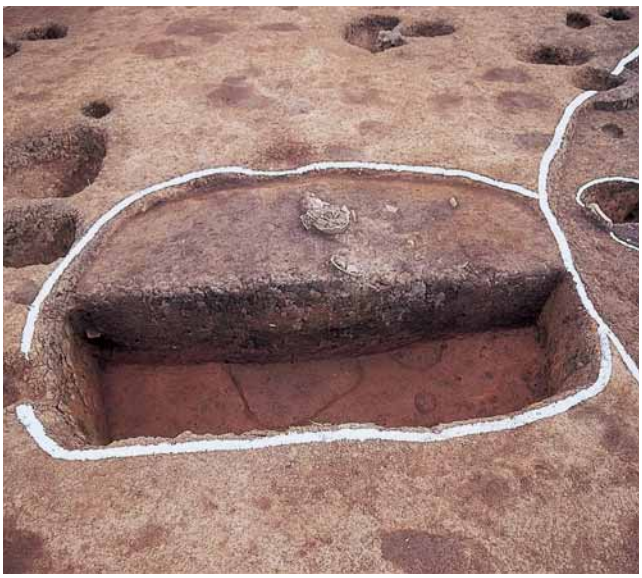


SH2442竪穴建物跡

SH2444竪穴建物跡

SB2446掘立柱建物跡

吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316調査区 SK2402貯蔵穴跡



SK2403貯蔵穴跡

SK2418貯蔵穴跡

SK2419貯蔵穴跡

SK2421貯蔵穴跡

SK2422貯蔵穴跡

吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316調査区 SK2423貯蔵穴跡

SK2434貯蔵穴跡

SK2449貯蔵穴跡

SK2451貯蔵穴跡

SK2452貯蔵穴跡

SK2453貯蔵穴跡

吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316調査区 SK2457貯蔵穴跡

SK2484貯蔵穴跡

SK2485貯蔵穴跡

SK2493貯蔵穴跡

SK2516貯蔵穴跡

SK2525貯蔵穴跡

吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316調査区 SJ2528甕棺墓

SP2468土壙墓

ST0325方形周溝墓SD2396周溝跡４トレンチ断面

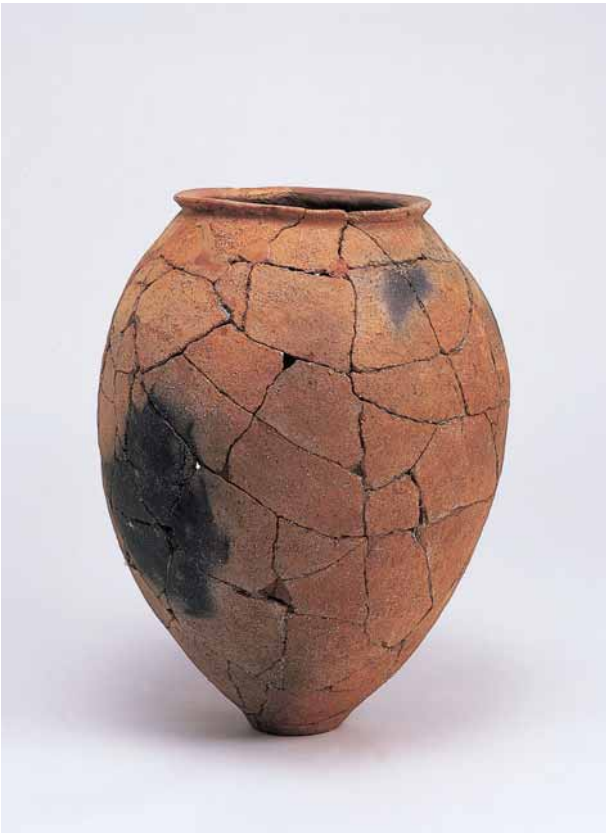
同１トレンチ断面

SD2397溝跡（中世）２トレンチ断面

SX2436遺構備前焼大甕出土状況

吉野ヶ里地区Ⅴ区第306調査区 SH1287竪穴建物跡出土土器群

同大型甕



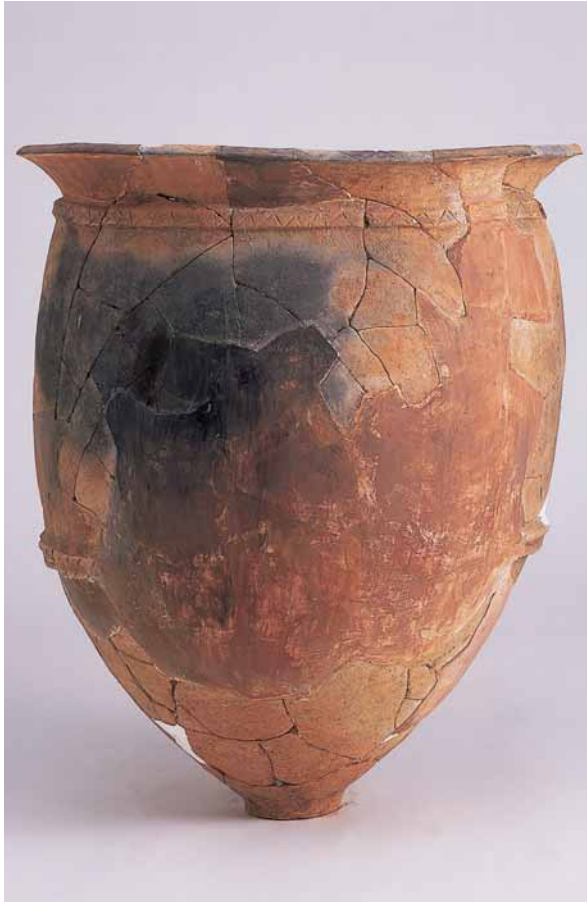
第307調査区SJ1278甕棺

前方後方墳出土土器群（吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第310調査区ST2200・田手二本黒木地区Ⅲ区第318調査区ST0568）

吉野ヶ里遺跡出土小型仿製鏡

上：左から　吉野ヶ里地区Ⅴ区SD0925、吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区SD2208、吉野ヶ里地区Ⅴ区SD0832

下：左から　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区ST2200、吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ区SD0054、吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区57トレンチ



吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第310調査区SK2249土壙出土大型甕

第316調査区SH2400竪穴建物跡出土環状青銅製品

同SX2436遺構出土備前焼大甕

吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316・田手二本黒木地区Ⅲ区第318調査区周辺出土の朝鮮系無文土器群

吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区第316調査区出土石器・石製品

報　告　書　抄　録

ふりがな	よしのがりいせき　　へいせいじゅういちねんど から じゅうにねんどのはっくつちょうさのがいよう
書　　名	吉野ヶ里遺跡―平成11年度～12年度の発掘調査の概要―
シリーズ名	佐賀県文化財調査報告書
シリーズ番号	第160集
編著者名	編者　七田忠昭　、　著者　七田忠昭・細川金也
編集機関	佐賀県教育委員会
所　在　地	〒840-8570　佐賀市城内一丁目１－59
発行年月日	2004（平成16）年３月31日

ふりがな 所収遺跡名 （地区名）	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査対象 面　積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
吉野ヶ里遺跡	佐賀県神埼郡							遺跡の内容の把握、国営歴史公園整備に係る資料を得るため
吉野ヶ里地区 （Ⅴ区）	神埼町 大字　鶴	413216	1031 2081 3079	33° 19′ 16″	130° 22′ 32″	19960401 ～ 19990331	6883	
吉野ヶ里丘陵地区 （Ⅶ区）	三田川町 大字　田手	413232	1001 2014 3013	33° 19′ 16″	130° 22′ 32~40″	20000401 ~ 20010331	3396	
田手二本黒木地区 （Ⅲ区）	三田川町 大字　田手		1002 2015 3015	33° 19′ 6~24″			6459	

所収遺跡名(地区名)	種　　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
吉野ヶ里地区 （Ⅴ区）	集落跡	弥生時代 中世	掘立柱建物跡・環壕跡・溝跡・甕棺墓	各種木製品・漆塗り容器	弥生中期環壕？跡
吉野ヶ里丘陵地区 （Ⅶ区）	集落跡・墓地跡	弥生時代 中世	竪穴建物跡・掘立柱建物跡・環壕跡・溝跡・甕棺墓・前方後方墳	小形仿製鏡・鉄鏃・鉄製鋤先・ガラス小玉	弥生後期壕跡・古墳前期前方後方墳
田手二本黒木地区 （Ⅲ区）	集落跡・墓地跡	弥生時代 古墳時代 中世	竪穴建物跡・掘立柱建物跡・環壕跡・溝跡・甕棺墓・井戸跡・土壙墓		10年度は検出のみ、本格調査は11年度実施

佐賀県文化財調査報告書第160集

吉野ヶ里遺跡

—平成11年度～12年度の発掘調査の概要—

平成16年３月28日印刷
平成16年３月31日発行

編集　佐賀県教育委員会
発行　佐賀市城内一丁目１番地59号
印刷　（株）三光
佐賀県伊万里市大坪町乙4161-1

巻末折込
吉野ヶ里地区Ⅴ区（第306・307調査区周辺）高床倉庫跡群 遺構分布図